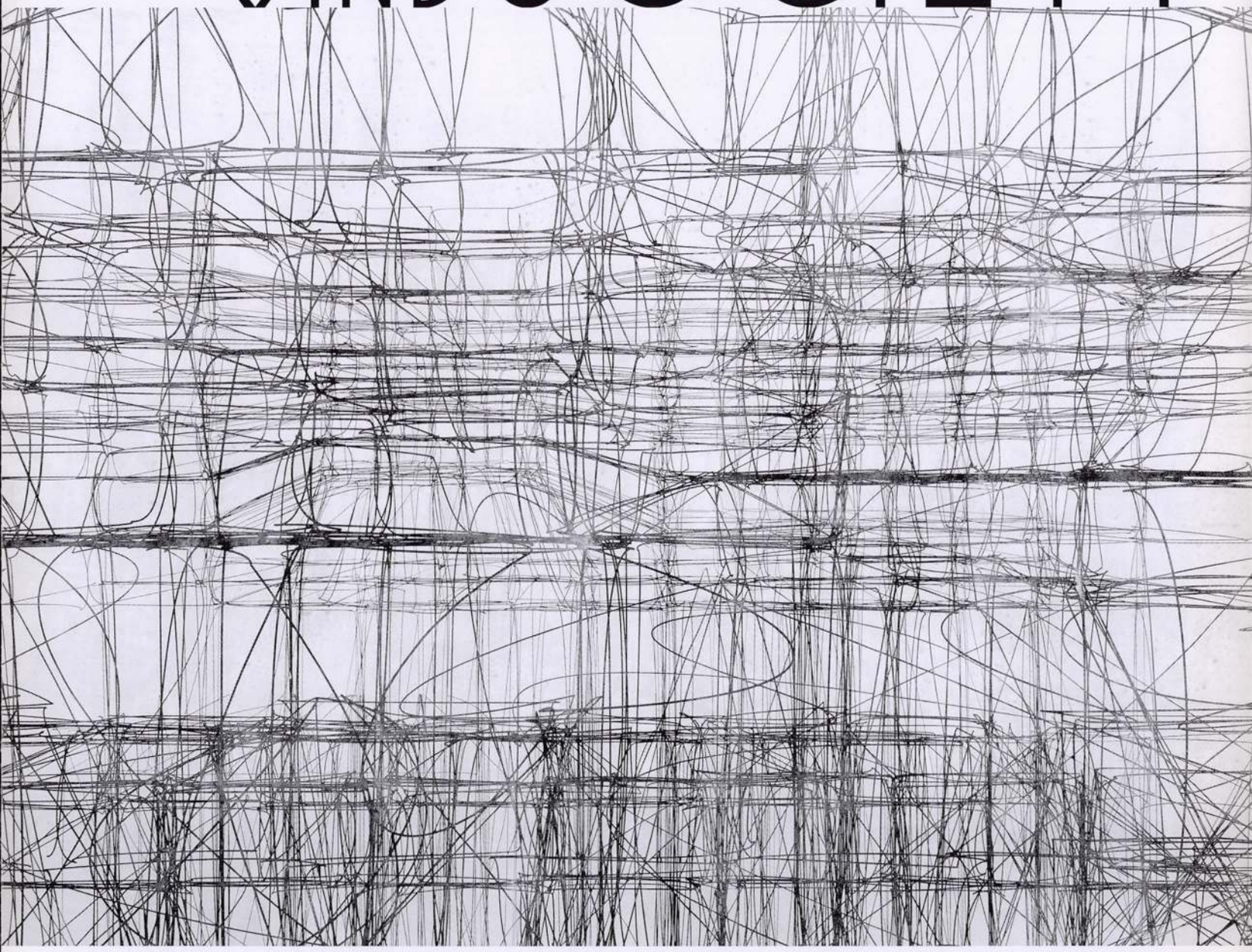
建築と社会

ARCHITECTURE AND SOCIETY

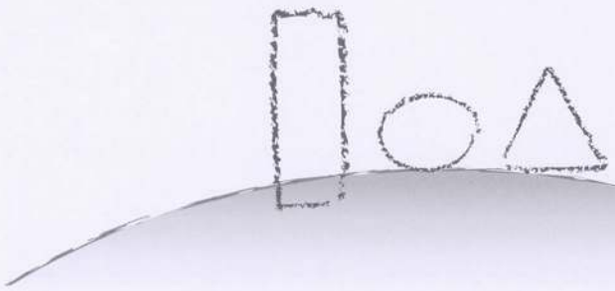


東海支部復活50周年記念総括号

特集＿東海—TOKAIオムニバス

3
日本建築協会　2011

豊かな技術で未来を創造する



確かな品質を！
新高支持力認定工法
Hybridニーディングα=336-880

三谷セキサン株式会社

代表取締役社長　三谷進治

福井本社／福井市豊島1丁目3番1号　TEL (0776)20-3333 (代)
東京本社／東京都台東区柳橋2-19-6　TEL (03)5821-1120 (代)
大阪支店／大阪市中央区北浜東1-22 北浜東野村ビル5F　TEL (06)6920-6611 (代)

東海支部復活50周年記念総括号協賛広告

解体工事専門

株式会社　田中荘介商店

代表取締役　田中利幸

〒462-0059 名古屋市北区駒止町二丁目88番地
TEL 052-991-3641　FAX 052-991-5234
E-mail : tanaka@sousuke.co.jp　URL : http://www.sousuke.co.jp/



熱き思いが
21世紀の風を伝える。

川北電気工業株式会社
本社／〒460-0008 名古屋市中区栄四丁目6番25号 電話(052)251-7111(代表)

平成22年度 第2回通常総会開催

平成22年度第２回通常総会を右記のとおり開催いたしますので、ご出席頂きますようお願いします。
お問い合わせ先：
（社）日本建築協会　総務課
06-6946-6981

と　き　平成23年３月23日（水）
午後4時から4時40分
ところ　大阪マーチャンダイズ・マートビル
地下１階ギャラリー
大阪市中央区大手前1-7-31

議　案　・第１号議案
平成23年度事業計画（案）の件
・第２号議案
平成23年度収支予算（案）の件
・その他

開催通知を個人正会員、団体正会員あて別途送付いたしております。
最近、委任状の提出率が低下傾向にありますので、ご欠席の場合は『返信用ハガキ』にて必ず委任状の送付をお願いします。

第10回 読者と選ぶ「建築と社会」賞のためのアンケート回答募集

2010年1～12月号
「建築と社会」誌から

＊2010年の誌面詳細は、2010年12月号p41に掲載している総目録または日本建築協会HPでご覧ください。

「建築と社会」という本誌の趣旨にふさわしい社会性・環境などに配慮した有意義な建築作品や建築にかかわる論文・記事などを顕彰する。選考にあたっては、会員の声を反映し、広く開かれた賞とする。

■選考対象
「建築と社会」2010年１～12月号に掲載された作品、及び個別の論文・記事を対象とする。
・「作品作風頁」欄、及び「本会支部作品頁及びそれに準ずる作品頁」掲載の建築作品
・「特集頁」掲載の個々の論文・記事
―特集頁全体は選考対象としない―
・「シリーズ頁」の論文・記事（研究の風景、gallery、法令コーナー、構造の頁、設備の頁、再読関西近代建築、関西の建築界／群像、このまちが好き、REPORT頁ほか）

■賞の部門
作品部門／１～４点
論文・記事の部門／１～４点

■会員読者による第一次選考
会員読者から投票された「作品」及び「論文・記事」に、編集委員会の意見を加味して各部門10点程度選出。これを第二次選考対象とする。

■選考委員会による第二次選考
第一次選考を通過した選考対象を、選考委員会で選出。（該当者に写真、図面、設計主旨などの説明資料を求めることがある）

■第10回選考委員
井上雅人（武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科・講師）
江川直樹（関西大学環境都市工学部建築学科・教授）
多田元英（大阪大学大学院工学研究科・教授）
鈴木克彦（京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科・教授、編集委員）

■発表と表彰
作品部門は建築主、設計者、施工者の中の代表者に、論文・記事部門は執筆者（複数の場合は代表者）に、賞状（記念楯）を贈呈する。入賞発表は「建築と社会」2011年７月号予定。

■投票締め切り
2011年３月10日（木）

■送付先
（社）日本建築協会
FAX 06-6946-6984
mail：kyoukai@aaj.or.jp
〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル７階

なお、日本建築協会ホームページhttp://www.aaj.or.jpからも、ご投票いただけます。

「建築と社会」賞 読者アンケート

送付先
㈳日本建築協会
FAX06-6946-6984
e-mail：kyoukai@aaj.or.jp

「建築と社会」2010年１～12月号でよいと思われた作品・論文・記事（特集の場合は個々の論文・記事を対象とする）、その他本誌に対するご意見を記入の上、e-mailまたはFAXで、（社）日本建築協会へご投票下さい。
（2010年○月号掲載の作品、論文・記事名及び同執筆者名を明記してください）

（１）お名前

（２）勤務先または連絡先

（３）とくによいと思われた作品とその理由

（４）とくによいと思われた記事とその理由

（５）本誌についてのご意見や、取り上げてほしい内容などがありましたら、ご記入下さい。

関西大学堺キャンパス新築棟見学会

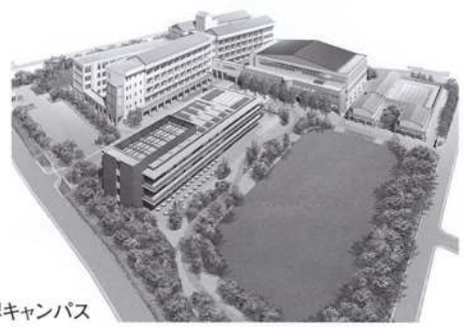
この見学会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
㈳大阪府建築士会（2単位）
㈳日本建築家協会（2単位）

●建築概要
所在地　大阪府堺市堺区香ヶ丘町1-11-1
建築主　学校法人 関西大学
設　計　株式会社 竹中工務店
施　工　株式会社 竹中工務店
敷地面積　30,305.72㎡
建築面積　1,573.15㎡
延べ面積　4,189.63㎡
構造規模　RC造　一部S造
竣　工　2011年3月14日
建物用途　学校

「関西大学堺キャンパス」は、新設の人間健康学部の拠点として、2010年4月に開設された。地域貢献機能をもつ社会に開かれたキャンパスである。
統廃合される堺市立商業高等学校の有効活用を対象に、2008年に堺市が大学等設置の事業コンペを実施し、関西大学による案が採用され、計画がスタートした。
既存校舎はイメージを一新する全面的な改修工事が行われ、既に供用されている。レストラン、図書館、大教室からなる新築棟の開館と敷地全域のオープンスペースの整備により、2011年4月、全施設が完成する。
キャンパスには、地域に開かれた大規模な緑地を新設している。敷地境界に沿って緩やかなマウンドをつくり、地域に在来する様々な樹木を配植した。堺に数多く存在する古墳群を思わせる豊かな緑の景観を創出している。
また、学生が日常的に利用することとなる新築棟は、人間健康学部の理念に結びつく建物とすべく、「五感に働きかける空間」の創出を目指した。目的空間である各階の諸室、WC、EVのボリュームは分散配置され、外廊下や大階段の吹抜けなどの経路空間により繋がっている。そこはいつも風が通り抜ける半屋外空間で、光が入り込む明るい場所、落ち着きのある静かな場所、周辺の緑を身近に感じる場所、池の水面のゆらぎを感じる場所、樹木の花や実の香りのする場所など、人間の多様な感覚に働きかけ、健康へと導く空間となることを意図している。
また、建物南側の奥行3mのバルコニーによる日射負荷低減、積極的な雨水利用、雨水流出負荷抑制、屋上緑化、LED照明等の環境配慮技術の採用によりCASBEE Sランクを実現した。
（大平滋彦・田中光典・松波圭亮）

日　時　2011年3月24日(木)
14：00～16：00
講　師　大平 滋彦　氏
㈱竹中工務店大阪本店設計部
第5設計部門
設計グループ
リーダー 課長）

集　合　現地／正門前
定　員　40名（申込先着順）
参加費　会員1,500円、一般2,000円
学生1,000円
（一般参加費を値下げしました）
申込方法　FAXまたはEメールで、
①催し名「関西大学」
②氏名
③会員・一般の種別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先
⑥連絡先電話番号
⑦CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDを明記。
申込先　㈳日本建築協会編集事業課
TEL.06-6946-6981
FAX.06-6946-6984
E-mail:jigyoka@aaj.or.jp

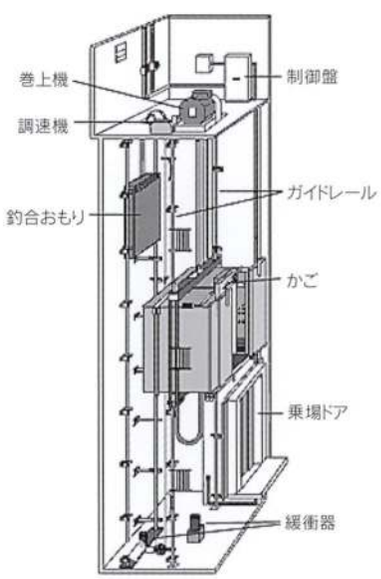

関西大学堺キャンパス

わかりやすいエレベータ新基準解説講習会 —このエレベータは大丈夫?

この見学会は、建築CPD情報提供制度認定プログラムです。
㈳大阪府建築士会（2単位）
㈳日本建築家協会（2単位）



2006年のエレベータ人身事故等を受けて、エレベータの安全に係る技術基準が見直されました。
新築建物に設置されるエレベータは当然新基準によるものになりますが、建物に設置されている数多くの既存のエレベータへの対策について、建物所有者、設計者及び施工者の皆さま向けに、三菱電機エレベータのご協力を得てエレベータ講習会を企画しました。
昇降機の新基準をはじめ、リニューアル、長周期地震動対応など、日頃から気になっているところを、『わかりやすい』を基本に講習会を開催します。
日　時　2011年3月16日（水）
14：00～16：30
（13：30より受付開始）
講　師　三菱電機㈱ビルシステム部
課長：橋詰裕基　氏
三菱電機ビルテクノサービス
㈱昇降機モダニゼーション
部　課長：井上　淳　氏
場　所　近鉄堂島ビル　2階会議室
大阪市北区堂島2-2-2
（集合場所は上記2階会議室）



定　員　30名（申込先着順）
参加費　会員1500円、一般2000円
学生500円
申込み　FAXまたはEメールで、
①催し名「エレベータ講習会」
②氏名
③会員・一般の種別
④職場名または学校名
⑤参加証送付先
⑥連絡先電話番号
⑦CPDを申請される方は、申請先の団体名と参加者IDを明記。
申込先　㈳日本建築協会編集事業課
TEL.06-6946-6981
FAX.06-6946-6984
E-mail:ken-sha@aaj.or.jp

2011年は9月号掲載で、応募締め切りが6月30日となります！

若き創造者たちへ

「建築と社会」平成23年9月号
「第58回青年技術者特集号」へのおさそい

日本建築協会誌「建築と社会」は毎年「青年技術者特集号」を企画し、すでに57回にわたって若き優秀なプランナー、アーキテクト、エンジニアをめざす人たちを紹介してきました。

今回も、青年技術者選考委員会を設けて、青年技術者を選考いたしますが、昨今の建築に携わる技術者の多様化を考慮し、設計だけに限らず、計画、構造、設備、施工およびその他広く、建築に関連する分野から、優秀な青年技術者を募って、その不断の研究努力とすぐれた実績への情熱などを、「建築と社会」に掲載し、顕彰することにしております。

58回の企画にあたり、日常目立たない対象の実績も含めて、優秀な実績を積まれている青年技術者のみなさまのご応募をお待ちしております。

応募提出規定

1．応募される人は満35歳（平成23年７月31日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
（選考合格後の入会も可）

2．原則として、本会会員であるすいせん者を通じて応募する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司か上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。

3．応募分野は特定しない。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等々その他の分野にあって、なしとげたすぐれた実績について、すいせんをうけ、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。

4．提出された資料は「青年技術者選考委員会」にかけて選考する。（なお、提出資料は特に指示のない限り返却はいたしません）

5．「青年技術者選考委員会」において選考された青年技術者は「第58回青年技術者特集号」（平成23年９月号）に掲載するとともに、表彰式を行い、記念品を贈呈する。

6．**提出資料**

■すいせん用紙

請求は、本会事務局、またはすいせん依頼先担当部署へ。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

資料は、④を含めて**A3判用紙5枚以内にまとめる。**

① 設計の場合――鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料

② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）――上に準じた資料

③ 上記以外の分野の場合――それぞれの分野にふさわしい資料

④ 上記①～③のいずれかの資料の実績において、応募者本人が関与した程度、役割、立場等を明らかにし、資料中、**本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明、考え方および将来的展望などについて、2000字以内に平易簡明にまとめたもの**（必要に応じ、図・表を用いて差し支えない）。ただし応募者本人の執筆に限る。**このコンセプトは、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えているので、十分配慮されたい。**

7．**提出期限**　平成23年6月30日（木）

8．**提出先**　日本建築協会「青年技術者選考委員会」
〒540-6591　大阪市中央区大手前1-7-31
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
電話 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984
Email：ken-sha@aaj.or.jp

9．**青年技術者選考委員会**（平成23年度）―折衝中―

委員長　設楽　貞樹／安井建築設計事務所常務取締役
委　員　木多　道宏／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
北村　潤／東畑建築事務所理事設計部長
吉田　文男／一級建築士事務所アトリエフォルム代表取締役
髙梨雄二郎／竹中工務店プロジェクト開発推進本部副本部長(西日本担当)
太田　寛／鴻池組大阪本店建築設計部長
桑原　進／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻准教授
高山　真／日建設計設備設計部門設備設計室
井村　隆／清水建設関西事業本部設備設計部設計長
阪井　聡／大林組大阪本店建築事業部生産技術部部長
山辻　直樹／大成建設関西支店建築部購買管理室課長

第58回青年技術者は、本年6月30日(木)までに応募できるよう準備をお願いします。

（社）日本建築協会から

ご入会のおさそい

建築に関連する各種の活動を行っている日本建築協会に、ご入会になりませんか！

会員は、建築関係の幅広い分野（設計事務所、ゼネコン、官公庁、教育・研究機関、メーカーなど）から個人や団体が参加し、活動しております。21世紀の建築界発展のために、またあなた自身が異業種の方々と交流され、社外ネットワーク形成に役立てていただくことも可能です。

※建築に興味をお持ちの方ならどなたでもご入会いただけます（資格は問いません）。

●会員の特典

★ユニークで新鮮な内容を誇る会誌「建築と社会」が毎月配布されます。
★話題の建築物、一般では未公開の施設等の見学会や建築関係の著名な講師の講演会・講習会に会員割引で優先的に参加できます。
★協会所蔵の貴重な図書・資料の閲覧等ができます。
★会誌「建築と社会」に建築作品、研究報告、レポート、ニュース等を投稿できます。
★青年技術者の顕彰に応募できます。
★協会の各種委員会活動に参画し、様々な情報交換・社外交流の場として利用できます。

●入会申し込み方法

当会ホームページ（http://www.aaj.or.jp）の入会申込み画面に記入送信するか、入会申込フォームをプリントアウトし、FAXまたは郵送にて、下記あてお送りください。

〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31
OMMビル7階
㈳日本建築協会
Eメールアドレス：soumu@aaj.or.jp
TEL：06-6946-6981　　FAX：06-6946-6984

会員の種別と会費

会員の種別			会　費
正会員	個人正会員	本部および支部地域	年額 14,400円
		上記以外の地域	年額 12,600円
	団体正会員		年額 25,000円／口
学生会員			年額　8,400円

建築と社会
ARCHITECTURE AND SOCIETY

|No.1068| 2011 3
日本建築協会

■特集予告
4月号／まちなかのサードプレイス
5月号／身の置きどころ〜めくるめく生活空間〜
6月号／ECO—建築設備がやれるECO技術—

編集委員会(平成22年度)

■副会長
本多 友常
松村 孝治
■編集担当理事
浅野真一朗
上原 正行
木戸 徹
佐藤 栄一
◎設楽 貞樹
竹中 統一
立成 良三
吉村 英祐
■副委員長
米井 寛
勝山 太郎
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
△飯田 匡
鈴木 克彦
田中 直人
高橋 和也
紅谷 昇平
松田奈緒子
三宅 次郎
守井 辰
吉村 英祐
★建築計画系
荒木 宏之
奥村 明孝
菅野 忠司
神戸 嘉也
木多 彩子
楠 敦士
△静 茂夫
下坂 浩和
所 千夏
野田 隆史
枇杷 健一
松森 織江
米山 剛史
★インテリア・住宅系
小倉 一平
加藤 力
△神谷 浩司
黒柳 亮
田中 浩介
戸井賢一郎
ペリー史子
間渕 一博
■構造分科会
秋田 智
△石田 大三
岸本 光平
小芝 淳一
志摩 好宣
瀧野 敦夫
角田 耕一
難波 尚
橋本 宗明
松村 健
向井 洋一

■設備分科会
△赤澤 正治
梶井 宏修
北野 勝也
谷野 太志
夏井 重行
難波 利幸
橋本 直樹
福谷 周
桝井 貴廣
宮崎ひろ志
村上幸三郎
渡邊 裕之
■施工材料分科会
桜井 和男
高橋 秀一
△中川 恒
藤丸 啓一
山岡 篤人
渡邊 聡
■法令分科会
近都 学
河野 学
田上 幸二
西林 浩一
濱崎 秀和
山上 佳之
△吉田 純
鷲尾 真弓
■作品作風小委員会
居内 章夫
○池上 明
稲垣 和江
井上 雅祐
加嶋 章博
倉橋 尚仁
倉渕奈千子
澤田 純一
戸川 勝之
鞆野 淳司
豊田 充広
鳥居 久人
西田 佳代
芳谷 晴彦
増田 敬彦
山田 俊紀
■広告企画小委員会
上田 訓将
大波名俊介
永平 達也
○前田 衛
南澤 浩司
森川 幸信
山辻 直樹
■10年委員会
赤木 隆
門野 陽
川上比奈子
熊田 将男
清水 健司
△菅原 幸也
△中村 文紀
○前川 治彦

◎委員長 ○副委員長 △幹事

印 刷 2011年2月25日
発 行 2011年3月1日
発行人 社団法人日本建築協会
発行所 社団法人日本建築協会
大阪市中央区大手前1-7-31
電 話 06-6946-6981
印刷所 ㈱NPCコーポレーション
定 価 1200円〔税込〕

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます。

Journal of the Architectural Association of Japan

特集●東海支部復活50周年記念総括号
東海—TOKAIオムニバス

■東海支部会員作品2011
豊橋市保健所・保健センター及びこども発達センター —— 14
若狭町立三方中学校エコ改修 —— 16
愛知工業大学八草キャンパス1号館・愛知工業大学自由ヶ丘キャンパス —— 18
愛知淑徳学園 星が丘キャンパス 大学5号館・中高プール・武道場 —— 20
一宮市医師会館・一宮市中保健センター —— 21
知多信用金庫奥田支店 —— 22
愛知銀行豊田支店 —— 24
愛知銀行豊田南支店 —— 25
JA鈴鹿 亀山支店 —— 26
株式会社ヤマダ 津島第2工場 —— 27
トヨタ紡織 猿投開発センター2号館 —— 28
ロータス亀島 —— 29
東亞合成R&D総合センター —— 30
ヒルズウォーク徳重ガーデンズ ヒルズ棟 —— 32
■Tokai Sketch Book —— 34
■岐阜の建築文化にみる遺伝子
三賢人の夢みた空間 —名和靖、武田五一、日下部久太郎— ●杉野 丞 —— 37
岐阜の産業遺産保存の動き●稲生 勝 —— 41
岐阜景観まちづくりと歴史的街並み整備〜自然・歴史・都市の調和〜●山田哲士 —— 45
木の文化の再構築・オークヴィレッジの提案●上野英二 —— 49
■東海の建築：環境／エコ
オーク千種●大林組 —— 53
瀬戸信用金庫熱田支店●竹中工務店 —— 54
若狭町立三方中学校●東畑建築事務所 —— 55
神戸幼児園●安井建築設計事務所 —— 56
■東海支部会員が語る
東海支部復活50周年記念事業を振返って●支部復活50周年記念事業準備委員会 —— 57

会告	平成22年度第2回通常総会開催. 読者と選ぶ「建築と社会」賞のためのアンケート回答募集. 関西大学堺キャンパス新築棟見学会. わかりやすいエレベータ新基準解説講習会—このエレベータは大丈夫?. 若き創造者たちへ「第58回青年技術者特集号」へのおさそい.	1
作品作風	熊本地方合同庁舎	6
	甲南学園甲南小学校 新本館	8
	竹中技術実務研修センター[想]	10
gallery	伝えたい「息をする瓦」と伝統技術●井上亜希子	12
法令コーナー	「建築構造・審査検査要領（2011年版）」●田中慎治	61
構造の頁	築100年煉瓦造建築物の耐震補強●野澤裕和・村上陸太	62
再読 関西近代建築	神港ビルヂング●坂本勝比古	63
関西の建築界群像	末包伸吾●永野一朗	68
REPORT	大阪「かくれたええとこ」再発見ツアー記	70
information	もうひとつの京都—モダニズム建築から見えてくるもの—. 竹原義二/原図展 素の建築. 西宮市大谷記念美術館新収蔵品展. 特集展示「幕末大坂の絵師 森一鳳」. 平成23年建築設備士試験は6月に実施. 第6回NISCイソバンドデザインコンテスト.「第4回サステナブル住宅賞」入賞作品. 3度目のDBJ環境格付融資. 住空間を提案する国際見本市2011年出展募集中	72
月間の動き	平成23年1月分	74

本文 デザイン 高橋善丸

今月の表紙

作品：柳澤顕 表紙デザイン：灰田瑞穂 撮影：Tomas Svab 協力：アートコートギャラリー

dissipative structure A01 2010年／パネルにアクリル絵具／194×130cm

私はモダニズムの均質空間を、ゆらぎをもって非平衡系、すなわち生命的な状態に開いていくことを考えた。そこでベジェ曲線で、遠近法に基づきグリッドを作成し、乱数表を複合的に用い、知覚しがたい空間を作成した。知覚が不均一な流れの中にさらされることで活性化されることが出来ればと考えた。

（柳澤 顕）



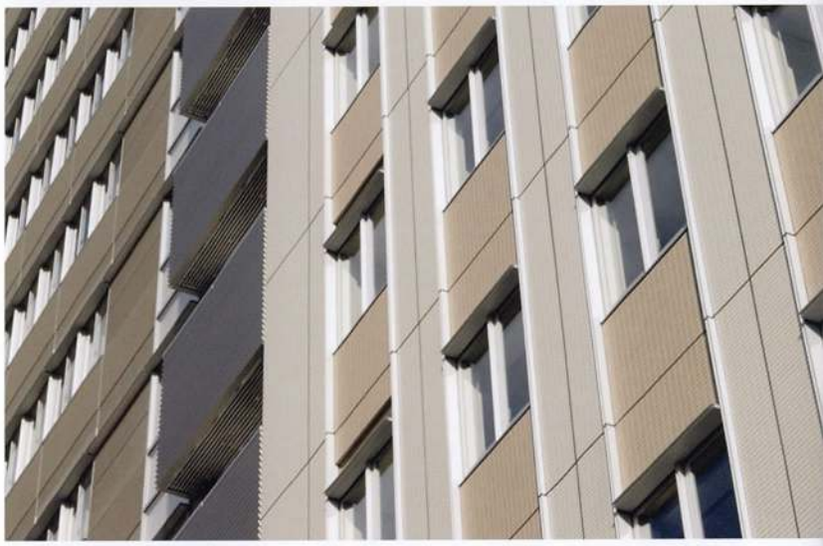
所 在 地――熊本県熊本市春日2-10-1
敷地面積――24,141.21㎡
建築面積――2,206.36㎡
延床面積――26,348.70㎡
構造規模――S造、一部SRC造　地上12階、地下１階
工　　期――2008年２月～2010年11月
最 寄 駅――JR熊本駅
撮　　影――SS九州

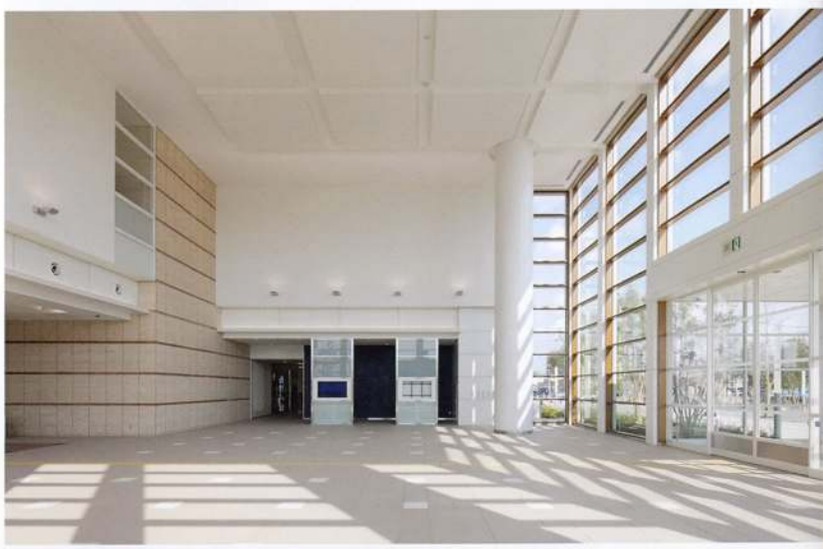
作品

発　注　国土交通省九州地方整備局営繕部
設　計　安井・シーザーペリ設計共同体
　　（外構設計協力：鳳コンサルタント㈱環境デザイン研究所）
施　工　前田建設工業・九電工・東電通・日立プラントテクノロジー・
　　大成設備・三菱電機・木上梅香園

熊本地方合同庁舎







地域に開かれた親しみある庁舎をめざして

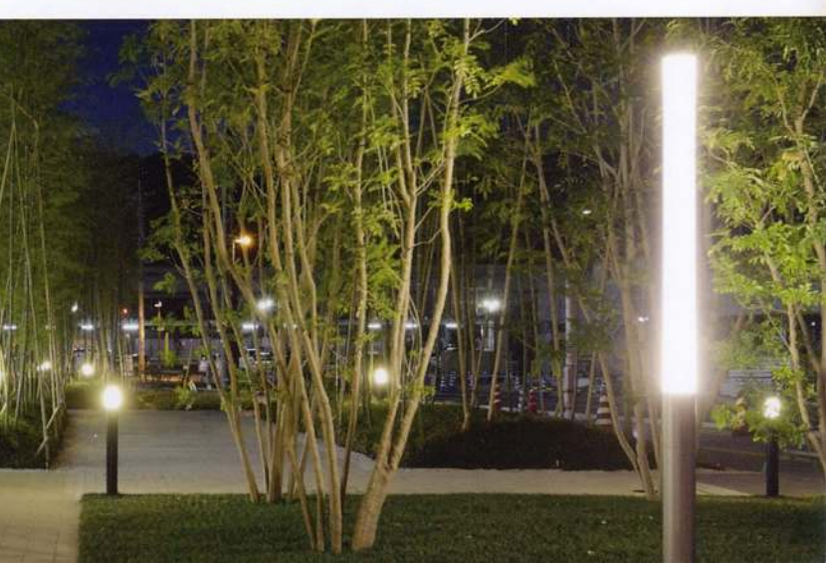
熊本地方合同庁舎は、熊本市内に分散した国の官署の老朽、狭隘解消による行政サービスの向上を目的とし、熊本駅周辺開発の核施設として計画された。設計当初より、新熊本合同庁舎及び周辺地区整備協議会が開催され、地元の意見を取り入れ、地域に開かれた合同庁舎として整備された。ユニバーサルデザイン及び景観整備も進め、地域環境及び市民にやさしい施設、誰もが親しみやすく誰でも立ち寄ることができる合同庁舎を目指している。国の施設として、大規模災害時にも防災拠点として機能できる耐震性能を確保すると共に、太陽光発電、氷蓄熱や雨水の積極的な利用など地球環境に配慮した施設としている。
（設楽貞樹、川原村勝幸、勝原宏幸、小島幸弘、米丸和寿／安井建築設計事務所）

まちなみと調和しながら駅周辺開発の核となるデザイン

人や鉄道・車からの多様な視点が存在する熊本駅周辺の特徴を活かし、観る角度や動きによって異なる表情となる外観とした。タイル打込PCa版の縦基調・リブ状金属板の横基調という素材もデザインも異なる外装で外壁をダイナミックに分節している。環境配慮や防汚対策の観点から、庇のある開口・リブ状素材等を採用し、熊本の強い陽射しを受けて陰影をまとう、端正で品位ある外観とした。外装同様、エントランスホールは白とアースカラーを基調とし、庁舎としての品格の中に熊本らしい色彩を取り入れている。建物・広場の活用方法や棟配置・外観デザイン等、地元協議会で対話を重ねながら進め、地域に開かれた新しい庁舎のあり方をデザイン表現している。
（光井 純、西野隆夫、緒方裕久／ペリ クラーク ペリ アーキテクツ ジャパン）

誰もが集い憩える都市広場

広場の特徴は、素材感のある大小様々な水平面（床）とグリッド状に植栽された木立の組み合わせによって、明確な動線や境界で区切ることなく人々の多様な居方を許容する空間の広がりを確保したことにある。緑の天蓋に覆われた戸外のルームスペースには地元石材を利用したベンチを配置し、周囲を緑に囲われた約400㎡のヴォイド空間は、入居官署や地域住民による屋外イベントが開催可能となっている。また、敷地北西角には、旧熊本駅前広場からクスノキや石のベンチを移植・移設するとともに、かつての旧熊本紡績工場の建物で利用されていた赤レンガを再構築した壁を設けるなど、「土地の記憶」に配慮した計画としている。
（小林政彦、野口健一郎、橋本 瞳／鳳コンサルタント㈱環境デザイン研究所）





作品
作風

建築主■
学校法人甲南学園甲南小学校

設計・監理■
安井建築設計事務所

施工■
建築：大林組
電気設備：きんでん
衛生・空調設備：不二熱学工業

甲南学園甲南小学校 新本館

2011年に創立100周年を迎える甲南学園甲南小学校の記念事業として、本館の次の100年を見据えた施設機能の更新・拡張を、現位置建替えにより行う計画である。
既存各校舎と風致地区の高さ規制により限られた建築可能範囲の中で機能拡張を行うため、多目的ホールと図書室を既存中庭部分の地下に計画し、屋上を緑化して新しい中庭として再生している。
正門からはエントランスホールの吹抜越しにこの再生した中庭を望められる構成とし、児童や来校者をやさしく・気持ちよく迎え入れる玄関を計画した。
バリアフリー化も整備事業のテーマの１つであり、増築を繰り返してきた校舎に存在する床のレベル差をEV等で解消し、校舎全体を段差無く往来できるよう計画している。
外観は既存校舎と同じ素材・色彩を採用して既存校舎との充分な調和を図る一方、落ち着いた住吉の街並みに対して窓に深い掘りを与えて印象のある表情とした。
深い掘りの外観や吹抜けのエントランス、中庭を見下ろす階段など、次の歴史を創る児童にとって印象深いシーンをつくる校舎を目指した。

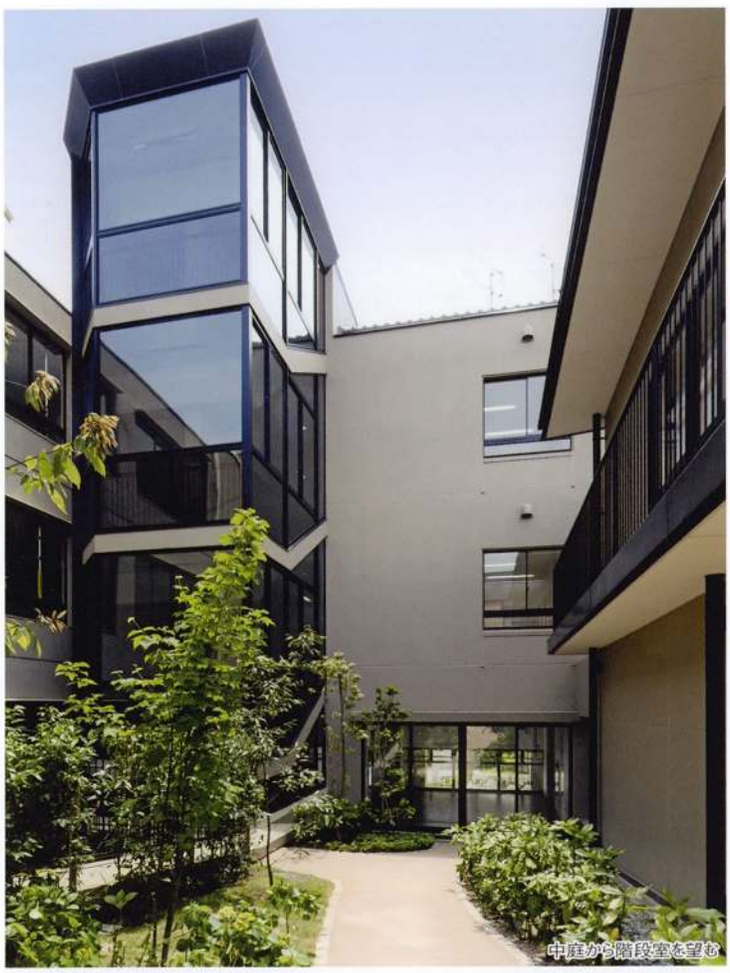
（上野山　貴嗣・安井建築設計事務所）


新本館外観


屋上庭園として再生した中庭


エントランスホール


多目的ホール


中庭から階段室を望む

所 在 地――兵庫県神戸市東灘区
敷地面積――12,247.90㎡
建築面積――　1,169.55㎡
延床面積――　2,905.65㎡
構造規模――RC造　地上４階
工　　期――2009年５月～2010年６月
最 寄 駅――JR住吉駅
撮　　影――SS大阪　津田裕之



作品
作風

設計・監理■
竹中工務店

施工■
竹中工務店

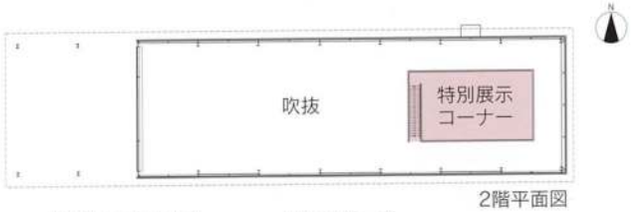
竹中技術実務研修センター「想（おもい）」

川西市郊外にある竹中工務店研修所内に建つ技術実務研修センターである。当センターの基本方針は、これまで蓄積した貴重な財産である「品質のつくり込みのプロセスを確実に次世代に伝承する」ことであり、特に「見て・触れて・体得する」という体験型研修を通じて、ものづくりの「型」を身につけ、磨き抜かれた感性、知識に裏付けされた「棟梁精神」の基本を涵養することである。

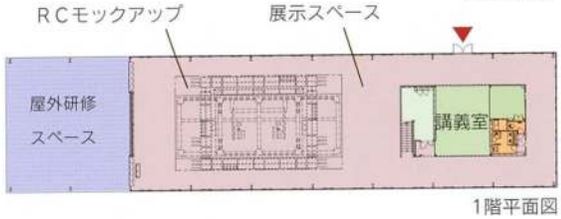
五感を研ぎ澄ませて学ぶ「ものづくり精神伝承の場」として、作業所の状況に近い半屋外の環境をつくり、内外装の素材や構造をそのまま活かし、全体に切り詰めたデザインとした。トップライトのある大屋根の下は、屋内・屋外を一体に使ってさまざまな研修や作業に対応できる無柱のフレキシブルなスペースとし、将来の展示模様替えや拡張にも配慮した。建物内部の展示スペースには、間違いを意図的に埋め込んだ工事中状況のRCモックアップや各種技術の実大モデルを配し、講義室を中心とした諸室は、内部建屋にまとめ入れ子状に配置している。展示の解説には、モバイル端末による音声ガイドや動画ツールを活用し、より理解が深まる展示計画としている。自然通風・自然採光などパッシブな環境技術を最大限に活用し、環境負荷の少ない建築とした。日常から離れた緑豊かな環境を守るとともに、既存の研修施設群との連携を図り、人と自然をつなぐ研修環境を形成している。

（川合智明、大平滋彦、田中光典／竹中工務店）





2階平面図



1階平面図



所 在 地――兵庫県川西市柳谷隠場41-1
敷地面積――79,889㎡
建築面積―― 1,010㎡
延べ面積―― 1,121㎡
構造規模――S造、地上２階
工　　期――2010年６月～2010年11月
最 寄 駅――能勢電鉄妙見線　平野駅
撮　　影――古川泰造



まち 建築 ひと

gallery

伝えたい「息をする瓦」と伝統技術

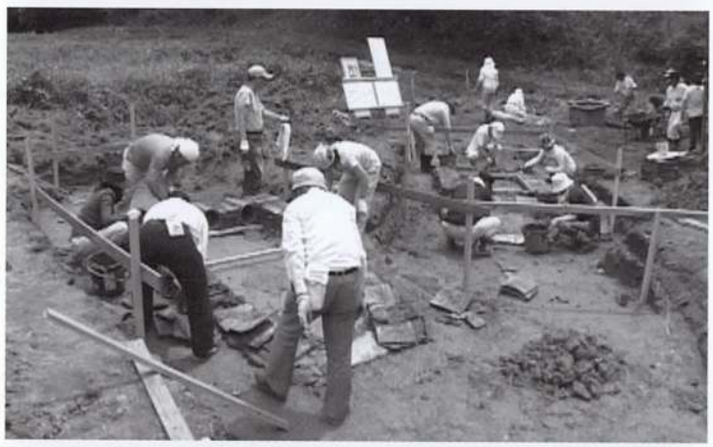
設計
井上 亜希子

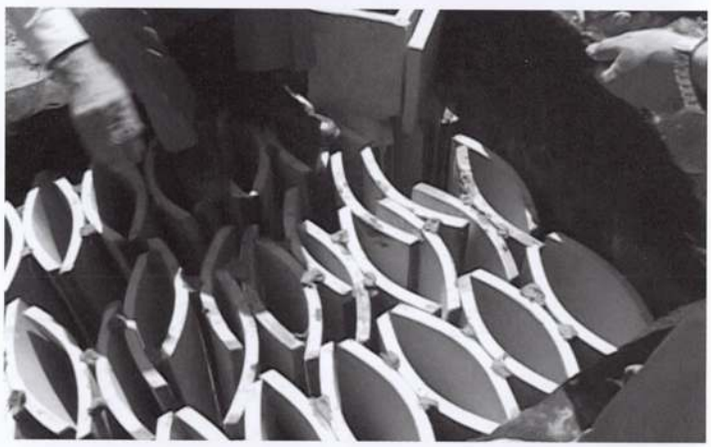
長い年月、日本の美しい風土と景観を形成してきた歴史的な木造建築は、そのなかで先達の素晴らしい技術を伝えてきている。古民家や町家の改修などに携わることの多い私は、NPO法人古材文化の会での歴史的建造物における保存活用にかかわる活動にも参加している。会では「先達の口伝」と称する企画を開催していて、そのひとつとして伝統建築を構成する素材の一つである瓦について、文部科学省選定保存技術保持者である小林章男さんの指導の下で鎌倉時代の瓦焼きの復原的実験をした。長年の豊かな経験にたつ小林さん自説は、歴史的に一番よい瓦が製造されたのは鎌倉時代であって、それがどのように製作されたのかを解明することが実験の目的であった。鎌倉時代のものに倣った平窯2基を復元し、それで実際に瓦を焼き、その瓦の性能を調べてみようというわけだ。小林さんの仮説では、瓦は窯の種類によって性能が違うが、その性能を左右するのは主として瓦の吸水率だというのである。吸水率が多い瓦は、見かけの気孔率が高い、つまり微細な穴が沢山ある。そして文化財建造物の屋根に乗る、「良い瓦」とは「息をする瓦」であるべきだ。吸水率が高いと大気中の水分の吸収が大きく、雨の日は屋根裏の湿気を吸い、天気が晴れれば放出する。そうした瓦は高温多湿の日本の気候風土には適したものであった。現代の製法で作られた瓦は、見かけは美しく、強度面でも申し分ないのだが、吸水率の面からは、昔の瓦に比べて大きく劣っており、湿気の多い時季には瓦の裏面に結露を生じさせ、野地板を腐らせる。建物を長持ちさせるには瓦は昔の、とりわけ鎌倉時代の製法で作られた瓦がよいという説である。実際に、復元実験をした瓦は、吸水率、空隙率ともに、現存している鎌倉時代の瓦に近い数値が試験結果として出された。当時の瓦は、かさ比重も現代瓦に比べて小さいから、現代の真空土練器で作られ、空気を押し出された瓦より軽く、木造建築の構造体への負担を軽減させる。これは一例にすぎないが、歴史的建造物は、このように多くの事を私達に語りかける。古いものを守り理解することも、建築に携わる者の大事な使命であろう。

特定非営利活動（NPO）法人 古材文化の会　TEL075-532-2103　FAX075-551-9811　e-mail kozaibunka@ybb.ne.jp
http://www.wood.jp/kbank　〒605-0981京都府京都市東山区本町17-354
木の住まいや建物を大切に使い続けようとする思いや夢を、現代に実現するためのネットワークです。それは、地球の限りある資源を大事にすることでもあり、木を生かす知恵と技術を次の世代につたえることです。


元興寺











井上 亜希子（いのうえ あきこ）

大阪府出身。大阪外国語大学Ⅱ部外国語学部ロシア語科卒業。建材メーカーにて販売及び建材・住宅設備の商品企画に携わる。その後建築事務所、設計事務所等を経て、現在はフリーランスで古民家や町家の改修等の建築業務に携わる傍ら、歴史的建造物の保存活用等の活動をする。1級建築士。京都市文化財マネージャー。

企画編集　居内章夫（作品作風小委員会）

東海支部会員作品2011

豊橋市保健所・保健センター及びこども発達センター
若狭町立三方中学校エコ改修
愛知工業大学八草キャンパス１号館・愛知工業大学自由ヶ丘キャンパス
愛知淑徳学園 星が丘キャンパス 大学５号館・中高プール・武道場
一宮市医師会館・一宮市中保健センター
知多信用金庫奥田支店
愛知銀行豊田支店
愛知銀行豊田南支店
JA鈴鹿 亀山支店
株式会社ヤマダ 津島第２工場
トヨタ紡織 猿投開発センター２号館
ロータス亀島
東亞合成R＆D総合センター
ヒルズウォーク徳重ガーデンズ ヒルズ棟

「建築と社会」東海特集特別編集委員会
委　　員　　長：佐伯　博
特集記事担当委員：松本壮一郎、林　金之、今津芳清、河田克博
作品作風担当副委員長：土井敬三　担当委員：池村忠久
委　　員（順不同）：鈴木慶智、福田泰三、篠原佳則、後藤利秋、中村哲士
松元親司、山本敦子、芳山明久、本梅　誠、冨田昌志
井上哲也、加藤武範、今井祥子、北川貴啓、石本　真
杉澤和男、寺本英一



芝生広場をやさしく包み込むウォールデザイン

豊橋市保健所・保健センター及びこども発達センター

設　計　安井・竹中設計共同企業体
監　理　安井建築設計事務所
施　工　竹中工務店

所 在 地 —— 愛知県豊橋市中野町字中原100
敷地面積 —— 27,133.18㎡
建築面積 —— 7,458.36㎡
延床面積 —— 12,540.23㎡
構造規模 —— RC造、一部S造　B　—　F　2　P　—
工　　期 —— 2008年12月～2010年１月
最 寄 駅 —— 豊鉄バス（大崎線、中浜大崎線）ほいっぷ前
撮　　影 —— エスエス名古屋

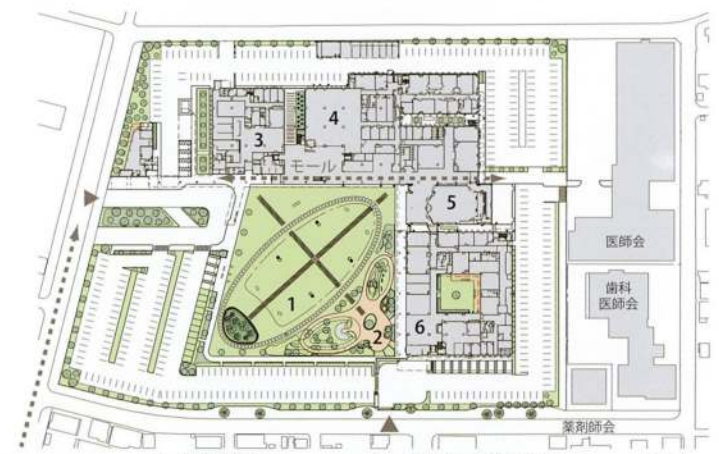
多様化した「保健」に関するニーズに対して、保健所と保健センターを一体的に整備し、更にこども発達センターを併設する事で、保健・医療・福祉サービスを総合的に提供する複合施設である。敷地中央に芝生広場を設え、建物はこれに開放的で、冬季は北西からの「三河のからっ風」を防ぎ、夏季は海側からの風を受け入れるL字型低層のボリュームとしている。広く市民に利用されることから、芝生広場は誰もが出入り自由な「市民の交流スペース」と位置づけ、これを中心に建物も地形も植栽も等価に人間のための環境としてデザインした。

建物はメインアプローチから連続して主動線となるモールを形成し、これに面して各ゾーンの出入口、階段、EVを配する事で、シンプルで分かりやすい動線計画としている。芝生広場に開放的なこのモールは、市民活動のための情報コーナーやギャラリーが一体になっており、ここでの活動が芝生広場利用者と交感される事で積極的な市民活動が広がっていくことを期待している。また、保健所の業務である母子健診とこども発達センターが連続して利用しやすいように、芝生広場の遊具・ベンチ、こども発達センターのインテリアを連続的にデザインした。さらに母子健診とこども発達センターには「親子でふれあえる空間づくり」をコンセプトに、楽しく親しみやすい動物グラフィックを展開し、関連性を意識させる計画とした。

（篠原佳則／安井建築設計事務所　市川健二、久野正博／竹中工務店）



メインアプローチ



1．芝生広場
2．みんなのもり
3．休日夜間診療所
4．保健所・保健センター
5．講堂
6．こども発達センター

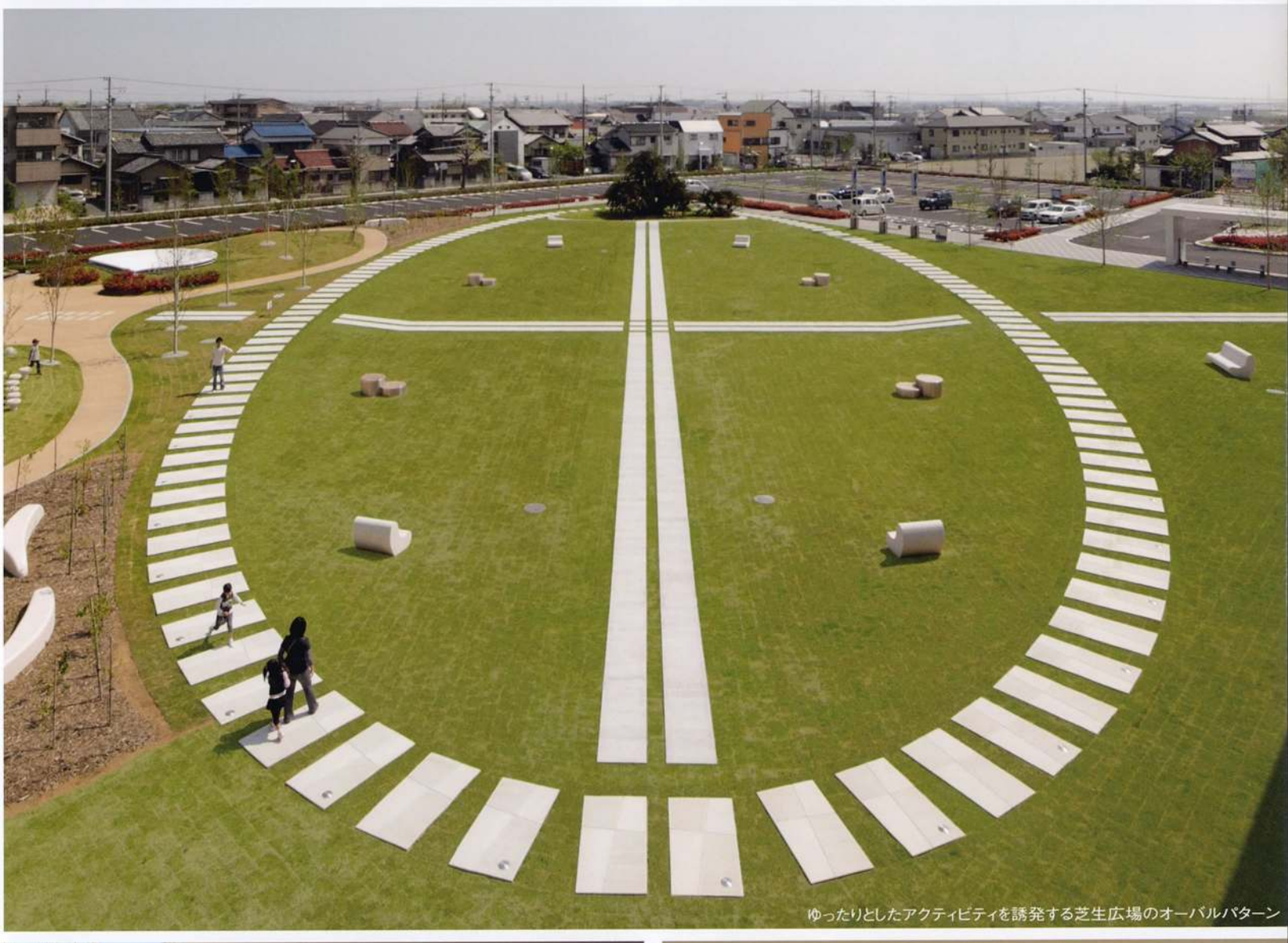
配置図　1/3000



モールの起点となるエントランスホール



モールより芝生広場を見る



ゆったりとしたアクティビティを誘発する芝生広場のオーバルパターン



芝生広場と発達センターをつなぐ半屋外空間



母子健診待合の動物グラフィック



傾斜地を活かして生まれ変わった校舎へのアプローチ：
シンボルツリーである既存の桜を残し、生徒玄関をアプローチ正面に配置し直した。妻壁は三方の縄文の歴史を想起させる地層を模したデザイン、地域のアイデンティティーを活かした。正面に見える塔屋は三方中のシンボル『風の塔』、風の動きを窓の動きで可視化した。

若狭町立三方中学校エコ改修

設計・監理　東畑・山中設計共同体
施　　工　1工区：前田産業・武笠・鳥居建築共JV
　　2工区：ともえ屋・久保田工業・浦見川住宅産業JV

所 在 地 —— 福井県三方上中郡若狭町
敷地面積 —— 27,069.00㎡
建築面積 —— エコ改修部分：1,154.24㎡（内、増築部分 226.28㎡）
　　全体（工事対象外含む）：2,970.85㎡
延床面積 —— エコ改修部分：3,281.25㎡（内、増築部分 464.80㎡）
　　全体（工事対象外含む）：5,454.65㎡
構造規模 —— エコ改修部分：RC造・地価1階、地上3階、塔屋1階
　　増築部分：S造・地上3階、塔屋1階
工　　期 —— 2009年3月～2010年2月
撮　　影 —— SS北陸

敷地はラムサール条約登録湿地「三方五湖」で知られる風光明媚な町、若狭町。バイオマスタウン構想を掲げ、町全体で環境問題に取り組む一環で、環境省モデル事業「学校エコ改修と環境教育事業」に手を挙げた。校舎は量産されたいわゆるハーモニカ型校舎。築40年以上経った校舎を改修により、機能も含めた更新を行った。本計画は「地球温暖化防止につながる学校改修」を目標に3つの柱を軸に進めた。

学習環境の改善

教室の往来が不便な動線、使い勝手の悪いゾーニング、コミュニティ空間の欠如。数多くの問題を抱えた学習環境を学校空間の骨格から見直し、「使いやすくゆとりある校舎」への改善を図った。生徒玄関や環境学習ギャラリーを併設した渡り廊下棟の増築により、校舎に中心性を生み出し、そこから校舎全体にアクティビティが広がる空間構成とした。点在していた特別教室は集約・兼用させ余剰教室を生み出し、使い勝手のよい教室配置にゾーニングし直した。また、クラスルームは学年ごとにまとめ、全て開け放てる木製建具により廊下と仕切り、オープンな学習空間を生み出した。教室間の間仕切は東西方向に可動でき、減少する児童数に合わせて空間ボリュームを可変させ、多様な学習形態にも対応できる柔軟さをもたせた。

温熱環境の改善

※本文中、東海の建築：環境/エコ（P55）を参照。

環境教育への取組（代表的な取組の一つ）

改修前、三方五湖を模した池のある中庭は、緑が生い茂り立ち入れない場所。なんとかしたいという生徒の発案で、五湖は新たに五つの植栽穴で表現され、昔の名残を残しつつも、走り回れるウッドデッキの中庭に生まれ変わることとなった。設計・施工は地元高校生との共同プロジェクトにより行われ、地域施工WSも開催し、中庭づくりにより環境への意識を地域へと広げるきっかけとなった。

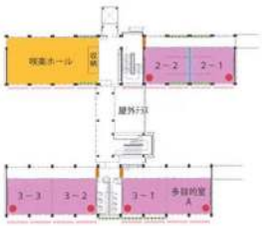
（久保久志/東畑建築事務所）



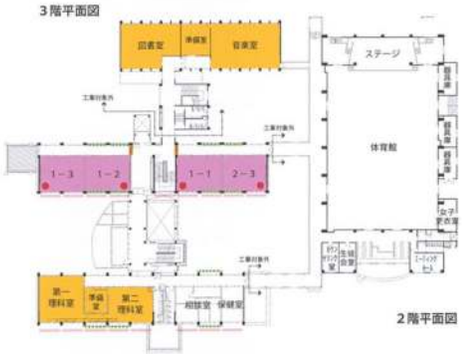
若狭町全景：三方五湖をはじめとした豊かな自然環境に校舎は包まれる。写真下に三方中学校。



裏山の緑と調和した耐震ブレースのデザイン：既設校舎は耐震ブレースにより耐震化を図り、従来のK型ブレースではなく、鋼管ブレースを用いることで、教室内への圧迫感を和らげた。



3階平面図



2階平面図



B1階平面図　1階平面図

04



（改修前）



改修後の校舎と開花した既存桜：ワークテラスは技術の屋外工作スペースやコミュニティバスの待合にも利用している。



（改修前）



北棟と南棟の各階をつなぐ渡り廊下：外からは生徒の活動の様子が見え、中からは若狭町を一望できる。



（改修前）



改修後の教室（建具全開放時）：廊下も一体的に利用でき、北側からの採光により教室内をより明るく。

【環境配慮項目】

- 屋根、外壁の外断熱化
- 複層ガラス（一部、アタッチメント工法採用）
- 屋上緑化
  （軽量自然土壌を詰めたニットチューブを使用）
- 日射遮蔽可動ルーバー
- ドラフト効果による自然換気の促進
  （風の塔（バランス式逆流防止窓）、給気スリット・給気窓）
- 夜間換気（ナイトパージ）
- 雨水利用（便所の洗浄水、植栽への散水）
- 省エネ型空冷ヒートポンプエアコン
- Hf照明器具（一部、人感センサーによる制御）
- 節水型衛生器具
- 太陽光発電（13KW）
- ペレットストーブ（一部、床暖房用）
- 内装木質化、地域材の利用（ホール内装等に県産杉の使用）
- 地域間伐材の利用（薬剤注入によりウッドデッキに使用）
- 環境学習ギャラリー（エコパネル設置、エコの見える化）
- 耐震ブレースによる耐震補強
- リサイクル材の使用
- 仮設校舎を建てない「居ながら改修」

※　環境省モデル事業「学校エコ改修と環境教育事業」ホームページにて情報を提供
http://ecoflow.jp



（改修前）



改修後のウッドデッキの中庭：デッキ材は町内から出た間伐材を製材・加工・薬剤注入して使用。



環境学習ギャラリー：学校・地域の環境学習の情報発信基地として整備した。

愛知工業大学八草キャンパス１号館

建 築 主　学校法人名古屋電気学園
設計監理　青島設計
施　　工　清水建設

所 在 地 —— 愛知県豊田市八草町八千草1247-1
敷地面積 —— 512,505.90㎡
建築面積 ——　2,716.56㎡
延床面積 ——　7,762.75㎡
構造規模 —— S造　地上７階
工　　期 —— 2009年10月～2010年７月
最 寄 駅 —— リニモ八草駅（東部丘陵線）
撮　　影 —— センターフォト


高層部ファサード

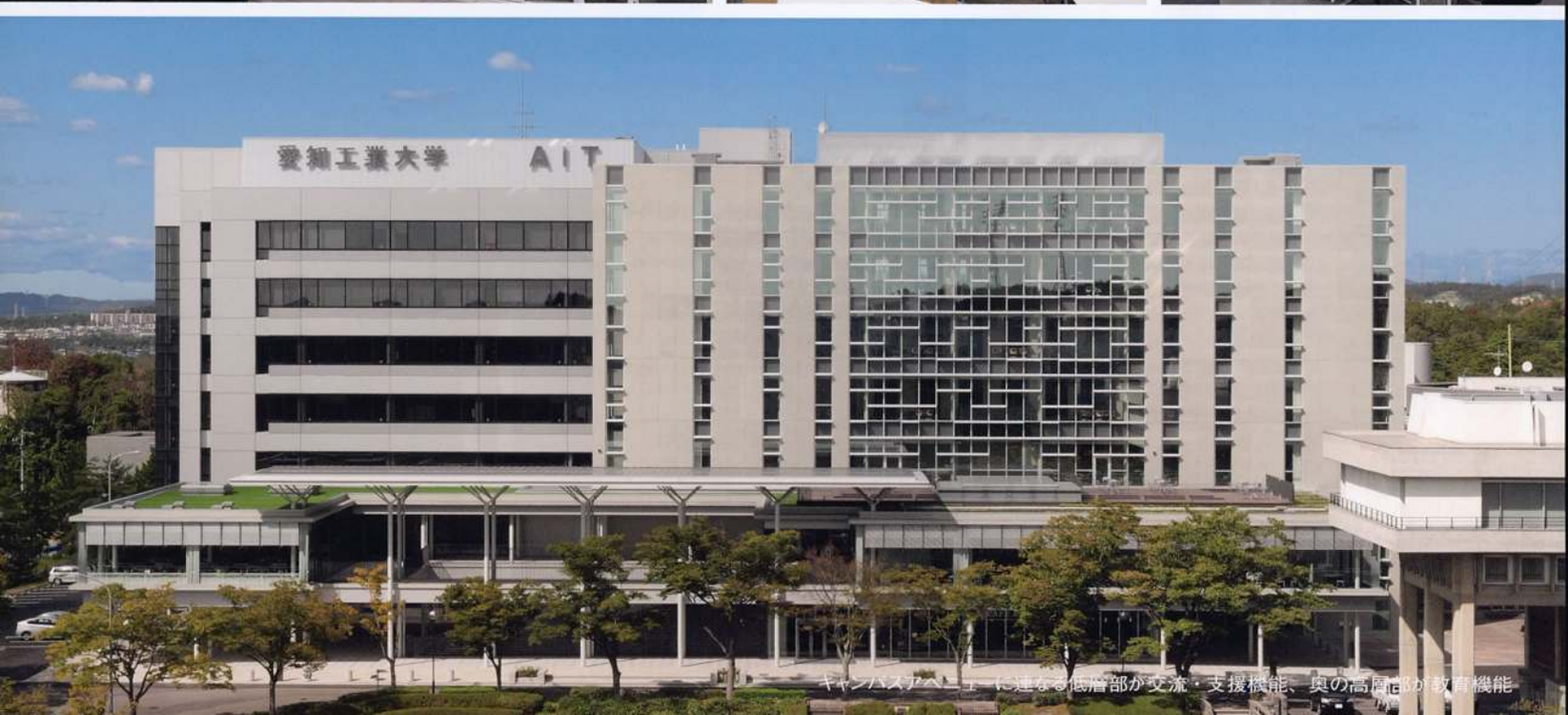

イベントスペースにもなるラウンジ・大階段


CAFEラウンジ


メディアセンター


メディア視聴覚室


メディアラボ



キャンパスアベニューに連なる低層部が交流・支援機能、奥の高層部が教育機能

八草と自由ヶ丘　ふたつのキャンパスの新しいシンボル

八草キャンパス１号館

八草キャンパスの中央に伸びるアベニューに面して誕生した新１号館は学生たちに多彩な生活環境と高度な学習環境を提供している。

アベニューへの圧迫感の配慮や木々の高さとの調和を考慮した低層部にはカフェや学生ラウンジさらにPCやAV機器を揃えたメディアセンターや就職支援を行うキャリアセンターなどの学生のための「交流・支援機能」を、キャンパスのランドマークとなる高層部にはトップレベルの機器やソフトなどが用意された最先端のマルチメディアを学ぶことのできる「教育機能」をゾーニングし、各々の環境を損なわず、使いやすいシンプルな構成としていくことを心がけた。

ファサードは低層部、高層部ともに内部の様子がよくわかる透明感の高いつくりとしている。

低層部はピロティーやテラスなどの半屋外の空間を積極的に取り入れ外部との隔たりをなくし、豊かで新しい環境のもと学生のいきいきとした表情や真剣に取り組む姿が外部に溢れ、アベニューを行き交う他の学生への刺激となって連鎖していくことを期待している。

高層部は、最先端のマルチメディアを学ぶことのできる教育環境を備えた校舎として、デジタルをイメージしてランダムに配置したシェルフをもつカーテンウォールにより、ファサードに特徴を持たせ、時間によって異なる影を創り出し、キャンパスに動きのある表情を与えている。

また、シェルフがない場合に比べて約40％の熱負荷軽減効果もあり、カーテンウォールに面した各階ラーニングスペースは、快適な学習空間になっている。

（内藤正隆・宮川次郎/青島設計）

自由ヶ丘キャンパス

名古屋市内の住宅街に新設された都心型の大学キャンパスである。このキャンパスでは、経営学部経営学科の経営情報システム専攻とビジネスマネジメント専攻の２つの専攻が学べ、ITの基礎理論からビジネスに応用できる経営知識までを研究することができる。

情報化時代にふさわしいインテリジェンスなキャンパスづくりを目指し、人と社会を繋いでいく場のデザインと、個人の自由な発想を広げ思考を深めるような空間の創造を重視した。

キャンパスの核となる場づくりとして、大学に必要な機能である講義室と研究室を集約した４層のL型のヴォリュームと、幹線道路に沿った曲面カーテンウォールとの間に生まれた二層吹き抜けのヴォイドを交流ラウンジとして整備し、屋外のようで屋内であり、閉鎖的なようで開放的であり、大学キャンパスのようで街の一角であるような「あいまいさ」を内包する空間としてデザインした。

この意図された「あいまいさ」によって、学生、先生や市民の間に自然なコミュニケーションが誘発され、交流が生まれ、活性化し、キャンパスに新たな価値が創造されることを期待している。そして、この交流ラウンジが、時と共に地域交流の核となり、市民の記憶に残る場所となっていくことを願っている。

１階のカフェと４階の学生ラウンジは、楕円形の平面とし、学生たちが自由にキャンパスライフを描けるようにカジュアルな空間を演出した。仕上げに木調材料や石器質タイルを使用し、明るく洗練された都市的イメージと、周辺に残る自然環境がうまく調和した新キャンパスにふさわしい表現としている。

（實金　寛・近藤剛史/青島設計）

愛知工業大学自由ヶ丘キャンパス

建 築 主　学校法人名古屋電気学園
設計監理　青島設計
施　　工　清水建設

所 在 地 —— 愛知県名古屋市千種区自由ヶ丘2-49-2
敷地面積 —— 2,377.54㎡
建築面積 —— 1,410.93㎡
延床面積 —— 4,738.50㎡
構造規模 —— S造　地上４階、地下１階
工　　期 —— 2009年４月～2010年３月
最 寄 駅 —— 地下鉄自由ヶ丘駅
撮　　影 —— センターフォト


都市的イメージと周辺に残る自然環境を調和させたファサード


交流ラウンジ


カフェ


大学５号館　全景


大学５号館　１階エントランス


大学５号館　４階食堂


中高プール・武道場

愛知淑徳学園 星が丘キャンパス
大学５号館
中高プール・武道場

建 築 主　学校法人　愛知淑徳学園
設計監理　日建設計
施　　工　清水建設

所 在 地 —— 愛知県名古屋市千種区桜が丘23
敷地面積 —— 52,353.25㎡
建築面積 —— （大学）2,003.01㎡/（中高）839.46㎡
延床面積 —— （大学）8,102.05㎡/（中高）885.58㎡
構造規模 —— （大学）SRC造、一部S造、＋6F/（中高）S造、＋1F
工　　期 —— 2008年12月～2010年３月
最 寄 駅 —— 地下鉄東山線星ヶ丘駅
撮　　影 —— エスエス名古屋

「愛知淑徳学園」の発祥の地であり、中学・高校と大学が共存する「星が丘キャンパス」における、大学の新校舎と、中学・高校の体育施設の計画である。

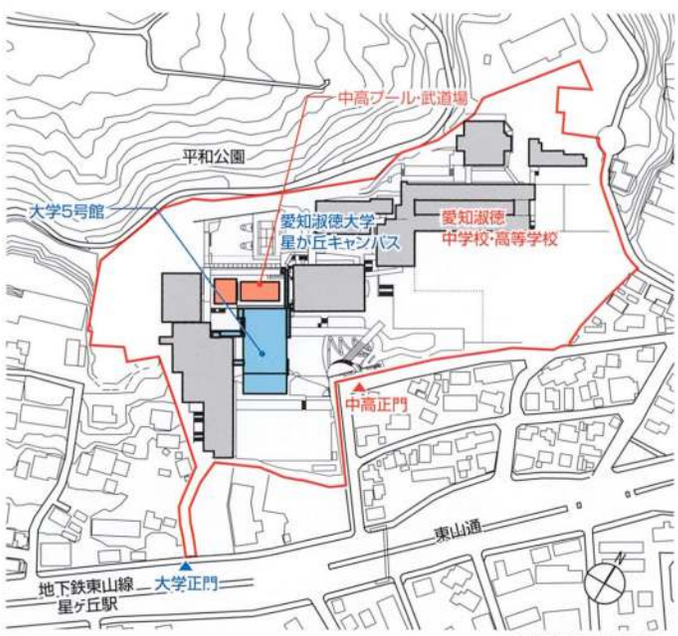
大学５号館は、2010 年度の学部再編の一環として計画されたものであり、一般講義室、食堂、図書館の増床などの多機能な用途を有する、星が丘キャンパスの新しい顔となる校舎である。

名古屋東山の丘陵地に位置するキャンパスは高低差が大きく、スムーズな校舎間の移動を可能とすることが課題でもあった。新校舎は既存校舎をつなぐ位置に配置することで、校舎同士がフラットにつながり、回遊動線の一部を形成する計画とした。さらに校舎内には「屋外ラウンジ」を始めとする交流スペースを随所に配置し、学生のコミュニケーションが高まる設計とした。

大学の新たなアイデンティティとなる、シンプルで印象的な外観づくりとして、４階食堂部分は、眺望の良さを生かして突出したデザインとした。環境配慮として、日射遮蔽とライトシェルフ効果のある南面の大型水平ルーバー、ヒートアイランド抑制効果のある特殊面状タイルの採用や太陽光発電パネルの設置などを採用した。

一方、中高プール・武道場は、大学の校舎に囲まれた場所にあった 50 m屋外プールの老朽化に伴い、今回の大学校舎建設と同時に計画された。半屋外の25m プールと、柔剣道の授業に加え、多目的な利用を視野に入れた武道場からなる体育施設である。周囲の校舎からの視線の遮蔽や採光確保の双方を実現するために、プールの屋根にはテント膜を採用した。

（村井達也、大森拓真/日建設計）



配置図 1 /5000

西側外観



市民をやさしく迎える中庭



休日急病診療所の千鳥格子

一宮市医師会館・一宮市中保健センター

老朽化した医師会館の建替えにあたり、保健センター・休日急病診療所を合築する「保健・医療・福祉の複合施設」として計画された。
敷地北側には2階建ての住宅が隣接することから、2階建て一部3階建ての低層の建物として、建物からの視界も外に開くよりは、中央に設けた中庭に開くようにと考えた。また、合築する様々な施設の活動が、互いに見え、利用者にわかりやすい中庭を囲む計画とした。
外壁はモルタルを使用しない乾式タイル工法として、外壁とタイルの間に空気層を設けることで脱落防止と遮熱・断熱性を高め、CO_2削減をはかっている。また、主要な通りに面する南側は、医師会館の諸室を白いアルミパネルのフレームの中にまとめ、これを軽やかにピロティの上に浮かせることで、足元から中庭へと市民に開かれた構えをつくっている。

(石森秀一／日建設計)

建 築 主　社団法人一宮市医師会
設計監理　日建設計
施　　工　榊原建設JV

所 在 地 —— 愛知県一宮市貴船町3-2
敷地面積 —— 3,306.16㎡
建築面積 —— 1,693.49㎡
延床面積 —— 3,575.33㎡
構造規模 —— S造　3階建
工　　期 —— 2008年12月～2009年11月
最 寄 駅 —— JR尾張一宮駅
撮　　影 —— エスエス名古屋



知多信用金庫奥田支店

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　沢田工務店
施工協力　日比七（外壁・塗装工事）
クムラ産業（金属建具・硝子工事）
旭物産名古屋営業所（金属工事）
久米電気商会（電気設備工事）
日本空調システム常滑営業所
（空調設備・太陽光発電設備工事）



外観　東面



外観　北東面


ロビー


屋上　太陽光発電パネル

旧店舗の老朽化、支店機能の充実のため新築移転となった。
敷地は交通量の多い幹線道路に面しており、駐車場は利便性を考慮して前面道路側に、支店建家は奥に配置した。
本支店は知多信用金庫における環境配慮モデル店舗として位置付けられて企画された。環境に配慮した施設であることをPRする為、建家屋上に美浜の波をイメージした架台に太陽光発電パネルを設置し、外構に自立式の太陽光発電パネルを設置した。その他に環境負荷低減対策として保水性舗装・透水性アスファルト舗装・緑化・LED照明（トイレ等）・初期照度補正などを行った。
敷地北東部には、ポケットパークとして緑化やベンチを配置し、利用者と地域へ開放している。
（高橋英明／伊藤建築設計事務所）

所 在 地 —— 愛知県知多郡美浜町大字奥田字儀路33番５号
敷地面積 —— 913.42㎡
建築面積 —— 360.46㎡
延床面積 —— 535.99㎡
構造規模 —— S造２階建
工　　期 —— 2010年４月～2010年10月
最 寄 駅 —— 名古屋鉄道知多新線　知多奥田駅
撮　　影 —— センターフォト



外観　南東面

愛知銀行豊田支店

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　清水建設

所 在 地 —— 愛知県豊田市挙母町1-21-1
敷地面積 —— 1,198.02㎡
建築面積 ——　665.62㎡
延床面積 —— 1,115.31㎡
構造規模 —— S造　2F
工　　期 —— 2010年4月～2010年9月
最 寄 駅 —— 名古屋鉄道豊田線・三河線　豊田市駅
撮　　影 —— エスエス名古屋

愛知銀行豊田支店は、創業100周年の節目に合わせて旧店舗から移転新築された。旧店舗は豊田市駅前の便利だが目立たない場所にあったが、この度の移転先は幹線道路の交差する角地であり、駅前にある利便性よりも車でのアクセスの容易さに重点が置かれた敷地選定であった。そのため設計でも車両動線の整理が重要課題となった。敷地の三方を囲む前面道路の混雑状況や車両の乗入れ位置の規制などを考え、不整形な敷地形状に対して敷地北側に車両の通り抜け動線を、南側に支店建屋を配置することとし、建屋は45度に折れ曲がった変形平面とした。

外観には従来の店舗イメージを継承しつつ今後の愛知銀行の店舗デザインの新機軸を打ち出すことが求められ、従来の店舗で多用されてきたレンガ調タイルと高性能熱線反射ガラス、赤御影石でできた門型の組合せで外観を構成することを提案した。門型部分は屋根付きの駐車場で、利用者が雨天でも気持ち良く店舗を利用できるよう配慮されている。

環境配慮のため、駐車場屋根と屋上にソーラーパネルを、建屋の出入口そばに壁面緑化を設け、屋外の照明には太陽光と風力を利用した外灯を採用している。

（山上健／伊藤建築設計事務所）



ATMコーナー



ロビー・営業室



外観　南東面

愛知銀行豊田南支店

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　清水・神谷建設共同企業体

所 在 地 —— 愛知県豊田市土橋土地区画整理事業地内
81街区４画地、５画地
敷地面積 —— 961.85㎡
建築面積 —— 461.92㎡
延床面積 —— 753.82㎡
構造規模 —— S造　2F
工　　期 —— 2010年６月～2010年10月
最 寄 駅 —— 名古屋鉄道三河線　土橋駅
撮　　影 —— センターフォト

愛知銀行豊田南支店は、土橋地区の土地区画整理事業に伴い、創業100周年に合わせて建替えられた。豊田という土地柄から車によるアクセスが主となるため、二方の前面道路に車両の出入口を設け、交通量の多い幹線道路だけでなく脇の道路にバイパスをとって敷地内を車両が通り抜けできるよう計画した。豊田支店と同じ材料とデザインポリシーで外観デザインを構成しており、周辺の諸条件が異なっていても一目で愛知銀行と認識できる外観を目指した。

石の門型から入った駐車場は、明るい雰囲気になるよう中央にトップライトを設けて採光しており、そのトップライトのガラスには半透明のソーラーパネルを採用している。屋上にも汎用型のソーラーパネルを設置しており、これらの発電量はATMコーナーに設置された液晶画面に表示される。また、建屋の出入口近くの壁面には緑化を設け、利用客の目を楽しませている。さらに、外灯は太陽光と風力の２種の自然エネルギーを利用した照明を採用している。これらの環境配慮のための施策は、豊田支店にも同様に採用されている。

（山上健／伊藤建築設計事務所）



ATMコーナー



ロビー・営業室



南面外観

JA鈴鹿　亀山支店

建 築 主　鈴鹿農業協同組合
設計監理　東畑建築事務所
施　　工　堀田建設

所 在 地 —— 三重県亀山市東御幸町78-4
敷地面積 —— 6,520.43㎡
建築面積 ——　372.93㎡
延床面積 ——　663.99㎡
構造規模 —— S造　2F
工　　期 —— 2010年４月～2010年８月
最 寄 駅 —— JR関西線　亀山駅
撮　　影 —— エスエス名古屋

「JA鈴鹿（鈴鹿農業協同組合）」は組織基盤の拡充・強化、経営の健全化を目標に平成元年に鈴鹿市・亀山市・関町の２市１町の行政区におよぶ農協が広域合併し設立された。
今回の計画は現在、本店及び30支店ある建物のうちで、老朽化が進んでいる建物の建替え計画の一連である。「亀山支店」は旧組織時には亀山市の本店店舗として、多くの人が利用していたが、合併後は１支店として運営されるようになった。そこでその点を踏まえてこの地域のメイン店舗となる顔作りとコンパクトな施設作りを要求された。
外観は事務及び客溜り的な部分は光が入るようにカーテンウォール及びフロントサッシを、金融機関的な部分は極力開口部を設けないようにボツ窓とした。又アースカラーを基調とした外壁タイル及び木を感じさせる再生木ルーバーを採用し暖かみのあるファサードとし、従来より利用されている年配の方にも気兼ねなく利用出来る様な雰囲気づくりを目指した。
内部は「客」動線と「従業員・休日利用」動線を完全に分離したり、受付カウンターの幅を極力広くし、一方向だけに開放した形等で、「機能面」「防犯面」を考慮した計画とした。

（瓦田伸幸・北條壮史/東畑建築事務所）



客溜り



風除室

北側外観



階段とエントランスホール



東側の県道より見る

株式会社ヤマダ　津島第２工場

建 築 主　株式会社ヤマダ
設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　守谷商会

所 在 地 —— 愛知県津島市神守町字大門
敷地面積 —— 4692.90㎡
建築面積 —— 2519.74㎡
延床面積 —— 5013.82㎡
構造規模 —— S造、２階
工　　期 —— 2010年６月～2011年１月
最 寄 駅 —— 名古屋鉄道津島駅
撮　　影 —— アーキフォトKATO

株式会社ヤマダは、パチンコ・パチスロの企画・デザインから設計・量産までを幅広く手がける遊技機部品の総合メーカーである。このプロジェクトは、既存のヤマダ津島工場に隣接した敷地に第２工場を建設するものであり、建築主からは工場としての機能性はもちろんのこと、「工場らしからぬスタイリッシュな建築デザイン」をも求められた。

メインアプローチ側となる北面には、トラックを迎え入れるゲート状のフレームを設けたファサードとし、東西面は長大な壁面の単調さを解消するストライプ状の意匠とした。さらに北西角の階段室は、下部はスレンダーなサッシによる透明性の高いガラス面、上部は企業カラーであるブルーを採用した壁面として、軽快でシンボリックなコーナーデザインを実現した。また県道側の東面には効果的にサインを設け、「企業の顔」としてのランドマーク性にも配慮した。

機能的には、１階を入出荷と倉庫スペース、２階は組立作業スペースと事務エリアという明快なゾーニング構成とした。また屋上には太陽光発電パネルを設置し、その発電状況をエントランスホールのディスプレイに表示することで自然エネルギー利用の「見える化」を図っている。

（篠原佳則・奥村幸生/安井建築設計事務所）



東側外観　バルコニー、ライトシェルフ、外周空調機


エコ・ボイド　スマート自然換気＋自然採光

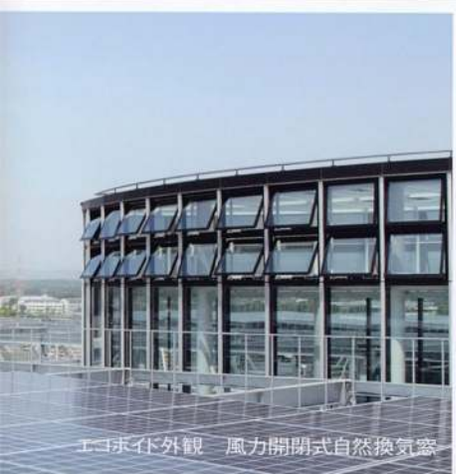
トヨタ紡織
猿投開発センター２号館

建築主　トヨタ紡織株式会社
設　計　日建設計
監　理　日建設計＋清水建設
施　工　清水建設

シートをはじめとする自動車内装を開発するために計画された3000名収容のメガオフィスと試作・実験場。緑豊かな里山に建つ間口90m×奥行55m、基準階5,500㎡の大きなワークプレイスのまん中に「光と風と人を導くエコボイド」を設けた。
非常に奥行の深い執務空間で、まん中は人が集まり「現地・現物」で喧々諤々する場にしたいというのが発注者の考えであった。そこで上下をつなぐエコボイドをガラス張りの階段室として、トップライトの自然光を導き、建物全体の自然換気回路にも利用し、リフレッシュコーナーと一体のコミュニケーションコアとすることを計画した。
ボイド最上部は流線型平面とし、無風時でも、風のある時でも最も効果的な換気が行える形状とし、拡散光を導入している。東西に面するオフィス階は外部に奥行2.7mのバルコニーとライトシェルフを設けて日射を制御し、直接外気導入が可能な床吹き空調機械室をゾーンごとに分散配置した。機械室高さは低く抑えて上部の通しランマ窓からも十分に均質な光が入るようにした。
ランマ窓は、外気条件に応じて自動的にエコボイドと連動開閉し、自然換気と外気冷房と空調を自在に切り替える「スマート・ハイブリッド空調」を行う。居住域空調、ナイトパージによる躯体冷却、自然換気により省エネ効果は高く、昨夏の猛暑においてもエネルギー使用量は既存ビルの約半分であった。
建物全体に自然の爽やかな風が吹き抜ける、明るく開放的なメガオフィスが実現した。

（佐竹一朗/日建設計）


東西オフィスゾーン窓まわり


エコボイド外観　風力開閉式自然換気窓


エコボイド見上げ

所 在 地 —— 愛知県豊田市亀首町金山88他
敷地面積 —— 220,723.85㎡
建築面積 ——　5,782.92㎡
延床面積 ——　43,740.84㎡
構造規模 —— S造、RC造、SRC造、8F、B1F、P1
工　　期 —— 2008年10月～2010年４月
最 寄 駅 —— 名古屋鉄道豊田線上豊田駅
撮　　影 —— エスエス名古屋

ロータス亀島

建 築 主　日本電設工業株式会社
設計監理　東畑建築事務所名古屋事務所
　　NDK設備設計（電気設計）
施　　工　安藤建設名古屋支店（建築）
　　日本電設工業中部支店(電気設備)
　　浦安工業名古屋支店（機械設備）

名古屋駅近接部に位置する本建物は24戸の都心型賃貸住宅である。「ロータスシリーズ」としての風格、都心に住むという贅沢を鑑み、ここでは「品格・快適・安心・居心地」をコンセプトとし住まう人々が魅力を感じ長く定住できることを意識した設計としている。外観は質感ある素材や色彩による構成により、品格のある雰囲気を醸し出すように配慮した。又、エントランスホールではシックで照明効果による光の演出を試み、住戸内部は白を基調に明るく、居心地の良い空間を実現した。駅前に住む利便性を安心して享受し、ハイグレードでかつ、上品な住空間を目指した。

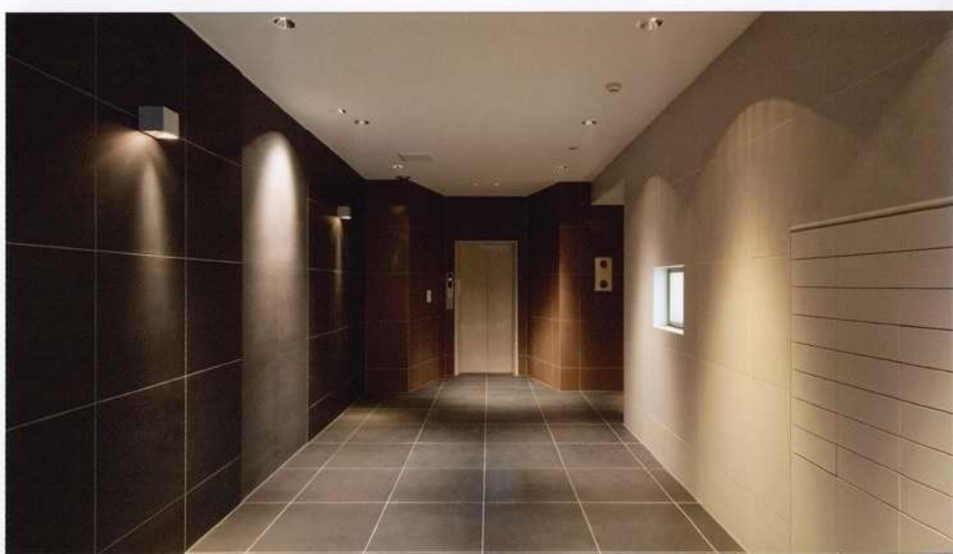
（長谷　恭典／東畑建築事務所）

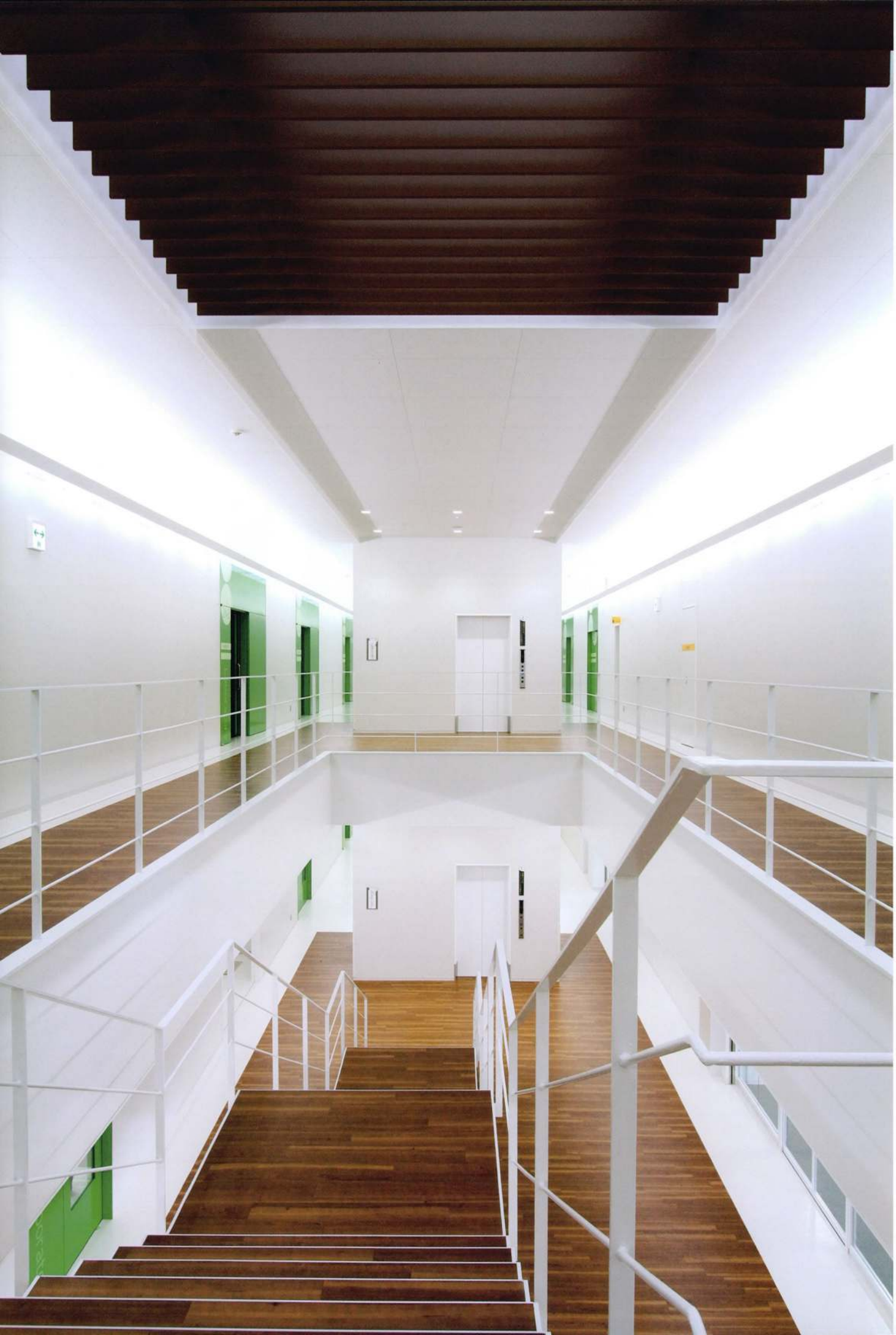
所 在 地 —— 愛知県名古屋市中村区井深町15-7
敷地面積 ——　350.30㎡
建築面積 ——　182.02㎡
延床面積 —— 1,237.60㎡
構造規模 —— RC造、地上９階（高さ31m）
工　　期 —— 2009年３月～2010年２月
撮　　影 —— エスエス名古屋











建 築 主　東亞合成株式会社
設計監理　安井建築設計事務所
施　　工　フジタ
（電気）きんでん
（機械）朝日工業社

東亞合成R&D総合センター

化学メーカーの中心研究開発施設の新築工事である。次世代に向け展開する研究所のあり方を提案した。

100ｍを超える建物長辺の中心軸として、吹抜を含む共用スペース（コミュニケーションコア）を一直線に貫通させた。実験室や執務室等の各種機能を周囲に平面展開する配置構成により、研究者相互の見通しを重視した環境創りを目指した。専門研究テーマの垣根を越えた研究部門間の「横の連携」「総合力の発揮」の促進を強く意図した。

日夜緊張と集中を強いられる実験室とは対照的な「リビング」空間をコミュニケーションコア全域にわたり随所に挿入した。“心身を解放させる雰囲気”を研究者にスムーズに提供し、おのずと「オン」「オフ」の意識を変えられるワークプレイスのゆるやかな境界の創出を目指した。

モジュール化された構造、設備システムにより、今後の可変や延伸に適応するシンプルな断面を構成した。アドレス化した出入口サインの導入も、今後の研究テーマ変更等に対応する柔軟な試みである。外観は内部の機能を素直に表現しながら、顧客自社製品を積極的に採用し、実証的なＰＲの場として多様な形で活用した。

（篠原佳則・清水満・川井茂輝／安井建築設計事務所）

所 在 地 —— 愛知県名古屋市港区昭和町８番地
敷地面積 —— 202,730.50㎡
建築面積 ——　4,045.35㎡
延床面積 ——　8,761.32㎡
構造規模 —— Ｓ造地上３階
工　　期 —— 2009年11月～2010年７月
撮　　影 —— セントラル・フォート　北村万作


エントランスホール


コミュニケーションコア


事務室



外観　正面全景（南面）

ヒルズウォーク徳重ガーデンズ ヒルズ棟

設計監理　伊藤建築設計事務所
施　　工　熊谷組



全景（南面）



西面太陽光パネル

徳重駅という地下鉄桜通線の新駅建設に伴う公共、民間一体の街づくりの一環として駅舎、車庫の躯体の直上に建物を建設している。地下躯体の上に建物の約３分の１が載り、残りが地盤の上という条件であったが、構造上一体の建物とし整形な平面計画となるように構造計画を行った。

建物は鉄骨造地下２階、地上４階建て。緑あふれる街の景観と調和するようなデザインとし、壁面及び屋上緑化、太陽光発電、井水利用等を採用し環境に配慮している。

地下１階及び地上１、２階部分に食品売場と多彩な専門店を持つ店舗を配置し、地下１階及び３階、４階、屋上階に来客用の駐車場を併設している。南北で高低差が10m近くある敷地の傾斜に合わせて、道路に面した各階にファサードが異なる店舗の入口を配置しどこからでも入ってみたくなるような設計としている。同様に駐車場も高低差を利用し道路から地下１階駐車場に同レベルでアプローチができる動線とし、地下階で充分な滞留スペースをとってから店舗の上階にある駐車場へのスムーズな誘導を可能にした。

商業施設は隣り合う緑区の地域センター及びバスターミナルと、新駅や連絡ブリッジを通じて接続し回遊性と共に交通の利便性を持たせた施設となっている。

現在、周辺は多くの施設が計画され新しい街が出来つつあり、地域の中心的存在として進化し共生して行くことが期待される。

（取締役設計監理総括　佐々木 晃／伊藤建築設計事務所）

所 在 地 —— 愛知県名古屋市緑区鳴海町徳重18番地の44
敷地面積 —— 19,292.00㎡
建築面積 —— 14,834.59㎡
延床面積 —— 66,107.12㎡
構造規模 —— S（一部RC）造　地上４階　地下２階
工　　期 —— 2009年９月～2010年10月
最 寄 駅 —— 地下鉄桜通線 野並駅（2011年３月27日より徳重駅）
撮　　影 —— エスエス名古屋



屋上緑化



壁面緑化



遠景（西面）



紀北町立相賀小学校

設　　計　東畑建築事務所
施　　工　北村・石吉特定建設工事共同企業体

所 在 地　三重県北牟婁郡紀北町海山区相賀368-3
敷地面積　13,724.25㎡
建築面積　 3,388.32㎡
延床面積　 5,030.58㎡
構造規模　RC造、S造、地上２階
工　　期　2009年６月～2010年11月
最 寄 駅　JR紀勢本線相賀駅　徒歩１分



北名古屋市立師勝中学校

設　　計　東畑建築事務所
施　　工　土屋組

所 在 地　愛知県北名古屋市井瀬木370
敷地面積　18,961.0㎡
建築面積　 1,220.19㎡
延床面積　 2,165.11㎡
構造規模　RC造、地上３階
工　　期　2009年11月～2010年12月
最 寄 駅　名古屋鉄道西春駅



江口巖商店本社

設　　計　竹中工務店
施　　工　竹中工務店

所 在 地　愛知県名古屋市南区明治1-19-15
敷地面積　1,029.89㎡
建築面積　 288.87㎡
延床面積　1,365.23㎡
構造規模　RC造、地上５階
工　　期　2009月11月～2010年７月
最 寄 駅　名古屋鉄道豊田本町駅



熱金鋼業株式会社 熱田賃貸マンション AVANTI PORTO

設　　計　竹中工務店
施　　工　竹中工務店

所 在 地　愛知県名古屋市熱田区四番2-20-7
敷地面積　3,219.42㎡
建築面積　 778.21㎡
延床面積　2,312.69㎡
構造規模　RC造、地上５階（一部S造）
工　　期　2010月１月～2010年８月
最 寄 駅　地下鉄名港線六番町駅



中京銀行大治支店

設　　計　伊藤建築設計事務所
施　　工　杉本組

所 在 地　愛知県海部郡大治町大字馬島字西深田10番、11番
敷地面積　927.20㎡
建築面積　382.66㎡
延床面積　523.11㎡
構造規模　S造、地上２階
工　　期　2009年４月～2009年11月
最 寄 駅　地下鉄東山線中村公園駅



ハーレーダビッドソン浜松

設　計　伊藤建築設計事務所
施　工　土屋組

所 在 地　静岡県浜松市東区植松町1476-2、3、4、5、6
敷地面積　1,305.15㎡
建築面積　686.72㎡
延床面積　1,391.86㎡
構造規模　S造、地上3階
工　期　2010年4月～2010年7月
最 寄 駅　JR東海道本線天竜川駅



森林公園ゴルフ場　練習場管理棟

設　計　㈱ウッドフレンズ・Seiji Takahashi DESIGN OFFICE
施　工　大井建設㈱

所 在 地　愛知県尾張旭市大字新居5182-1　森林公園ゴルフ練習場横
建築面積　176.07㎡
延床面積　201.10㎡
構造規模　RC造、一部W造、地上2階
工　期　2009年9月～2010年1月
最 寄 駅　名古屋鉄道瀬戸線三郷駅



第二はなこま保育園

設　計　安井建築設計事務所
施　工　竹中工務店

所 在 地　三重県津市高茶屋小森上野町字野田778
敷地面積　8,615.96㎡
建築面積　1,935.63㎡
延床面積　1,709.37㎡
構造規模　W造　平屋建て
工　期　2009年11月～2010年6月
最 寄 駅　近畿日本鉄道名古屋線久居駅



JAあいち中央　知立支店

設　計　安井建築設計事務所
施　工　まるひ建設

所 在 地　愛知県知立市新池1-34
敷地面積　2,939.04㎡
建築面積　564.43㎡
延床面積　1,040.24㎡
構造規模　S造、地上2階
工　期　2010年3月～2010年12月
最 寄 駅　名古屋鉄道知立駅



東海労働金庫名古屋北支店

設　計　安井建築設計事務所
施　工　鴻池組

所 在 地　愛知県名古屋市千種区香流橋2-322
敷地面積　861.83㎡
建築面積　386.62㎡
延床面積　670.93㎡
構造規模　S造、地上2階
工　期　2009年11月～2010年4月
最 寄 駅　名古屋市営バス　猪子石西原

特集

東海支部復活50周年記念総括号

東海―TOKAIオムニバス

“東海の風”

昨年10月15日で支部復活50周年を迎えた東海支部。一昨年９月プレイベントとしての建築見学会を皮切りに始まった「支部復活50周年記念事業」も今回の「建築と社会-東海特集」で完結致します。従って、今年の東海支部特集は支部復活50周年記念総括号として位置づけ、支部会員作品集と支部特集〈TOKAIオムニバス〉を企画することにいたしました。

支部特集は５年続いた「街道･宿場町シリーズ」の後を受け、今回より新しいシリーズが始まります。前シリーズは東海地方の街道、宿場町を通し、人々の営み、その時代の繁栄を紹介して参りました。新シリーズでは明治以降の近代の建築に目を向け、脈々と受け継がれてきた、受け継いでいきたいものを考えてみたいと思っています。明治から現代の東海地方の文化、建築、街、都市といった切り口で、東海地方の建築文化に見る“遺伝子”を探っていきたいと思います。

昨年の「東海の建築事例紹介」は昨年10月名古屋で開催された“COP10（生物多様性条約第10回締約国会議）”にちなみ“環境／エコ”をテーマにした試みの事例紹介としましたが、今年も引き続き“環境／エコ”をテーマにPert２として、よりデータシートとして会員の皆様が活用できる事例紹介と致しました。

「支部会員が語る」につきましては、“東海支部復活50周年記念事業を振返って”と題し、一年半にも及ぶ「支部復活50周年記念事業」の概要を総括させていただきました。これから次なる50周年に向け出発するわけですが、建築協会も新法人格取得へ向けた対応が迫られている中、支部活動のあり方、連結経理処理など今年も取り組むべき課題は多くあります。ただ、今回の「支部復活50周年記念事業」を振り返ってみて強く感じることは、特に若い会員への様々な情報発信やコミュニケーションの“場”の必要性でした。建築に関わる単一縦軸の職能団体ではなく、まさに“建築と社会”の横軸を担う多様性を包含する団体として、さまざまな“場”の提供“情報”の発信に心掛けていきたいと考えております。

最後になりましたが、この度の特集にも、お忙しい中、ご執筆を頂きました方々をはじめ、多くの方のご支援ご協力を頂きました。深く感謝致します。

（東海支部特別編集委員会委員長　佐伯　博）

■岐阜の建築文化にみる遺伝子
三賢人の夢みた空間―名和靖・武田五一・日下部久太郎―／杉野　丞
岐阜の産業遺産保存の動き／稲生　勝
岐阜景観まちづくりと歴史的街並み整備～自然・歴史・都市の調和～／山田哲士
木の文化の再構築・オークヴィレッジの提案／上野英二

■東海の建築：環境／エコ
オーク千種／大林組
瀬戸信用金庫熱田支店／竹中工務店
若狭町立三方中学校／東畑建築事務所
神戸幼児園／安井建築設計事務所

■東海支部会員が語る
東海支部復活50周年記念事業を振返って／支部復活50周年記念事業準備委員会

岐阜の建築文化に見る遺伝子

三賢人の夢みた空間

—名和靖、武田五一、日下部久太郎—

愛知工業大学建築学科教授

杉野　丞

■はじめに

岐阜は山々に囲まれ、中央部に長良川が流れる風光明媚な土地にあり、人々は長い歴史の中で豊かな生活を営んできた。その間、戦国時代には全国に名立たる武将を輩出し、江戸時代には多才な人材を擁し、明治時代には新たな時代を生きる知恵と視野をもった人材を輩出してきた。岐阜は、明治維新において廃藩置県により県庁がおかれると、その中心地として開かれ、明治22年（1889）東海道線の開通とともに文明開化を象徴する建築が建てられたが、同24年（1891）の濃尾地震によりその大半を失い、地震復興後の建築も第二次大戦の空襲により再び失われた。しかし、今なお金華山周辺には近世から近代に亘る歴史的建造物が残されている。これらの建物は時代を開いた人々の精神を伝えており、今なおその輝きを放っている。ここでは、明治・大正期において岐阜から広く世界を見つめていた名和靖、武田五一、日下部久太郎の三賢人を取り上げ、彼らが夢みた建築空間に受け継がれている心の遺伝子を読み解いてみたい。

■名和　靖：昆虫学者



名和　靖

名和靖は、安政４年（1857）岐阜県本巣郡巣南町重里に生まれ、幼い頃に自然の中で育まれた昆虫への興味が自らの生涯を決定づけることになった。昆虫への関心は自然と祖父の影響とも言われている。明治11年(1878)に岐阜農林高等学校に入学し、明治15年(1882)には岐阜県農学校の助手となり、その間に全国各地をまわり昆虫収集を行い、明治16年（1883）郡上郡祖視野において「ギフチョウ」を発見して命名したことで、その名を広く知られることになる。同年には華陽学校の教壇に立って生物学の講義を行ったが、この授業の生徒の中に武田五一がおり、ここに名和靖と武田との出会いがあり、武田は生物学に関心をもちデッサンへの興味を深めて行くことになる。その後、靖は昆虫の研究に本格的に取り組むため、明治19年(1886)に東京帝国大学に入って昆虫学を基礎から学び、研究者として研鑽を積むこととなる。その後、靖は大学において研究することより、学問の基盤を在野に求めて郷里に帰り、岐阜尋常師範学校や中学校に勤務したが、その後昆虫研究に専念するために職を辞し、明治29年（1896）岐阜市京町に「名和昆虫研究所」を設立した。彼は昆虫の収集や分類を目指すのではなく、一般社会や農業における害虫駆除、益虫保護などの応用昆虫学の発展に大きな目標があった。さらに、昆虫を素材とした美術品や工芸品の創作と制作を行い、新たな分野を開拓することになった。当時、名和靖は日本の学会はもとより海外まで知られており、我国の博物館学の先駆者であった文部省博物館局の田中芳雄との交流があり、明治26年（1893）のシカゴ万国博覧会、明治33年(1900)のパリ万国博覧会などに昆虫に関する標本を出品し、すでに海外でも高い評価を受けていた。明治37年（1904）、現在の岐阜公園の一画に研究所を移転し、しばらく小学校の旧校舎を利用していたが、明治39年(1907)には金華山の麓の研究に適した土地を得たことで、名和昆虫研究所の標本室の本格的な建設計画が立てられることになった。この設計は武田五一に依頼することとなり、これが新聞社に取り上げられると一般市民や篤志家から寄付が寄せられ、明治40年(1908)に標本室（現名和昆虫記念館）は竣工された。その背景には、明治24年（1892）の濃尾地震では家屋倒壊により多くの標本を失ったため、収蔵庫の確保が急務であり、また武田が欧州留学から帰国して京都高等工芸学校の教授に赴任していたことも幸いした。さらに、それまで標本や研究成果は古い木造の陳列館に展示されていたが、大正８年（1919）に新たに名和昆虫博物館を建設することにな

り、農商務省、鉄道院、岐阜県、岐阜市などの援助を得て建設費３万円が集められ、設計は再び武田五一に依頼されることになった。

また、大正６年（1917）靖が還暦の年にあたるために、それを祝って大正８年(1919)昆虫の供養をするために昆虫碑と白蟻観音堂（記念館内）が建設された。そして、名和昆虫記念館、名和昆虫博物館が完成すると伊藤博文、大正天皇が訪れるなどして、名和靖は時代の寵児となった。

■武田五一：建築家



武田五一

武田五一は、明治５年（1872）広島県福山市に生まれ、５人兄弟の長男で五大州一の学者にという期待をもって五一と命名された。父直行は新政府の司法官であり、明治15年（1882）に岐阜始審裁判所に勤務すると、五一は華陽学校付属小学校に転校し、同17年(1884）華陽学校中学部に通うこととなった。ここで昆虫学者の名和靖と出会い、靖から生物画を学んだことが、その後の人生に大きな影響を及ぼすことになる。その後、明治21年(1888）に五一は京都の第三高等中学に入学し、同校で５年上級の塚本靖と出会い、建築家への志を固めてゆくことになる。そして、明治27年（1894）五一は第３高等中学の本科を卒業し、東京帝国大学造家学科に入学する。造家学科は、明治30年（1897）伊東忠太の提案で建築学科と改名されたため、五一は造家学科として最後の卒業生となった。卒業設計は、「Design for an Academy of Music and Concert Hall」と題して組積造２階建の音楽学校とオーディトリアムを設計している。同年に大学院に進学し、妻木頼黄の設計助手として日本勧業銀行などに関わり、伊東忠太の台湾神社の設計などにも加わり、明治32年（1899）には大学院を退学して東京帝国大学工科大学助教授となった。この年、第３高等中学校の先輩塚本靖が辰野金吾からの官命を帯びて欧州に留学し、翌33年(1900)に武田五一も図案学研究のために英独仏への留学を命じられた。武田は、ロンドンでは大英博物館で多くの書物を読み、グラスゴー博覧会を見学してマッキントッシュの作品に接しており、イギリスで制作した室内図案は英国国民図案懸賞競技皇后賞を受賞している。その後、パリに渡るとすでに渡欧していた塚本靖、妻木頼黄などと交流して３ヵ月ほど滞在し、さらにヨーロッパ各地を見学し、アメリカを経由して明治36年（1903）に帰国している。この間、武田はウィーンでの新しい建築・工芸運動に接しており、その後の作品に大きな影響を与えている。帰国後、京都高等工芸学校の図案科の主任教授として赴任し、教育者として４年間図案教育に携わっている。明治37年（1904）には京都府技師兼任となり、鹿苑寺金閣修理工事に関わり、京都を中心に活躍を始めている。当時の作品としては、福島行信邸（明治40年1907）、名和昆虫記念館（明治40年1907）などがあり、欧州留学の成果を遺憾なく発揮している。

明治41年（1908）大蔵省臨時建築部技師兼務となり、官衛建築調査のために再び米、英、独、仏、伊、瑞などの視察旅行に出かけている。この視察の後から、武田の設計作品には和風の伝統が現れるようになり、同志社女子学校静和館（明治44年1911）、芝川邸（明治45年1912）などがその例である。大正５年（1916）に法隆寺壁画保存法調査委員の委嘱を受けると、以後法隆寺と長く関わってゆくことになる。同年には武田が主任技師をつとめた山口県庁舎と県会議事堂が竣工している。大正７年（1918）には名古屋高等工業学校の校長に就任し、鈴木禎次、土屋純一等とともに名古屋での建築教育の基礎を固め、名古屋における作品も制作している。その後、大正８年（1919）京都帝国大学工学部建築学科の創設委員となり、学科設立に力を注ぎ、関西での設計活動も始まるが、同８年（1919）に名和昆虫博物館を建設し、同15年（1926）には岐阜の旧加納町役場を建て、昭和５年（1930）には名古屋市鶴舞公会堂の設計に関わっている。昭和６年（1931）には武田は再び欧州視察に出かけ、ヨーロッパにおける第一次大戦後の近代建築の潮流を実見し、国際建築様式の動向を読み取っている。武田の「欧州を巡りて」と題する講演では、ウィーンのゼセッションへの賛美を唱えるとともに我国固有の近代建築の必要性を説いている。昭和７年（1932）武田は還暦をむかえ、「武田博士還暦記念展覧会」が開催されており、昭和13年（1938）に67歳で永眠する。



日下部久太郎
日下部建設㈱「七十年の航跡」より（平成３年３月発行）

■日下部久太郎：企業家

日下部久太郎は、明治４年（1871）岐阜羽島郡正木村に旧庄屋日下部吉衛門の次男として生まれ、明治21年（1888）に生家の家業を興すべく生糸貿易の見習いを始め、北海道に渡り、父親の出資する釧路の海産物商社に勤めると失敗を繰り返しつつも事業を拡張し、明治41年（1908）に函館に移って海運業の日下部合名会社を創立し、大正６年（1917）には本拠地を神戸に移して日下部汽船を設立した。その後、岐阜に本社を構え、函館と神戸に支店をおき、第一次大戦による日本海運業界の好景気の中で貨物輸送や貨物船の貸し出し等によって莫大な富を築いた。海運業に成功した久太郎は「函館の明星」と呼ばれ、地元紙は久太郎に対して「海を知らざる山岳の民より出でて、しかも海上に覇を唱え、なおかつ本拠を山岳の地に移して厳然ゆるぎなき威を示す。」と称賛した。大正９

年（1920）には、日下部信託会社を興し、岐阜における信託会社の嚆矢とされ、大正15年（1926）には岐阜信託と改称して３割２分の配当を行った。今なお、久太郎の函館、神戸、岐阜の３邸宅は残されており、これらの邸宅は当時一流の工匠の手によって建造されたものであり、ここには岐阜の企業家の心の遺伝子が伝えられている。このように、久太郎は岐阜市中竹屋町と米屋町に広大な土地をもち、敷地の西側に日下部商事、岐阜信託銀行を建設し、東側に自邸の和館と日下部合資会社事務所の洋館を立てて、近代の岐阜経済界の有力者として活躍した。

○名和昆虫記念館

名和昆虫記念館は、明治40年（1907）に武田五一により設計された作品であり、当時の建設計画が朝日新聞社により紹介され、篤志家の寄付を募って建設されたものである。

記念館は、桁行４間（48尺・14.56m）、梁間２間（24尺・7.28m）、煉瓦造、切妻造り、スレート葺き、妻入りである。平面は、南妻１間を前室、奥３間を展示室とし、屋根裏の２階を収蔵庫としている。構造は、１階を煉瓦造として12尺の割付で柱型を造り、２階の小屋組を木造トラスとしている。外観は、１階では柱間に両開き窓を入れ、両妻に両開きの出入口を設け、２階では両妻に５寸勾配の破風を組み、束を２尺４寸間に高く立て、頂部にトラス状の飾りを見せ、両側面には１階の窓の上部に屋根面に開いたド―マウィンドを設けている。この屋根構造は、武田が欧州留学の際にイギリスに滞在しており、彼地の伝統的住宅群を見たことは予想にかたく、そうした影響を受けたものと考えられる。また、妻入口の小庇の破風飾りに岐阜蝶がデザインされ、英国の伝統的住宅の建物に新らたなアール・ヌーボーの意匠を取り入れ、単なる「意匠の模倣」を嫌う武田が欧州留学後に試みた作品であり、まさに「昆虫の家」に相応しい建物といえよう。

設計では壁および屋根に新式の久田瓦を用い、意匠は優美高尚にしたという。１階ではレンガ積みの仕上げ材として素焼のタイルを張り、２階の屋根瓦と窓側壁の鱗瓦にも新式の久田瓦が用いられている。このタイルは、愛知県常滑市において久田吉之助によって焼かれたものである。久田は家業と関わりが無かったタイルの製造を志し、明治37年(1904)に我国最初に被覆煉瓦の特許第7331号を取り、記念館は最初期の事例となる。久田は武田の指導を受けて京都府記念図書館、京都商品陳列所のテラコッタを製作し、後にはフランク．ロイド・ライトによる帝国ホテルのスクラッチタイルも手がけるが、このタイルは後にINAXの大倉長三郎に引き継がれることになる。１階では、レンガ積みの仕上げ材として素焼のタイルを張っている。武田五一は、ヨーロッパ留学において学んだゼセッシオンやアール・ヌーボーの建築潮流をこの建物に反映させた。



名和昆虫記念館

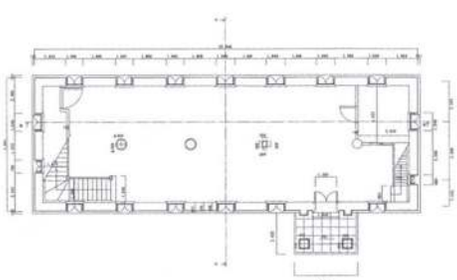
○名和昆虫博物館

名和昆虫博物館は大正８年（1919）に建設された。設計は武田五一、施工は岐阜の田村組、実施設計は東京日本橋の吉武建築事務所が行っている。

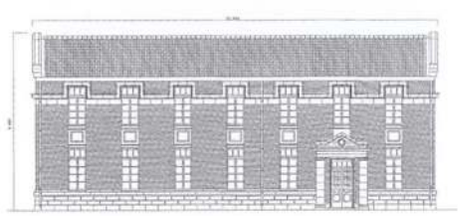
博物館は、桁行72尺、梁間24尺、切妻造り、スレート葺（現在瓦葺）き、二階建てとする。平面寸法は、記念館と同様に12尺を基準としており、両者には統一性が計られている。構造は、木骨煉瓦造、タイル張りとし、小屋組みにはキング・ポスト・トラスを用いている。タイルは、白色の釉薬塗りであるが、製造元は明らかではない。入口は、西側面の南寄りに玄関ポーチを出し、人造石の角柱のオーダーを立て、正面にペディメントを上げている。外観は、１階の腰高までを人造石の基壇ベースメントとし、１階と２階の壁面には上下に窓を連続させ、桁行で７連、梁行で２連の両開き窓を設けている。上下の連続窓では、中央に壁を埋め込み、２階の窓上部では上段に水平帯を通し、その上には凹凸を連続させた文様帯を外周に廻らしている。内部は、１・２階とも１つの空間として展示室としており、１階では、北端に大階段、南端に小階段を設けて昇降し、桁行の中央列に３本の太い丸柱を立てて大梁を支え、２階の床を支えている。この丸柱は唐招提寺講堂の古材とされる。この時、武田五一は名古屋高等工業校長の職にあり、古社寺保存委員として奈良の古社寺保存修復に関わっており、唐招提寺講堂の柱が白蟻被害のために取り替えられたことから、その古材を名和昆虫博物館の建設のために持ち込み、その内４本の古材（現在３本）が使われたのである。ここには、武田五一とともに名和靖の意図があったであろう。



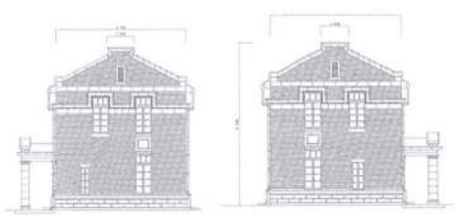
名和昆虫博物館外観



１階平面図



西立面図



この博物館は、外観において記念館が伝統様式を用いているのに対して、アール・ヌーボーへの様式的な転換を感じさせる。一見すると両者に様式的な違いが認められるが、平面寸法の基準をいずれも12尺にとり、記念館が4スパン×2スパンとするのに対して博物館は6スパン×2スパンにとり、煉瓦造、木造トラス構造、タイル張りなど共通点が多く、ここには、武田の設計意図が窺われる。2005年2月から屋根の修復が行われた。

○岐阜の日下部邸（和館・洋館）

大正時代に入ると、日下部久太郎は岐阜、函館、神戸に本邸ならびに別邸を建立した。岐阜の本邸は、大正年間（1912～26）に竣工した豪邸である。岐阜市米屋町から中竹屋町に亘る広大な敷地（360坪）に主屋（和館）と事務所（洋館）を建て、和館（大正5年頃）は久太郎ならびに息子弥三郎の家族の住居として、洋館（大正3年頃）は日下部合名会社（後の日下部汽船）の本社事務所として用いられ、その後和館に料亭が入り、洋館には現在画廊が入っているが、いずれも当時のまま残されてきた（平成20年に和館は取り壊された）。また、函館の別邸は函館市末広町にあり、重要伝統的建造物群の一画をなし、岐阜と木曽から大工と材木を運び、建設された質の高い建築である。神戸の別邸は神戸市舞子にあり、和館と洋館からなり、洋館は岐阜の本邸洋館と同様20世紀初頭のヨーロッパのアール・ヌーボーやゼセッシオンとよばれる新様式に基づいた本格的な近代建築である。



日下部邸（神戸市）現 舞子ビラ

日下部家住宅は、伊奈波神社の参道となる稲葉通りと直交して米屋町を通り抜ける南北道路の西側にあったが、和館は前述のように平成20年に取り壊された。しかし、ここでその内容を紹介しておきたい。和館は木造2階建、入母屋造り、桟瓦葺とする（床面積約126坪）。屋敷構は、道路に面した表門を潜ると前庭が置かれ、玄関を設けた「座敷部分」とその南に内玄関を備えた「住居・勝手部分」からなり、奥に裏庭が広がっていた。座敷部分は、玄関庇から式台を上がると「取次の間」があり、その南隣に階段と事務室がおかれ、その西隣から南に幅1間の廊下がのび、東西に長く広がる住居・勝手部分へと広がっていた。座敷部分は取次の間の北奥に6畳が2室と10畳の3室が並び、10畳は「1階上座敷」として床・棚・下地窓が設けられ、南に4畳と8畳が並び、これらの西側に縁側を通し、裏庭を見通すことが出来た。



1階上座敷

庭は広く、植栽と石組みによって築かれた裏庭は和館と見事に調和していた。2階では、東寄り中央部に階段室を設け、この両脇に8畳を設け、変則的な中廊下を挟んで南北に8畳と11畳を並べ、11畳は「2階上座敷」として床、付書院、違い棚など本格的な座敷飾りが設けられ、西側に縁側を通していた。この主屋は、1・2階の上座敷と諸室に良質の木曽桧を用い、要所に唐木、竹材などを用いるなど、近代の数奇屋風の意匠に技を凝らしており、美濃地方の大工の技術と粋を集めた秀作であった。

一方、洋館は、木骨煉瓦造、地下1階、地上3階建とし、地階は半地下として地上から採光をとり、3階を屋根裏としている（床面積約50坪）。間取りは、L字型として道路面の張出し部分に玄関と階段室、地下室、地下1階に金庫室と化粧室、1階ならびに2階に事務室を設けている。玄関は道路側と屋敷側に2つの入口を設け、共に5級石階を備えて両脇にイオニア式石柱を立て、柱頭をアール・ヌーボー風にデザインしている。外壁は、地上より4尺程を石積とし、その上部では1



日下部本邸（洋館）

階部分、2階部分、2階軒部分に石張りを廻らし、レンガ積みとのコントラストを表わし、東側面では壁面に張り出しを造り、内部にマントルピースを設け、外部に上下窓2連を通し、最上部をマンサード屋根としてアクセントを付けている。

このように、日下部家住宅は洋館のみとなったが、岐阜市の金華山麓の伊奈波地区の歴史的建造物の中でも中心的な遺構の一つであり、この地域の近代の歴史・伝統・文化を伝える重要な建造物である。このように、日下部久太郎の邸宅は岐阜、函館、神戸の3市に残されており、それらは和館、洋館あるいは和館・洋館からなり、明治・大正・昭和を通して活躍した企業家の邸宅として輝きを放っている。

（すぎの　のぼる）

岐阜の建築文化に見る遺伝子

岐阜の産業遺産保存の動き

岐阜大学地域科学部教授

稲生　勝

■はじめに

産業遺産という言葉は、最近、見かけることが多くなりましたが、しかし、まだ、なじみがないという方がいらっしゃると思われますので、最初に簡単に産業遺産という言葉について触れておきましょう。

建築を含め、「産業や産業技術に関わる遺産」を産業遺産（industrial heritage）と呼びます。類似した用語に近代化遺産という言葉もありますが、近代化遺産という言葉は、主として文化庁が使用し始めたようです。「近代化に貢献した遺産」と定義されています。他にも、産業文化財、産業文化遺産なども使われます。

近代化遺産という表現の場合は、「近代化」の概念を前提にしていますが、産業遺産という表現の場合は、一般に産業革命に関わる表現です。産業革命というのは、技術史的にいえば、道具から機械への転換であり、これにより、手工業から大工業への転換が生じ、近代資本主義が確立していくことをさします。こうした転換は、たしかに、人々の生活を劇的に変化させました。夜も電燈の光で明るく、そして、この原稿もパソコンで書かれています。しかし、他方で、今日、環境問題をはじめ、人間疎外、貧富の格差拡大などその問題点も明らかになってきています。いま、こうした近代の光と影を根本から見直す必要に迫られています。その一つの試みとして産業遺産の研究があります。その意味で、産業遺産の研究は、近代資本主義の成立過程の研究でもあります。産業遺産の中に、技術史を核に近代資本主義とその成立過程を見ようという試みです。

さて、私は、岐阜産業遺産調査研究会のメンバーであり、現在は、会長を務めさせていただいています。私たちの研究会は、産業遺産の調査、研究とともに、産業遺産の保存、展示も会の目的としています。今回は、私たちの研究会が行ってきた産業遺産の保存のための最近の動きについて紹介させていただきます。

■文化財として保存されている物―八百津発電所と長良川発電所

まずは、本誌の性格を考えて建築物について簡単に触れておきましょう。実は、建築物は、機械類に比べて規模が大きく、平地が相対的に少ないとされている日本では、破壊されやすいとも言えますが、他方、機械類に比べ、その芸術性もあって、文化財として評価されることが多かったともいえます。機械類は、機能美という見方もあるかもしれませんが、実際のところ、機能が優先され、芸術性は劣ると言わざるをえません。近年、やっと、機械類も文化財に指定されることもできるようになりましたが、機械類は、建築物の付属品としてやっと保存される場合すらありました。

その典型が、重要文化財の指定を受けている八百津発電所です。八百津発電所は、木曽川水系初の発電所であり、1912年（明治45年）に発電を開始し、62年間発電を続けた後、八百津町の郷土資料館となっています。ここは、建物の内部の旧発電室に水車発電機が設置されたままとなっており、水力発電所の内部の様子がわかるようになっています。つまり、建物が重要文化財に指定されたので、そこに設置されていた水車や発電機も保存されることになっているのです。

旧発電室には三台の水車発電機が設置されていますが、一番奥、西側にもう一台、予備用の水車発電機が設置されていましたが、あまり、必要性がなかったのでしょう、北陸電力足羽発電所に移設され、現在も使用されています。なお、八百津発電所には、めずらしい放水口発電所ものちに設置され、これも現存しています（一般の見学者は内部を見学することはできませんが、建物は外から見ることができます。）発電機が川の増水時に水につかることを恐れ、川から高い位置に設置されたのですが、この高低差が大きすぎたので、のちに、この高低差を利用する放水口発電所が設置されたのです。これは、高低差が無駄になると言うだけでなく、もうひとつの事情として、放水口が流し筏の要所である綱場となっていたため、放水口からの水の流れが当時の川を利用した木材運搬の邪魔になっていたという事情もあります。なお、この資料館

には、この流し筏に関するものをはじめ、周辺で発掘された縄文土器など、民俗資料も展示してあります。

もうひとつ、登録文化財に指定されている建築物として長良川発電所をあげておきましょう。長良川発電所は、八百津発電所の１年前、1910年（明治43）に完成していますが、着工は、八百津発電所の後で、話は戻りますが、それだけ、水路建設をはじめとする八百津発電所の工事が困難だったのでしょう。この長良川発電所は、レンガ造りの美しい建物で、なるほど、文化財の名に値すると思われます。

登録文化財の長良川発電所でも、敷地内に最初に使われたドイツのジーメンス社製の発電機が展示されています。これは、八百津発電所のように建物の中に設置当時のまま展示されているわけではありません。発電機は、1981年に新しい水車発電機に取り換えるため、取り外して、外に展示してあります。長良川発電所は現役の発電所であり、建物もふつうは外から眺められるだけですが、発電機は外にあるので、近づくこともできます。が、登録文化財は、建物であって、発電機ではありません。

■国産初の縦軸水車―保存・展示はされているが

発電関連での保存状況で報告せざるを得ないのが、旧藤橋村（現・揖斐川町）の「道の駅　星のふる里　ふじはし」に展示されている国産初の縦軸水車です（**写真１**）。

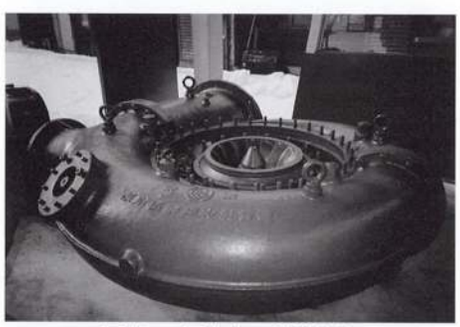


写真１　国産初の縦軸水車

長良川発電所も八百津発電所も横軸水車が使われています。横軸水車と縦軸水車の違いを簡単に説明します。横軸水車は、水車と発電機が水平に軸で結ばれ、発電します。つまり、発電機と水車は同じ高さにあります。水車から出る水は川に流すのですが、川が増水する時を想定して、そのとき発電機が水につからないように川の水面から一定程度、高い所に設置します。つまり、せっかくの高低差の一部を無駄にしてしまうのです。八百津発電所にある放水口発電所は、そのことを示していると言えるでしょう。

この高低差を無駄にしないためには、水車の位置を低く、発電機を高くすることができる縦軸水車が優れているのですが、縦軸の重さを支えつつ、滑らかに回転させねばならず（ふつう、オイルを用います）、この技術が第１次世界大戦当時までの日本にはありませんでした。

第１次世界大戦当時、建設されようとした西横山発電所（旧藤橋村、現・揖斐川町）では、縦軸水車発電機を当初、ドイツから輸入する予定でした。しかし、第１次世界大戦でドイツは敵国となってしまい、輸入は不可能となりました。そこで、国産化が図られ、できたのが現在、道の駅に展示されている縦軸水車です。この縦軸水車は、以前、岐阜西工業高校に展示されており、これが国産初の縦軸水車であることを突き止めたのは同校の竹中美喜夫教諭（当時）です。

岐阜西工業高校もなくなり、この縦軸水車を保存するなら、現地保存の理念からいっても、元あった場所の近くがよいと、当時の藤橋村に要望をし、道の駅に保存、展示されることになりました。しかしながら、この展示には、大きな問題があります。

第一に、水車が逆向きになってしまっていることです。移動の際、分解して運び、現地で組み立てたのでしょうが、組み立てるときに間違えてしまったようなのです。組み立てる際、私たちの会のメンバーが立ち会うと言ったのですが、その連絡はなく、わからないまま組み立ててしまったようです。間違いに気付いた私たちは、直すよう要望したのですが、直すには、クレーンなどの重機が必要で、その予算はないとの回答でした。第二に、縦軸用の水車と発電機が横に並べて展示してあるだけなのです。これでは、縦軸水車の仕組み、意義がわかりにくいです。縦軸そのものは残念ながら現存していませんので、少なくとも、プラスチック製のパイプでもいいですから縦軸の代替となるものを挿し、縦軸だとわかるようにしてほしいと思っています。できれば、その上に、発電機を置いて展示すれば、なおわかりやすいと思います。発電機を上にするには、かなりの工事を必要とするでしょうが、その際には間違いも直すこともできるでしょう。

さらに、水がどこから入り、どこに出て行くのかも知らない人にはわかりにくいので、現物に矢印でも書いてあるとよいと思っています。わたしたちは、小学生にもわかるような展示を望んでいます。今後、こうした点も要望していこうと思っています。

■人造石で作られた五六閘門

岐阜県は、急峻な山岳で川の高低差も大きく、水力発電には適したところでした。それと同時に、南部は、０メートル地帯を抱え、治水は大きな課題でした。今度は、こうした南部の課題に答えた産業遺産とその保存の動きについて一例をあげましょう。五六閘門です（**写真２**）

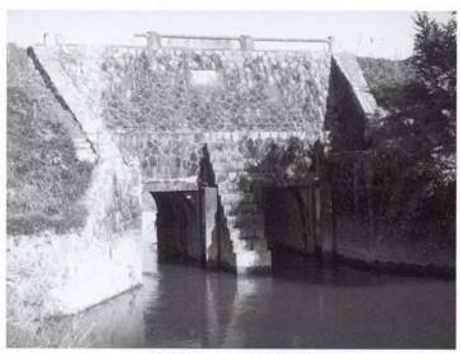


写真２　五六閘門

五六閘門は、岐阜県瑞穂市の五六川が長良川に合流する河口に設置された樋門です。五六閘門と実物に書いてあるので、五六閘門と呼んでいますが、船を通す閘門ではないと思われます。増水時に長良川から五六川に逆水が流れ込むことを防止するため、人体の静脈にある弁のように、自動的に水門を閉じる鉄扉の付いた逆水樋門です。今日でも、台風で長良川が増水した際には、逆水樋門として機能し、逆流を防ぎ、この地域の洪水を防ぎました。こうした逆水樋門は、輪中で有名な岐阜県南部では、洪水の防止や潮の干満を利用した排水のため、設置されていました。他にも、揖斐川の堤防で発掘された「四間門樋」

があります。これは潮の干満を利用して輪中からの排水を図る施設です。海津市民俗資料館に展示されています。

五六閘門は、逆水樋門であるというだけでなく、もうひとつ、それが人造石で構築されているところに重要な価値があります。おそらく、五六閘門は、人造石で作られた構築物で、岐阜県内に現存している唯一のものだと思われます。

人造石とは、日本の伝統的なたたき工法を応用して発明された人工の石です。明治初期、コンクリートは高価でしたので、この人造石が用いられました。コンクリートは、石灰岩($CaCO_3$)を焼いて、二酸化炭素を大気中に放出し、セメントを作り、これを水和させ固めます。これに対し、たたきは、酸化カルシウムCaOを用いますが、突き固めた後、徐々に大気中の二酸化炭素を再び吸収し、炭酸カルシウム、石灰岩に戻り、頑丈になっていきます。つまり、カーボンニュートラルなのです。さらに、耐用年数もコンクリートよりも長いようです。今日の環境問題を考えると、温故知新として、たたき工法や人造石は見直され、今日のテクノロジーで改良し、実際に再生する可能性をもっているのではないでしょうか。

五六閘門の保存については、まず、私と私たちの研究会メンバーで瑞穂市の教育委員会を訪ね、文化財として登録するなど保存を考えてほしい旨、要望いたしました。瑞穂市教育委員会の回答は、瑞穂市には現在、文化財が存在せず、そのように歴史的に貴重なものであれば文化財として保存したいが、しかし、五六川を管理している岐阜県が、(長良川ではなく)五六川が増水したとき、五六川上流からの水を速やかに長良川に流すのに五六閘門が障害になるとして撤去することになっているとのことでした。

そこで、私たちは、次に、岐阜県庁を訪れ、次のような要望をしました。①五六閘門を文化財として保存してほしい②水害の危険は、五六川は五六閘門のところで隣にかつての水路の跡が見られるのでそこにバイパスを通すことで解消できないか検討してほしい③現在、五六閘門の表面が風化しているので、保存状態を調査してほしい④現地保存が望ましいが、どうしても撤去しなくてはならない場合でも、可能な限り移設し、たとえ、部分的でも他の場所での保存を考えてほしい、です。②の私たちの対案は、この五六閘門は、現在の人造石で作られる以前、江戸時代には木製でほぼ20年ごとに作りかえられ、その際、川の流れもずらしていたようなのです。そのあとが隣接してあり、現在、いくつかの池となっています。そこに流すことを考えてほしいという要望です。

県側の回答は、水害の危険は回避しなくてはならないが、昨今の産業遺産、文化遺産の保存が叫ばれている状況もあり、バイパスについては検討をする、調査は行う、撤去しなくてはならない場合は、私たちにも連絡し、可能な保存法を考えたいとのことでした。その後、2010年、民間の検査会社に委託した調査が行われ、その結果、驚くべきことに100年以上たっても内部はひびひとつなく、後40年は楽に持つというものでした。人造石の耐用年数の高さに改めて驚きました。県も、水害防止という意味でも、長良川からの逆流には十分、機能しているとの評価です。ですが、まだ、保存が決まったわけではありません。今後も、できれば、現地保存・動態展示で文化財としての保存を訴えていくつもりです。

■揖斐川橋梁―逆転で重要文化財に

現在、重要文化財に指定されている揖斐川橋梁は、現存する鉄橋では最古のものであり、おそらく、揖斐川にかかった最初の橋だと思われます(**写真3**)。



写真3　揖斐川橋梁

イギリス製で、ピン止めトラス橋で、長さはおよそ400メートルの、みるからに重厚な鉄橋です。そして、濃尾大地震でも壊れなかった鉄橋です。同じ型の長良川橋梁は壊れてしまいましたが。現在、JRの東海道本線の揖斐川の鉄橋は、隣の国産のものが使われており、この重要文化財の橋梁は、徒歩、自転車用の橋となっています。したがって、東海道本線に乗れば、穂積駅と大垣駅の途中ですぐ脇に見えます。

ちなみに、このイギリス製の揖斐川橋梁と現在の鉄橋(国産)の間には、アメリカ製の鉄橋の両端のレンガ造りの橋脚だけが残っています。大まかに言って、日本の鉄橋は、イギリス製からアメリカ製になり、アメリカ製を模倣する形で国産化が図られるという歴史を歩んでいます。東海道本線の鉄橋としては、アメリカ製はすでに取り壊され、現存していませんが、この数百メートル上流には、御殿場線にあったアメリカ製のアーチ橋が移設され、樽見鉄道の鉄橋として見ることができます。つまり、ここは、鉄橋の歴史やさまざまな構造を学ぶのに最適な場所と言えるでしょう。橋のそばに「鉄橋の技術館」みたいなものがあってもよさそうに思えるほどです。

しかし、この揖斐川橋梁は、現在は、国の重要文化財となっていますが、私たちが所有者の大垣市を訪ね、保存を要望した時は、大垣市の職員は、「壊すにも金がかかるし」「10年に一度はペンキを塗り替えなくちゃならないがそれにも多額の費用がかかる」「通行止めにして、自然に壊れるのを待つか」などとおっしゃり、およそ、保存に前向きな発言はありませんでした。

私たちは、大垣市とやり取りをしつつ、産業考古学会の会員をはじめ、機会のあるごとに多くの人に揖斐川橋梁の重要性と保存を訴え続けました。これはかなりの危機感を持ってのことでした。というのも、私たちは、こうしているうちに取り壊されてしまった産業遺産を数多く見てきているからでした。

が、今回は、そうこうしているうちに、天の声というか、国の重要文化財の指定を受けることになりました。私たちは、私たちが訴えてきた成果と自画自賛していますが、客観的にみると、この間の産業遺産に対する社会的評価の変貌が大きいと思われます。

とはいうものの、重要文化財に指定されても、一部、さびかかったところもありながらも、ペンキの塗り直しも行われないままです。

■埋もれていた産業遺産―長良川鉄道北濃駅の転車台

揖斐川橋梁は、地元自治体の保存への熱意はあまり感じられなかったのですが、地元自体や地元の方々がたいへん熱心に保存を考えてくださっている例として、長良川鉄道終点の北濃駅構内にある転車台を紹介しましょう（**写真4**）。

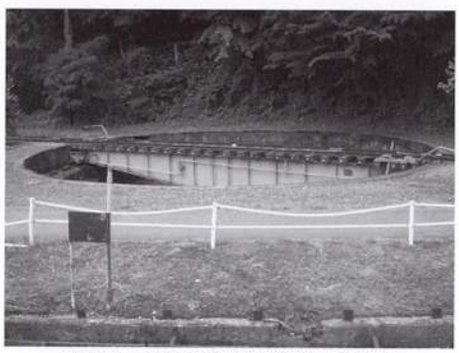


写真4　長良川鉄道北濃駅　転車台

長良川鉄道は、元は、国鉄越美南線で、福井県側には越美北線があります。越美というのは、越前と美濃という意味で、越美線として岐阜県と福井県をつなぐはずでした。が、そうならないまま、典型的な盲腸線として民営化の際に第三セクターの長良川鉄道となったのです。そもそも、この線は、一部開通すると、関東大震災で予算不足ということで中断、北濃駅まで来ると十五年戦争で中断、そして、第三セクターとなる、というふうに日本近代史を象徴している鉄道ともいえるでしょう。長良川鉄道自体が産業遺産といえるでしょう。そして、そんな思いで、私が調査している時、北濃駅に草に埋もれるように残っていた転車台を「発見」したのでした。「発見」と言っても私たちの研究会のメンバーや産業考古学の研究者などにとってのことでありますが。

みると、銘板があり、American Bridge CO. of New York, USA 1902とありました。この1902は、どう考えても、年号であり、とすると、北濃駅の設置よりも30年以前ということになります。その間、どこか別のところにあったと思われます（おそらく、岐阜駅）。この年号の持つ意味は、もうひとつあります。さきほど、日本の橋梁は、イギリス製からアメリカ製になり、アメリカ製を模倣して国産化という図式的に過ぎるプロセスを述べましたが、転車台も同じことが言えます。このアメリカン・ブリッジという会社は、アメリカの会社で、今でも存在しています。つまり、この転車台はアメリカ製です。そして、この転車台はちょっと特殊な構造をしているのですが、鳥取県には全く同じ寸法で同じ構造の国産の転車台が残存しています。とすると、その後の国産化のモデル、少なくともその一つであった可能性もあるものなのです。

「発見」当時、かつての北濃駅の駅長であった神谷仲一さんら地元の方に話を聞きましたが、「壊すにも金がかかるで……」（「……で」というのは岐阜弁）といった感じでしたが、そのうち、価値がわかっていただけ、神谷さんは、当時、旧・白鳥町の町議会議員であったこともあり、文化財登録に積極的に動いてくださりました。また、私たちも、図面を作成したり、その図面も入れた論文を産業考古学会の学会誌に投稿したりして、文化財としての価値、産業遺産としての価値を広く訴えました。この図面は、登録の際の書類にも用いられました。

登録文化財となったあとも、神谷さんたちは、有志で、保存する会を立ち上げ、定期的に周辺の草刈りなどをしています。銘板についても、野外のものの場合、盗まれる危険があるので、銘板は、きちんと保管し、現物にはレプリカをとりつけておいたほうがいいという私たちの提案も受け入れてくださいました。

■最後に

以上、私たち、岐阜産業遺産調査研究会が関わってきた産業遺産の保存活動の中からいくつかを紹介してきました。自治体などとかかわるものが多く、民間企業の所有するものや個人所有のものは、今回は取り上げませんでしたが、これらは、さらに保存が難しいことは容易にご理解いただけることと思います。また、自治体関係でも、自治体によって、あるいは、その時の担当者によって、大きな違いがあるのも事実です。

全国的には、石見銀山の世界遺産登録、さらに、富岡製糸場などが続いていることなどを見ても、産業遺産に対する関心が高まってきていると思われ、喜ばしいことだと考えています。しかしながら、たとえば、私は、八百津発電所を、研究会のメンバーやゼミの学生たちなどと、平日にも休日にもかなりの回数、訪れていますが、私の同行者以外の見学者を見かけたことはありません。こうした残念な事実を前提に考えますと、単に、保存だけでなく、展示の仕方、さらには、活用のありかたを考えざるをえません。

小学生にもわかるようなわかりやすい展示方法、たとえば、水車なら、どこから水が入り、どう回転させるのかを示すなどは、それほど費用も掛けずにできることでしょう。

私は、岐阜県には数多くの産業遺産があるので、それらを一か所にまとめた「科学と技術の歴史博物館」のようなものができないかと思っています。現地保存・動態展示が望ましいのですが、このままでは失われていく一方です。こうした博物館ができると、岐阜県なら、たとえば、横軸水車と縦軸水車を本物で並べて展示することができ、技術の発展が容易に理解できる展示が可能です。それぞれの仕組みの展示は、もちろん、わかりやすくする必要があるのですが、同時に、その科学的な原理、さらには、その歴史的背景（戦争で中断したり戦争のために作られたりした背景にある事実、事故などの災害、さらには環境問題なども含めて）も説明できたらと思います。また、教育や観光などでの活用とともに、産業遺産から学んだ新しい技術の開発もまた、産業遺産の活用ではないかと思います。

こうした「夢」を持ちつつ、とりあえず、産業遺産の保存のための活動は、その調査、研究とともに進めていきたいと思っています。調査、研究もし続けないと、気付いたらなくなっていたとなってしまうからです。

（いのお　まさる）

（原文のまま）

［写真提供］高橋　伊佐夫

岐阜の建築文化に見る遺伝子

岐阜景観まちづくりと歴史的街並み整備

～自然･歴史･都市の調和～

岐阜市まちづくり推進部
景観政策審議監兼まちづくり景観課長

山田哲士



写真1　長良川と金華山

■長良川と城下町“岐阜”

岐阜市は、名古屋市から約30㎞離れた濃尾平野の北端にあって、東西文化の接点となる地域に位置している。その大平野を一望できる絶好のポイントを占めているのが、岐阜城が聳える金華山であり、その傍らを北東から南西に向かって清流長良川が流れている。古より交易の主要な動脈であったばかりでなく、千三百年の伝統を有する鵜飼の舞台として多くの人々に親しまれてきた長良川は、本市の経済的文化的な発展の源動力として大きな役割を果たしてきた。（**写真１**）

戦国の武将織田信長は、斉藤道三が築いた城を天下統一に臨む際の要衝として修復整備した後、金華山西側の山麓から河畔にかけて壮大な城下町を建設した。おりしも、布教のために遥かポルトガルの地から訪れた宣教師は、当時の様子を次のように書き記している。「……私たちは岐阜の市（まち）に至りましたが、人々が語るところによれば、八千ないしは一万の人口を数えるとのことでした。……(中略)……取引きや用務で往来する人々がおびただしく、バビロンの混雑を思わせるほどで、塩を積んだ多くの馬や反物その他の品物を携えた商人たちが諸国から集まっていました。このような有様で、営業や雑踏のために家の中では誰も自分の声が聞こえぬほどであり……」（以上、中公文庫「完訳フロイス日本史」より引用）約450年前の岐阜の姿は、世界を渡り歩いたポルトガル人宣教師にとっても、目を見張るほどの賑わいを呈していたようである。近代に至って、戦災のため市街地の大部分が焦土と化したが、その後の復興作業を経て、基本的には信長公が築かれた礎の上に、繊維産業を中心とする商工業都市として発展してきた。

■都市化と景観

高度経済成長期を経て、都市化の急速な進展に伴う中心市街地の空洞化、グローバライゼーションによる産業の構造的変化、あるいは少子高齢化の進展等により、都市全体の活力が低下した。かつて最も賑やかな繁華街の代名詞ともなった柳ヶ瀬地区においても、百貨店を始めとする大規模小売店が次々と撤退していったが、その一方、駅周辺地域を中心として、再開発等の新たなまちづくりが次第に事業化され、駅前広場や幹線街路と一体化した生活基盤施設のリニューアルが図られた。（**写真２**）さらに、商店街の空洞化が依然として進展する中で、バブル経済崩壊後、住民の都心回帰現象が現れ始め、中高層アパートの進出に伴う地域住民との様々な確執やトラブルが頻出し、それと共に、まちづくりとその担い手にも質的な変化が生じてきた。右肩上がりの経済発展を前提とするハード整備や、商業店舗等の賑わい機能の整備による“拡大成長”から、すでに蓄積された資源の有効利用を基本とした、いわゆる“持続的成



写真2　駅前再開発ビル

長”への移行とともに、地域に蓄積された歴史文化等の固有の社会資産を活かしたまちづくりが求められ、新しいまちづくりの担い手として地域住民の役割が大きく比重を増すこととなった。とくに、地域景観の改善を主な目的とするまちづくりが活発となり、景観条例に基づく市民団体が数箇所で発足し、自治会等の既存組織の枠を越えた地域独自の活動がが進められている。

■自然・歴史・都市の調和

平成16年の景観法の施行を契機として、本市においても、景観を軸とするまちづくりの考え方を「景観基本計画」として改めてまとめなおし、さらに平成21年10月には景観法に基づく「景観計画」を策定した。

各地域の特質を汲み取りつつ、ときには相対する要素を調和させることにより、究極的に万民が美しいと感じる街を創り出すことが、都市の魅力を高め、街の活力を高めるこ



写真4　正法寺大仏殿



写真3　金華地区川原町通り

とにつながるものであるとの認識に基づき、その基本理念を「美を愛で、美に和み、美に潤う岐阜のまち」とすると共に、サブタイトルを「自然と都市を調和させ、歴史と未来をつなぐ景観を創りだす」とした。美へのこだわりは、まちの美しさが、地勢的・歴史的・文化的な特質に裏打ちされたものである限り、不変性を持って輝き続けるとの思いが込められている。

景観計画の最大の目的は、建築物等の計画段階において、デザインの自由を認めつつ、基本的な景観要素である高さや色彩、植栽等の要素を一定の基準に適合させながら、個別の施設が周辺環境と調和した外観を呈するように誘導することである。

そのため、平成22年１月１日より、旧岐阜城下町に相当する金華地区を景観計画重要地域に指定し、他の市域とは異なる詳細な基準に基づく指導を開始した。

金華地区も少なからず戦渦を被ってはいたが、地区内の北部地域を中心に、戦前に建築された木造の町家が数多く残存しており、岐阜大仏で知られる正法寺を始めとする多数の寺社仏閣と相俟って、いまだに城下町の風情を醸し出している。（**写真３、４、５**）そうした伝統的様式の家屋群が織り成す街並み景観の



写真5　岐阜大仏

美しさの保全再生に加え、物理的・文化的なランドマークである金華山への眺望景観を維持するため、建築物の最高限度高さや外壁の色彩コード等の具体的な基準を設定している。

しかしながら、これらは、あくまでもボトム・ラインを設定したものであり、勧告や変更命令等、ある程度の拘束力を伴う規定ではあるものの、各地権者の都合に基づいた建替え時の指導という時間的要因も手伝って、規制誘導のみで城下町にふさわしい街並みを速やかに再生することは困難である。

そこで、地域住民による施設改修に対する取り組みの機会を積極的に生み出すことを目指し、官民協働まちづくりの試みの一つとして「ぎふ景観まちづくりファンド」事業をスタートさせた。

■まちづくりファンドによる街並み整備

平成20年４月、金華地区のとある旧家の解体移転問題を契機として、伝統的な街並みの保存再生を目指した「ぎふ景観まちづくりファンド」を設立した。本事業は、国土交通省所管の（財）民間都市開発推進機構によるまちづくり支援業務である「住民参加型まちづくりファンド」の適用を受けたものであり、同種の景観形成支援事業としては、京都市についで全国で２番目に認定を得た。

当初は、機構からの拠出金五千万円と本市からの補助金１億円に、一般市民の方々からの寄付金を加えたものを原資として事業をスタートしたが、一般寄付金については、各種のまちづくりイベントを実施する際に、できる限り募金箱を持参するなどして常時基金への寄付を呼び掛けている。（**図１**）

単なる補助金交付ではなく、地域のまちづくりを支援するファンド（基金）をまちづくりに役立てるとの趣旨から、交付対象の決定に際しては、審査会の設置・審査基準の公表等により公平性の確保に努めることが求められた。そのため、広報や市のホームページ等を通じて年間３回の公募を行った後、学識経験者からなる運営委員会における厳密な審査によって選定するシステムを執っている。

とくに、昭和20年以前に建築された町家の修景計画に対する支援を手厚くしており、日本瓦屋根・黒漆喰壁・木製格子・木製引き戸

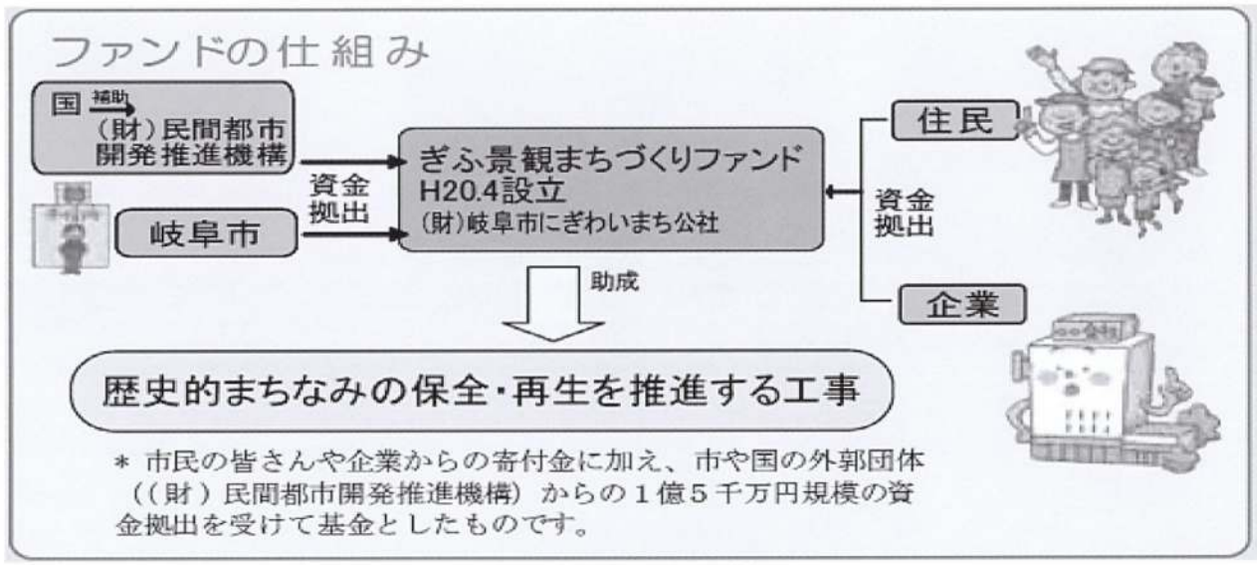


図1　まちづくりファンドの仕組み

等の基本的な町家要件（**図2**）の達成度や工事箇所に応じて、１件当たり200万円までの範囲で助成を行っている（**写真6、7**）。

対象物件には、建築物のほかに門・塀等の工作物や、空調設備の室外機の目隠しや看板等も含まれており、さらに前述の町家要件を満たす場合には、外観の整備費用に加え、店舗等の内部改装費や構造補強費、上下水道設備費も補助の対象とされる。

実際に交付の承認を受けた改修計画の内容は、町家における屋根瓦及び壁の改修や格子戸及び格子の取付けに始まって、空調室外機の目隠しカバーの取付け、あるいは、住宅の建替えに伴う道路際の木製格子設置に至るまで様々である。

なかには、ほんど使用されていなかった土蔵を、町家風に改造してレストランや洋菓子店として再利用し、人気を博している事例も現れている。（**写真8**）

事業がスタートして三ヵ年が過ぎようとしているが、平成23年１月１日現在で、総事業完了件数38件であり、およそ年間20件程度のペースで順調に利用されている。事業制度そのものに対する住民の方々のご理解と、できる限り短い期間に集中的に修景して、事業成果を早期に得られることを目指し、当初三ヵ年を重点取り組み期間として、交付金の助成率をアップした効果が表れたものと考えている。また、助成金額の実績は、一件あたり平均でおおよそ100万円程度である。

金華地区の町家の総数は、３年ほど前の調査ではおよそ約450件ほどであった。ファンド事業を始めとする行政側の支援に加え、地域住民ならびにNPO組織を中心とする方々の愛郷の念にあふれる努力が注がれているにも関わらず、その数は減少傾向にある。

主な要因は、家屋の老朽化に伴う高額な維持修繕費用、所有者の高齢化や世帯分離による空き家化・廃屋化などである。それぞれの事情によるところが大であるが、近代まで都市景観の骨格を支えてきた町家＝店舗付き低層木造住宅が、現代都市に極めて適合しにくいことは間違いのない事実である。集積利益を求める経済原理・耐震あるいは耐火構造化・家族構造の変化等々、様々な必然的要因が複合して作用した結果であるが、その一方で町家は単に伝統的街並みを呈するだけではなく、本市固有の文化を発信する源として是が非でも守っていくべき都市経営の大切な要素となりつつある。“町家文化”という言葉にもみられるように、娯楽を含めたかつての生活様式そのものが文化の源であり、それをいかに現代の合理性・効率性を求める価値観の中に取り入れて昇華することができるかということが重要となる。

金華地区の中でも、町家が集積する地域については、すでに別途助成メニューを設けて、より集中的に整備を行いつつあるが、さらに来年度再び実施する町家実態調査の結果を待って、新たな施策の展開を図って行きたい。



写真6　ファンド事例①　民家（改修前）



写真7　ファンド事例①　民家（改修後）

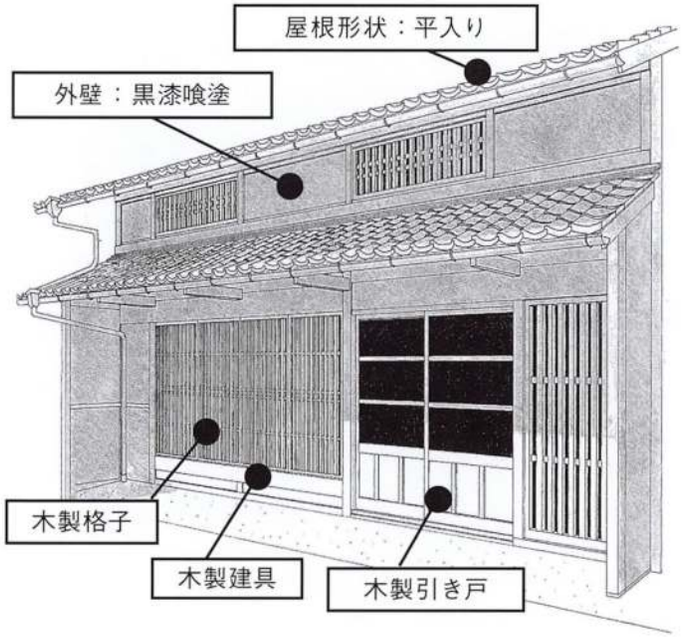


図2　町家要件（岐阜市基準）



写真8　ファンド事例②　曳き家移転した蔵を活用したレストラン



写真9　ファンド事例③　格子塀の設置

■おわりに

2009年岐阜市は市制120周年を迎えて数多くの記念行事を実施した。我々の部局においても景観シンポジウムを開催し、東洋文化研究家であるとともに、町家再生事業を情熱的に推し進めているアレックス・カー氏を招いてパネルティスカッションを行った。討論に先立って行われたカー氏の基調講演の中で、彼の口からさりげなく吐かれた言葉がある。“明珠掌在”（みょうじゅたなごころにあり）。「捜し求めている素晴らしいものは、実はすでにあなたの手のひらの上にありますよ。」との意であるが、日本人以上に和文化に精通されているとはいえ、景観の本質を射抜く禅語がアメリカ人の口から吐かれたことは、衝撃的であった。正に、美しいまちづくりは、決して彼方にあるのではなく、自らの手のひらにある珠に気づき光り輝かせることである。

我が国の景観を論じる際、、しばしばヨーロッパの整然とした街並みと対比される。無電柱、控えめなサインや看板、緑豊かな公園や街路等々。そしてなによりも高く評価されるのが、数百年以上変化することなく街中に佇んでいるアパートメントや市庁舎、そして寺院群である。とりわけ、どこにいても、手を伸ばせばいつでも触れ、観ることのできる住まいや店舗はその街々の歴史文化を静かに語りかける人類共通の遺産となっている。

日本の町家も、かつての宿場町や城下町を中心に、地域によっては二百年以上の歴史を有するものがいまだに残っている。しかし、それらは極めて限定的である。特に、地震や戦火に遭遇した都市部においては、登録有形文化財あるいは景観上重要な建造物としての評価とそれに伴う保護の下にかろうじて生きながらえているものが多数存在している。それらは、建物の修景整備に対する助成金交付だけで、存続させることは極めて困難である。今後、住宅政策、観光政策、経済政策、福祉政策等あらゆる分野を含む総合行政の中で、町家を受け入れる側と利用する側双方が有する課題をシステマティックに解き明かしていくことにより、真に光り輝く珠にすることができるものと考える。

（やまだ　てつじ）

岐阜の建築文化に見る遺伝子

木の文化の再構築・オークヴィレッジの提案

オークヴィレッジ木造建築研究所

上野英二

■日本の美しい景色、民家、町並が消えていく

かつて、日本には全国各地に美しい景色が広がり、家が建ち、集落ができ町並があった。人々は各地方で採れる天然素材を活かし、その地域の気候風土、産業から必要とされるモノを手間暇かけて造った。天然の材料は使い方さえ間違えなければ、長きに渡り朽ちることなく、年月とともに風格を増し、やがては景色の一部となっていく。すべてが手造りの暮らしであり、使う側も造ってくれる人の心に触れ、物を大切にし長く長く使い続けた。

しかし、今の日本で新築される住まいの多くは大量に作られる工業製品によるモノとなり、日本の町並はもはや何処へ行っても同じ景色になろうとしている。田畑は埋め立てられ、山は削られ、小さく区画された分譲地には色とりどりの家が建てられる。

今、日本の住宅の平均寿命は26年と言われる。イギリスで75年、あの消費国家のアメリカでさえ44年はあるという。どうしてここまで日本の住宅は短命となったのか？

戦後の住宅不足に応えるべく住宅産業が生まれ、工場で生産させた部材を現地で組み立てる仕組みが考えられた。安価で簡単に造れ、クレームを失くす為に、ベニヤや集成材または軽量鉄骨などにより建物の骨格を造り、外壁は耐水性のボードを張り、内壁はビニール製の壁紙を人工糊で貼る。高気密高断熱を謳い、快適性と利便性、そして見た目の綺麗さを強調する手法に消費者は心動かされる。家は造るモノから買うモノへと変貌を遂げた。人の健康と安全を守り暮らしを支えるはずだった家は、商売の為のモノとなってしまい、造り手優先のモノとなってしまった。

そんな中でシックハウス症候群や欠陥住宅がでてきた。粗悪な素材は修理や再利用が利かず、家族構成や生活様式が変わりリフォームを考えても、現代工法の家のほとんどが壁自体を建物の骨組みとしているために増改築が極めて難しい。更に工業化した建物は人と人との繋がりもなく、素材感や手造りの味わいもないモノに愛着は湧くはずもなく、その世代が使った後は壊され、産業廃棄物としてゴミを作り、また新築される。今の日本の住宅が短命な訳がここにある。

■人々を惹きつける飛騨高山

私たちオークヴィレッジが本社を構える飛騨高山。

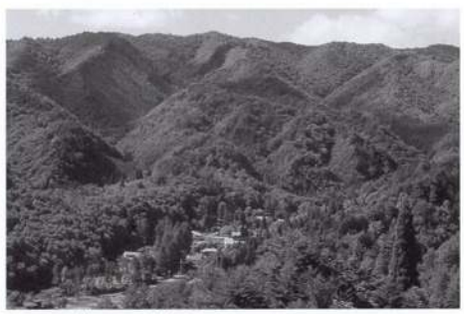
今日も市内の観光名所「古い町並」は、多くの観光客で賑わっている。近年、合掌造りの白川郷が世界遺産になってからは、年間500万人以上もの人たちが全国各地から、更には世界各国からこの飛騨を訪れている。

なぜ、これほどまでにこの地を人は訪ねるのか。

高山は周りを山に囲まれ、街の中央を川が流れ、美しい町並がある。木造の家々はどこか懐かしく、訪れる人たちを優しく迎える。昔ながらの素朴な味の食べ物も郷愁を呼ぶのだろう。豊かな自然と心落ち着く佇まい、そして飽きのこない食べ物は人が求める本質なのだと考える。

■飛騨の匠から始まる木の文化

今から千数百年前、飛騨は「下の国」とされ、政治犯などで都を追放された者が流される辺鄙な地とされていた。中でも新羅の高僧・行心は優れた匠とともに飛騨の地に流され、多くの寺院を建てた。この山中にあって当時としては異例な、大きく立派な寺院が15



オークヴィレッジ全景



高山の古い町並

カ寺も在ったとされる。豊かな木材資源に恵まれ、日頃から木を扱うことに慣れていた飛騨人たちは、その高い技術を学び身につけていった。その技は、朝廷が都を造る際にも労役として重宝され、代わりに税が免除された。大宝律令（701）の大宝令賦役令には「斐陀匠条」の付則を定め、一地域の職人を法的に縛ることになる。そして、平城京、平安京などの都造営のためにおよそ500年間に渡り、飛騨から都に匠たちが出役することとなった。その数、延べにして５万人にものぼると言われている。

そして、その流れを継いだ人たちが、後にこの地に多くの優れた木造建築や高山祭りの屋台（山車）を残し、大正に入ると家具を造る産業が興され、多くの木工品が造られ世界に輸出されるまでになるのである。

今でも、飛騨には全国から木材が集まり木材市が毎月開かれる。市内には製材所や木工機械、木工道具の店があり木の仕事をするには条件が整っている。そんな恵まれた環境の中に多くの家具製造会社があり、飛騨の基幹産業として根付いている。また、建築では優れた腕の大工がまだ健在である。

■飛騨を拠点に ～オークヴィレッジについて～

その高山市街地から、車で白川郷方面に20分ほど走ったところにオークヴィレッジはある。北側を除く三方を山に囲まれ、雑木林が広がる約20万平方メートルの敷地にはショールーム、事務所、家具クラフト工房、材料置場、セミナーハウス、建築工房、漆工房などがある。35年前この地には、建物は何も無くススキが生茂る原っぱであり、まさに０からのスタートであった。

◇オークヴィレッジの理念

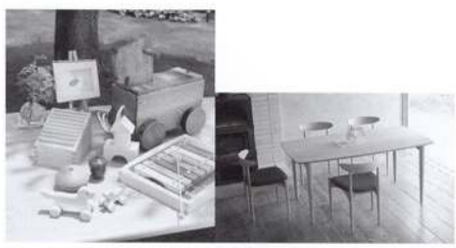
オークヴィレッジは創業以来、次の３つの理念を掲げている。

１.「百年かかって育った木は百年使えるモノに」

木を木材料として使うには、数十年から百年の木材が必要となる。しかし、百年使えるモノを造れば、その間に他の木が育ち資源が枯渇する事がない。また、使い捨ての現代において、「長く大切に使って欲しい」という願いもある。

２.「お椀から建物まで」

再生可能な木を使い、小物から家具、建物に至るまで暮らし全般に関わるモノ造りを行っている。これは、我々が考えつくるモノを暮しの中でトータルに使っていただきたいと考えたからである。また、いろいろな製品を造ることで貴重な材料を無駄にせず使い切ることができる。



オークヴィレッジの小物･家具

３.「子供一人ドングリ一粒」

「森から一本木を頂いたら、森に一本返そう」という思いから、1981年にNPO法人「ドングリの会」を発足させた。戦後、日本各地に植えられた木は杉や桧ばかりの針葉樹であり、ドングリを中心とした広葉樹も植えて本来の森の姿になって欲しいとの願いを込めて始めたものである。現在は全国の多くの方達と広葉樹の植樹と育林活動を行っている。

◇どのように人を育てるか

プロとして木を使ってモノを造れるようになるには、良き指導者のもとで長い時間をかけて修業し、多くの経験を積まねばならない。オークヴィレッジを始めた当初、家具の注文が入り始めると人手が必要になってきた。そんな中でふらりと若者が「家具を造らせて下さい」とやってくるようになった。仕事をしながら教えることは大変であったが、人手が要るので雇っているとすぐに根をあげて辞めていく。これではいけないと私塾（森林たくみ塾）で後継者の養成をすることにした。毎年10数名が入塾し、２年間に渡り、木のことや木工の基礎を学んでいる。２年間の中で生徒たちの素質と気構えが分かるので、卒塾後、この人ならと思う１～２名にオークヴィレッジに入ってもらっている。

■百年使い継がれるための家造りとは

◇伝統的な家造り（なぜ伝統に学ぶのか）

日本各地に残る家を見てみるとその地方の気候風土に即した形で造られている。

例えば沖縄の中村家は台風からの強風に耐えられるように、風の影響を受けにくい地形の敷地を選び、地元で採れる石を防風壁として塀に積み平屋建てとして、強風から家を守る。使用する木材も腐りに強いイヌ槙の木を丸太ごと使うことで木が雨をはじく工夫をしている。気候風土と素材の特性を見抜き、地産材を利用している。

新潟の渡邊家は街道に面して建てられているので、街道側は町並を大切にした外観として建てられ、間取りは「撞木造り」と呼ばれるもので街道に沿って建てられた棟と、もう一棟直角に建てられ平面としてT字の形をした建て方である。その棟の両脇に庭を配し各部屋には光と風が入るように工夫されている。その大きな屋根は近くで採れる豊富な木材(杉など)を屋根材として葺き、やはり地元



墨付け



広葉樹の森



針葉樹の森



吉島家住宅

で採れる素材を使用している。

高山の吉島家は飛騨を代表する民家である。建築史家の伊藤ていじ氏と建築写真家の二川幸夫氏が高山を訪れ、「こんな山の中にこれほどの民家があるのなら日本中にはもっと素晴らしい民家があるはずだ」と全国を周り、民家を調べ尽くした最後に「この家に勝るものはない」と絶賛したと伝えられる。吉島家は四代目当主・吉島斐之と名工・西田伊三郎によって建てられている。木材は飛騨一円から桧や松を中心に集められ、梁と柱を立体格子に組み上げ大空間を大胆に造り、その中に繊細な障子戸を組込み絶妙なバランスでまとめられている。これは施主の高い美意識を大工棟梁が理解し、優れた技術力があってこそ造り上げられるものである。

このように、今でも残る建物には残るだけの理由があり、我々は学ぶべきところが多くあると考え、多くの優れた建物を観ることで、これからの家造りのヒントが見えてくると思う。

◇地産地生のモノ造り

この頃よく使われる「地産地消」は、その地で採れたモノをその地域で消費するという意味で特に食料品などに使われる言葉であるが、このことは住まいにおいても言えると思う。しかし、家は消耗品であってはならないと考えると、この言葉は「地産地消」ではなく、「地産地生」としたい。その地に生まれたモノは、その地で自然によって育てられたモノである。それはその地に最も適した素材であるから、その地域の自然と溶け込み、長年にわたってその地に生かされることになると思う。環境負荷の点から考えても、輸送に掛かるエネルギー消費やCO_2排出も少なくコストも抑えられる。

例えば木材を「1」として、その素材の生産エネルギーコストを比較してみると、鉄は木材の24倍、アルミに至っては木材の126倍である。また、生産時のCO_2排出量を木材と比較してみると、鉄は体積あたり200倍以上、アルミはなんと700倍以上である。


木材市

高山は江戸時代から木材を幕府が管理する天領であった。今でも多くの木材が全国から集められ木材市が開かれる。杉、桧、松などの針葉樹から楢、栗、ケヤキなどの広葉樹が広い土場に並べられ、材木商、工務店、大工棟梁、木工業者に買われて行く。その木材は市内の製材所に運ばれ、目的ごとに製材され、構造材、造作材、板材、下地材などに分けられ加工される。その後、買い主は材を引き取り、乾燥機にかけたり、天然乾燥のために桟積みする。

地産地生を推し進めることができれば、地元に仕事が生まれ技術が受け継がれる。そして気候風土に合った家は町並を造り、美しい風景が現れる。


桟積み乾燥


製材

◇百年住宅をどう造るのか。

構造材は強度と耐久性、加工性、見える部分には美しさが必要とされることから土台には腐り難い栗や桧、柱は圧縮に強く見た目にも美しい桧、梁材には曲げに強い松を使うことが多いが、最近では国産材として豊富にある杉材も構造材として使用している。

そして、百年の年月にこの家が耐えられるように、金物や接着剤に頼らず、これまで百年の年月に耐えた木造建築に学び、伝統的な木組みで骨格を造っている。また、仕上げ材には床材として広葉樹の楢などを多く使っている。壁や天井材には針葉樹の杉、サワラ、桧を張って調湿性を高めている。基礎は高強度のコンクリートを打つことで中性化を遅らせ百年の年月に耐えられるようにしている。

しかし、百年持つ耐久性があったとしても、時代ごとのニーズに応えられるモノでなければならないから増改築が可能なモノでなければならず、いつまでも味わいを感じ、愛着がわくモノでなければならない。

■日本はどこへ向かうのか ～職人の減少～

昔ながらの本物を使う職人（大工、左官など）は、仕事が減少し続ける中でその活躍の場を失っている。後を継ぐ若者もどんどんいなくなってきている。この現状を誰が知るのか、誰が危機と感じているのか、現場にいる我々にしか分からない。一度失われたモノは、そう容易くは戻らない。だから、職人達が腕を磨き、活躍できる仕事を造り続けなければならないのである。

大量生産、大量消費で突き進んできた日本は今大きな局面に来ている。より多くより安くを追求していくと、より多く消費される場所であり、原材料が取れる場所、すなわちアジア、アフリカに生産拠点を移していかざるを得ないことは確かである。もしこのまま生産拠点を国内に失えば、同時に雇用も失い、つまりは技術者はいなくなり、日本のモノ造りは衰退する。しかし、日本は国土の三分の二を森林が占め、戦後植えられた杉、桧などの木材資源は豊富である。もう一度この資源を生かしたモノ造りを考え直すべきではないだろうか。



刻み



建前

■持続性のある木

森を構成している木々は、光合成によって大気中からCO_2を吸収し、酸素を放出している。吸収されたCO_2は炭素化合物の形で樹木に蓄積される。わかりやすく言えば樹木はCO_2の缶詰のようなものである。樹木が大きくなることや、森が増えるということは、CO_2が大気中から吸収され、地上に貯蔵されるということになる。しかし樹木にも寿命があり、やがては老衰し、枯死する。そうなるとせっかく蓄積されたCO_2は再び大気中に放出されてしまう。そこで、樹木が朽ちる前に伐採し、木材として利用すれば、CO_2の缶詰はさらに長い間地上に貯蓄され続けることになるのである。

木材は伐採しても、日本の温暖で大量の降雨の気候は植林によって補給がきく栽培可能な資源であり、需要と供給のバランスがとれていれば枯渇することもない。また、木材は再使用、リサイクルが可能であり、たとえ廃棄したとしても、ゴミになることはなく、土に戻り、それが養分となって新しい木を育てる。

（ただし、ベニヤや集成材は人工接着剤が使用されているので、廃棄したときは産業廃棄物として扱われゴミとなり、自然界にも戻すことはできない。）

■木の文化の再構築に向けて

人類は産業革命以後、地下に貯留されていた化石燃料を燃やすことで20世紀の物質文明を築き上げてきた。しかし、それに伴い、多量のCO_2を大気中に放出し、地球温暖化を進めてしまった。そして化石資源・化石燃料からつくられる金属やプラスティックは人間の肉体や精神に与える影響は良いとは言えず、使い終わると元に戻る可能性は少なく、廃棄時には、ゴミとなってしまう。やがて近い将来枯渇してしまうことは明白である。

よって、21世紀に生きる私たちはCO_2排出量の極めて低い、木の文明の再構築を行わなければならない。一人でも多くの人がCO_2の缶詰である木の製品を長く使うことが大切なのである。

木を扱う技術において、日本は世界に誇ることができると思う。千数百年の伝統を土台として、これからの日本人、世界の人たちに使ってもらえる木製品を造り続けることが、豊かなこれからの日本の礎になるのだと信じている。我々日本人の生活を衣食住の営みから考えてみると、石油から生まれるプラスティックやビニールなどの製品はここ数十年のモノであり、木の歴史から比べるとごく僅かな時間でしかない。

木の文化・文明に関しては、第一次木の文明を縄文時代からの広葉樹を中心とする約１万年間であり、第二次木の文明は飛鳥時代から江戸時代までの針葉樹を中心とする約1200年間である。

そして、これから広葉樹と針葉樹を両方使った第三次木の文明が始まると思われる。私たちは、建築や木製品造りを通してその木の文明を守り次世代へ受け継ぎたいと思っている。そして、昔はどこにでもあったような日本らしい美しい景色、町並、民家を再び取り戻せたらと願っている。

（うえの　えいじ）





横浜・井深記念塾





東京・四季薫る家





長野・八ヶ岳南麓の家





埼玉・雑木林の家

様々な環境配慮・環境共生の技術を盛り込む

オーク千種

愛知県名古屋市
2011年3月竣工

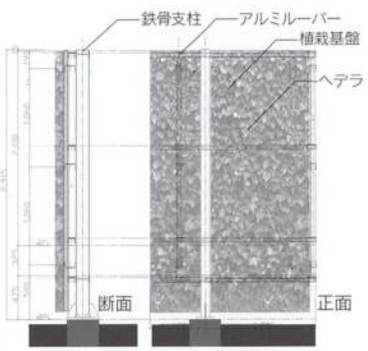
株式会社大林組
池村忠久・竹田昌弘・御舩杏里

当計画は大林組名古屋支店の単身者、独身者用に計画された122室の寮である。大林組の企業理念である「地球に優しいリーディングカンパニー」の方針に基づき、環境への影響に配慮した要素技術を盛り込んで計画された。

屋上には省CO_2を図るために30KWの太陽光パネルと168,000MJ/年の太陽熱パネルを装備し、新エネルギー導入促進協議会から新エネルギー等事業者支援対策事業に選定された。さらに庭園には集光型の太陽光パネルも設置する。緑化は外周道路沿いに壁面緑化パネルを設置し、共用棟の屋上には大面積の屋上緑化を設け、省CO_2を図ると共に、寮の居住者が育てる共同菜園を設ける。また、環境共生の一環として、ミツバチ飼育を行い、自然環境を都市生活に導入することで、生物多様性の促進に貢献させる。再生材の活用、雨水や井水の利用等、多様な技術を採用し、環境負荷を低減する計画としている。



外観イメージパース（北西から）

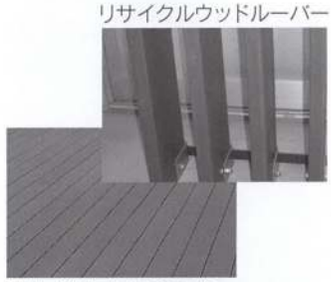


緑化パネル


太陽熱パネル

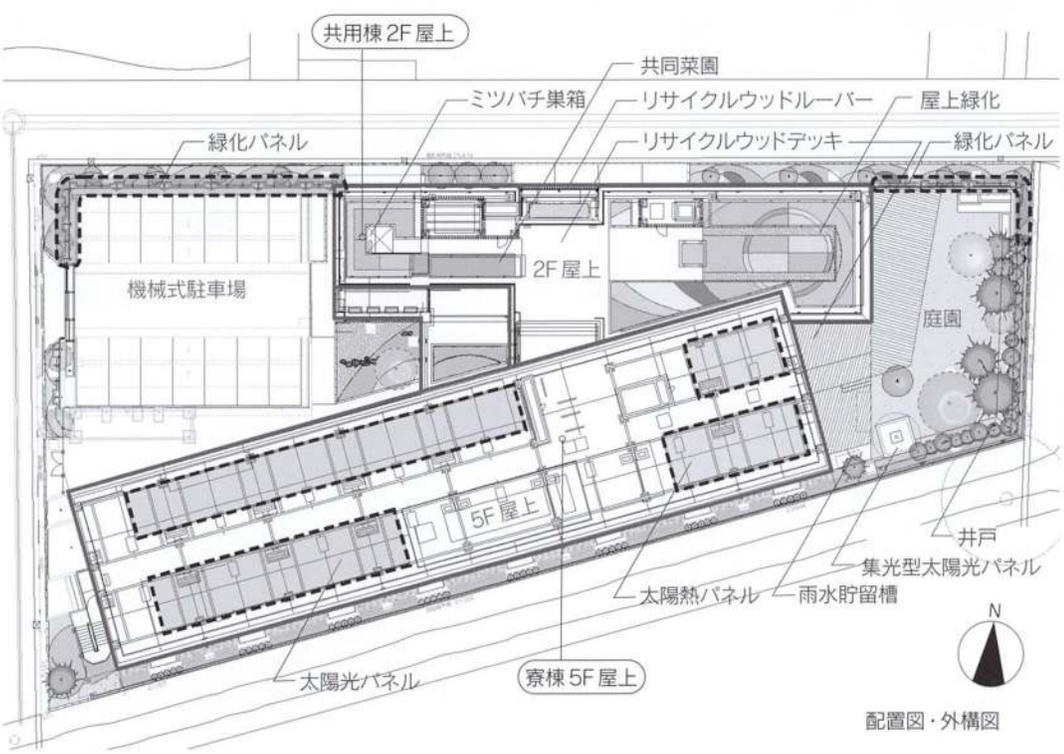

太陽光パネル


集光型
太陽光パネル


リサイクルウッドルーバー


リサイクルウッドデッキ

ミツバチ巣箱



配置図・外構図

吊構造フラットスラブによる透明感の高いファサード

瀬戸信用金庫熱田支店

名古屋市熱田区

株式会社竹中工務店設計部
中屋隆史

交差点に面して建つ、銀行の店舗及び研修センター。正面が北向きの建物でルーバーとフラットスラブにより透明感の高い建物をつくろうと考えた。これまでは、ルーバーがスラブの自重を受ける圧縮材の柱としてPCか鉄でつくられているものが多いが、PCでは見付けの大きさに不満がある、鉄では5階建で1階部分が2時間耐火となり、一般設計では耐火塗装が採用できないという問題、ルーバーの錆びの問題、亜鉛メッキした場合の精度の問題があった。そこで、最上階から鋼棒でフラットスラブを吊り上げ、ルーバーはアルミの押出材としてアルミサッシの中間を支持するマリオンとしての機能を持たせた。これにより、精度、錆び、問題をクリアーし、これまでにない吊構造によるフラットスラブとした。

フラットスラブの施工は吊構造部分がすだれのように繊細な鉄骨で、ルーバーの調整しろが10mmしかとれないため、建方精度には最新の注意をはらって施工した。コンクリートの打設順序を工夫するとともに、各列毎にたわみ予想量に応じたキャンバーを設定し、施工ステップ毎に3次元測量で各吊ポイントの位置を確認しながら精度管理を行い、目標の10mm以内を達成した。



外観詳細



架構アイソメ



全景



内観

温熱環境の改善
～「夏暑く、冬寒い校舎」から「夏暑くなく、冬寒くない校舎」へ～

若狭町立三方中学校エコ改修

福井県三方上中郡若桜町

東畑建築事務所
久保久志

改修前、既設校舎は夏暑く、冬寒い劣悪な温熱環境であった。本計画では自然エネルギーを生かしたパッシブな手法を中心に「夏暑くなく、冬寒くない校舎」を目指し、「断熱・通風・バイオマスエネルギー・日射遮へい」の４つのキーワードをもとに温熱環境の改善をはかった。

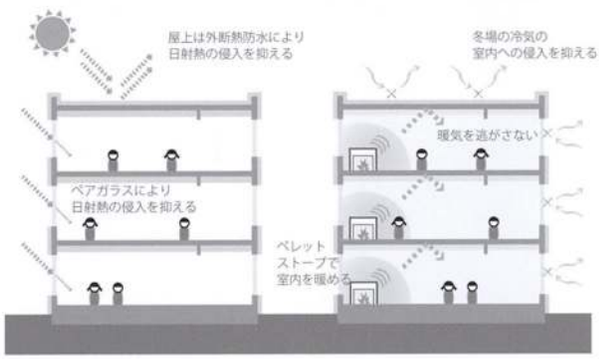
断熱

躯体の外側で断熱する『外断熱』を採用した。夏場は日射熱の外部からの侵入を防ぎ、冬場は冷気の侵入を防ぐ。屋根・外壁の外断熱化をはかり、開口部にはﾍﾟｱｶﾞﾗｽ(FT3+A6+T4) を用いて断熱性能を高め、内外部の熱の出入りを抑えた。柱型にも湿式の外断熱工法を用いて、断熱補強を徹底した。さらに、暖房器具からの暖気や人体からの発熱による熱を躯体に蓄熱させ、暖房効果を高め、体に優しい学習環境づくりをねらった。


屋上は置床式外断熱。工場成形のFRPﾊﾟﾈﾙ（硬質発泡ﾎﾟﾘｽﾁﾚﾝ 45mm）


外壁は既設躯体に断熱材（発泡ｳﾚﾀﾝ30mm）を吹付け外断熱化


廊下を取り込んだ2教室を１ﾕﾆｯﾄとして暖房区画を形成



通風

渡り廊下棟と北校舎棟の階段室上部には、室内と室外の圧力差で自動的に開閉するバランス式排気窓（排気口）を設置し、教室や廊下には内倒し窓やスリット窓（給気口）を設置した。

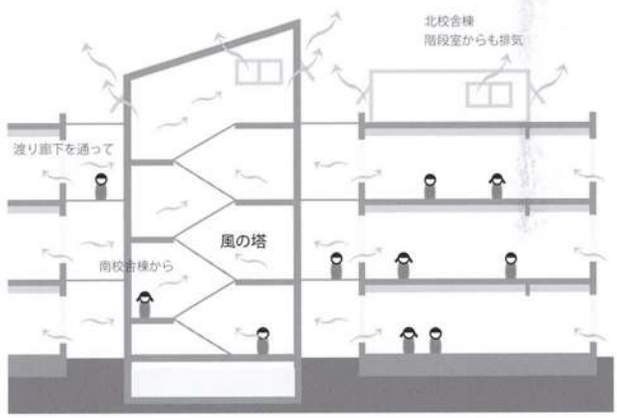
暖気が下から上へとのぼる性質を利用して、給気口から排気口へと校舎内に自然の風が通り抜ける工夫をしている（ドラフト換気）。さらに、夏場小さな給気口から夜間の冷気を取り込み構造体を冷やすことで、朝の登校時の蒸し暑さをなくすことができる（夜間換気：ナイトパージ）。


ドラフト換気を促す風の塔




無風でも換気可能 自然排気窓


積極的に夜間換気を促す小さな給気窓



バイオマスエネルギー

若狭町では町の基幹政策としてバイオマスタウン構想を掲げており、その一環として、暖房器具にはバイオマスエネルギーを燃料とした『ペレットストーブ』を採用した。燃料には間伐材や木屑など地域の木材産業の廃材を利用してつくられたペレットを使用しているため、二酸化炭素排出ゼロ（カーボンニュートラル）の暖房器具として、地球温暖化の防止にも役立つ。出てきた灰は植栽への肥料として学校内で使われている。

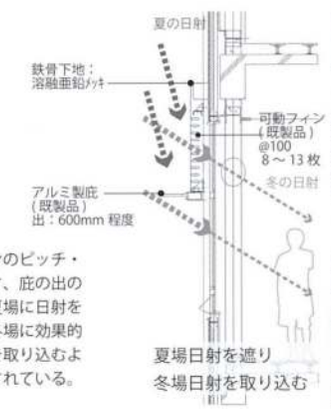

ペレットストーブ（普通教室用）
暖房出力 11,000kcal/h


ペレットストーブ（床暖房対応）

※バイオマスエネルギーとは・・・
ペレットのように有機物からつくられ、燃料として燃やしても、地球上の二酸化炭素を増やさないエネルギーのこと。

日射遮へい

校舎の南面する窓の外側には、出の短いポリカーボネート製の可動フィンと、出の長いアルミ製の庇を組み合わせた『日射遮蔽ルーバー』を取り付けている。（鉄骨下地の上、既製品を組合せて製作）



フィンのピッチ・出の長さ、庇の出の長さは夏場に日射を遮り、冬場に効果的に日射を取り込むよう調整されている。


冬場柔らかな拡散光を教室内にいれる


夏場の日射を遮るルーバー

自然の風と光を取り入れる

神戸幼児園

岐阜県安八郡神戸町

安井建築設計事務所 名古屋事務所
篠原佳則・寺西敦敏・清水満・小林康彦・山下哲司

大きく湾曲した大通りを中心に、子どもたちが主体的な遊びが出来るように様々な空間を計画した。金属の屋根に突出した５つの光の塔は建物の中に光と風を取り入れる装置となるとともに、内部では木の柱で囲まれた５つのデンとなり子どもたちのちょっとした隠れ家となっている。

自然の光と風を取り入れる

建物妻面の換気窓から自然の風を取り入れるために、光の塔の北側サッシに換気窓を取り付けた。換気窓前面には建物の一部や屋外機を配置することで、煙突効果による空気の循環がおこるように配慮をした。デン上部の傾斜したスラブにより、まるで林立する木立から雑木林の中に光が差し込むようにした。

暖められた空気を取り入れる、熱い空気を放出する

保育室上部金属屋根の金属面で暖めた空気を、光の塔から取り入れて建物内部に循環できるようにした。夏場の暑い時期は同じファンを活用して、熱い空気をデン上部にて外部に放出できるようにした。

大空間をやわらかく空調する

２層吹抜けとなる遊戯室は、子どもたちの遊び場として使われるだけでなく、午睡（ひるね）の場所としても使用される。大空間を効果的に空調するために、床面輻射冷暖房とした。



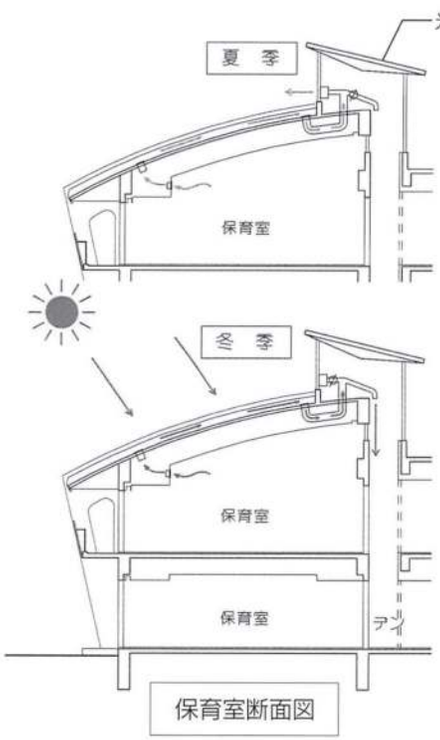
金属屋根と光の塔



光の塔１階部分のデン

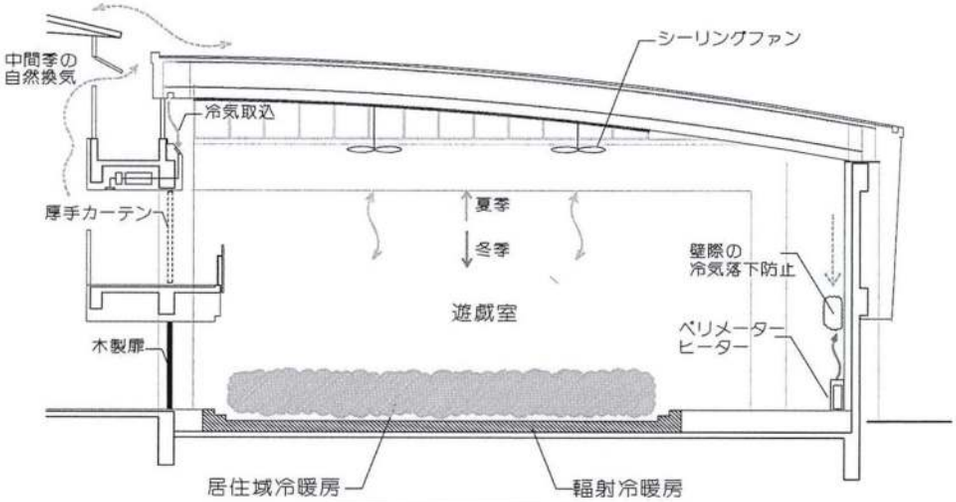


明るく居心地のよい遊戯室



保育室断面図

自然の風と光を取り入れ、子どもにやさしい設備システム



遊戯室断面計画

東海支部会員が語る

東海支部復活50周年記念事業を振返って

支部復活50周年
記念事業準備委員会

■はじめに

東海支部では、支部50周年記念事業の開催に際し、「支部復活50周年記念事業準備委員会」を立ち上げ、佐伯支部長を委員長として、常置委員会長と総務委員でさまざまな企画や行事を進めてまいりました。総会や見学会、講演会など、会員の皆様や興味を持っていただいた方々のご協力やご支援をいただき、この3月で無事終えることができました。

この3月号東海特集にてこの事業を振り返り、また新年度より新たな気持ちでこの東海支部を盛り上げていきたいと思います。

年　月　日	行　　事	担当委員会
2009年9月	■建築見学会（美術館·博物館） 「初秋の近畿路、琵琶湖と優秀の建築を巡る旅」	事業委員会・研修同好委員会合同のプレイベント企画
10月	■会員親睦ゴルフコンペ（瑞陵CC）	研修同好委員会
12月	■「東海の建築」72号発刊	編集委員会
2010年3月	■「建築と社会」2010年3月号 「身近な街道、宿場町：愛知」等の企画、編集を担当	特別編集委員会
5月	■支部復活50周年記念式典 総会、講演（名古屋ガーデンパレス） 「しぜん」「まち」「ひと」（建築と社会・東海特集の合本）発行	支部長・総務委員会
6月	■親睦ゴルフコンペ（三重CC）	研修同好委員会
	■海外建築見学会（韓国） 釜山～慶州～大邱～ソウル（3泊4日）	事業委員会
7月	■「東海の建築」73号発刊	編集委員会
	■近代建築見学会 「熱海・御殿場の近代建築散策」	副支部長・総務委員会
10月	■支部復活50周年記念講演会 「建築と都市の未来を語る」 講演：若山　滋先生、水尾衣里先生 於：電気文化会館	副支部長・総務委員会
	■親睦ゴルフコンペ（三重CC）	研修同好委員会
11月	■「東海の建築」74号発刊 支部復活記念号·名簿	編集委員会 会員委員会
12月	■近代建築見学会 聴竹居、待庵（京都）	副支部長・総務委員会
2011年3月	■「建築と社会」2011年3月号 「岐阜の建築文化にみる遺伝子」の企画、編集を担当	特別編集委員会

■プレ見学会：「初秋の近畿路、琵琶湖と優秀の建築を巡る旅」

2010年に日本建築協会東海支部が復活50周年を迎えるにあたり、そのプレイベントとして、2009年９月５日、６日の１泊２日で美術館や博物館を巡る研修旅行を企画し、25名の方にご参加いただきました。

１日目は、MIHO　MUSEUM⇒滋賀県立琵琶湖博物館⇒佐川美術館　樂吉佐衛門館の順で巡りました。緑深い山中に建てられたMIHO　MUSEUMは大自然の中を散策するような開放感で、各自思い思いの時間をゆっくり過ごしました。滋賀県立琵琶湖博物館は、今回多数ご参加いただいた日建設計が設計担当された建築で、親近感を感じながら見学しました。

佐川美術館では、日本画の平山郁夫氏、彫刻の佐藤忠良氏の日本を代表する二人の芸術家の豊富な作品を堪能することができました。樂吉左衛門館の茶室は、杉目が型押しされたブラックコンクリートの壁が見事なまでに美しく「現代の茶の湯にふさわしい、現代の茶室があるのでは」という樂吉左衛門氏の思いが結集された、なんとも言えぬ幻想的な美しい茶室で、ただただ感嘆するばかりでした。

２日目は、見学コースとゴルフコースの２班に分かれ、見学コースは奈良100年会館⇒ガレリアかめおか（図書館・集会場）。ゴルフコースは、名門のチャンピオンコース「瀬田ゴルフコース」を楽しんでいただきました。

２日間にわたり見ごたえのある建築物を巡り、皆様と充実した時間を共有し、親睦を図ることができたプレイベントにふさわしい有意義な研修旅行となりました。（山本）



MIHO MUSEUM



佐川美術館

■東海支部復活50周年記念式典

昨年、５月21日に名古屋ガーデンパレスホテルにおいて、（社）日本建築協会東海支部復活50周年記念式典及び祝賀会が開催され、公務多忙な中、愛知県建設部技官の松井氏や名古屋市住宅都市局の山本氏、そして建築八団体の団体長の皆様、建築協会中井会長も来賓として加わり、華やかに行われました。記念式典では、歴代支部長の中島一氏、森口雅文氏、小宮三辰氏、松本壮一郎氏（任期順）に続き、団体会員（20社）そして、事務局の大木さんに感謝状が佐伯支部長から渡されました。また、祝賀会では、歴代支部長を囲み支部復活50周年の軌跡をたどり苦労話や今後の東海支部への期待などを拝聴し、時間を忘れて初夏の夕べを満喫しました。

支部復活50周年記念事業準備委員会では記念式典や記念事業の実施に向けて皆様からの資料提供等、幅広いご支援を頂きました。支部の軌跡をたどりながらの準備は、50年という歴史の重みを感じながらの貴重な体験でした。

委員会では、建築を通して街づくりから地域づくりへ、そして更に国づくりまで発展させると言ったコンセプトで準備を進めそれぞれが50周年記念事業として意義あるものとなりました。（福田）



歴代支部長感謝状贈呈



団体会員感謝状贈呈

■「建築と社会」東海特集／街道・宿場シリーズ合本

支部復活50周年事業の一つとして本協会機関誌「建築と社会」東海特集の合本版を編集することになりました。合本と言う以上、全部を掲載すべきところですが、予算にも、ページにも限りがあり、「しぜん」「まち」「ひと」をテーマに整理をすることになり、テーマと合致するものを中心に181ページを選定しました。

東海特集には、東海の「作品、作風」と題し、この地方の竣工まもない優秀な建築作品を掲載していましたが、今回の合本には掲載していません。具体的には、前回の支部復活35周年記念以降の地域シリーズ1994～2001、愛知・名古屋特集2002～2005、街道・宿場町シリーズ2006～2010の一部を合本しました。（松本）



■「東海の建築」

支部復活50周年を向えて会員より「東海の建築」への意見・要望を戴きましたが、「会員にとって面白い誌面とはどういうものなのか」建築を取り巻く厳しい環境の中で「次の時代へ継ぐべき誌面とはどういうものなのか」、なかなか良い考えがまとまりません。シリーズとなっている「東海再見」では会員企業を中心に、企業の持つ技術等をPRも兼ねて発表してもらっています。特に記念号となる74号では、これから先の時代に向けてのあり方等、更にはエネルギー問題と省エネ技術について寄稿していただきました。歴代支部長からのメッセージでは、東海支部復活の歴史と今後のあり方について貴重なご意見をいただきました。これからの誌面の充実に生かしていきたいと思います。（松元）



■親善ゴルフコンペ

会員親睦ゴルフコンペは1994年、森口支部長（現相談役）の肝煎で第１回開催以来、春と秋に東海三県のコースを巡回し17年目を迎えます。2010年は第32、33回共、開場50周年の老舗コース三重CCで開催しました。

開場前年に伊勢湾台風に遭遇、昨年夏は酷暑の中で不休のコース管理、節目の年の逸話も聞きました。

鈴鹿の山をバックに豊かな自然を活かした手づくりのコース。距離感を出しにくい15番打下し、12番山登り、13番と14番の川越え、６番の砲台などは挑戦意欲をかき立てます。

芝目と勾配が微妙なグリーンも戦略性は十分。林立する巨大な黒松や楠は風格を漂わせています。１番ティの近くに６番アイアンを杖に持つゴルフ地蔵さんがスタートを見守っています。

当コースの設計者保田与天氏が愛着をこめて建立された旨、由来記に記されています。

さて、当コンペは“楽しく”をモットーにダブルペリア方式です。女性会員や新会員の参加により、賑やかな中で毎回、熱戦を繰り広げます。今回の記念コンペではアウト50、イン50と50づくしに加えてドラコン賞等も獲得された越智会員が50周年記念コンペ大賞に輝き、快（怪？）プレーを自己申告して記念賞をゲットする判定会でパーティーが盛り上がりました。50周年のご縁が印象に残る今回のコンペでした。末長くこのコンペが続くことを望んでいます。（芳山）





■韓流ブーム最中の韓国現状探訪

「冬のソナタ」に始まった韓流ブームにより最近は非常に身近に感じる韓国の現状を、自分の目で確認したいという思いで、東海支部復活50周年記念事業の一環として、今回の見学会を企画しました。

総勢19名の参加を頂き、昨年の６月17日より３泊４日で韓国を訪れました。セントレアから２時間ほどで釜山に着き、慶州→大邱→ソウルと北上し、今何かと話題の国際ハブ空港の仁川から帰国という世界遺産を網羅した代表的なルートに加え、サムソン美術館や清渓川再開発など、独自の見学先を盛り込みました。

新聞・雑誌やTVで報じられる今の韓国をある程度は知っているつもりでしたが、高層ビルの林立、片側４車線の高速道路網、色彩鮮やかな世界文化遺産の数々、人や物で活気に満ちた街中の雑踏等々、実際に目の当たりにすると驚きの連続でした。東京に負けず劣らぬ都市部の景観は、我まち名古屋を田舎と感じてしまうのは私だけでしょうか？しかし、少し郊外の田植えが終わったばかりの車窓からの田園風景は、日本とそっくりで妙に親近感を持ちました。

近代的な高層ビルや集合住宅群は無国籍（よく言えばグローバルな）デザインで、私から見れば特に目を引くものではありませんでしたが、しかし、歴史的な文化遺産は良く保存され、あちらこちらで小学生の子供たちの課外授業とおぼしき場面に出会い、国として次の世代にしっかりと伝えて行こうという意識を垣間見ました。また、清渓川の再開発を見て、東京や大阪の高速道路と化した都心の川の景観の見直しの必要性を痛感しました。

現状の街並みを見たり、数々の世界文化遺産を巡り、日本文化への影響の大きさや、朝鮮の人々や、今までの一方的な歴史観がいかに偏見であったかを思い知り、改めて両国の深い絆を実感した旅でした。

「東海の建築」の第74号に、参加された加藤さんの見学記が掲載されていますので、詳しくはこちらをご覧下さい。（中村）



仏国寺にて（参加者全員）



サムソン美術館



昌徳宮

■支部復活50周年記念会員名簿

支部復活50周年記念の会員名簿の作成にあたり、個人情報保護法の制約があるなかで会員委員会のメンバーで支部復活50周年に相応しい会員名簿を作成しようと議論を重ねました。

従来の名簿の表紙は全て白色がベースで黒色の文字の表記でしたが、過去の会員名簿が並ぶ中において一目で判る名簿にしようということで決まり、記念名簿は黒色をベースに白色文字で表記するという形にしました。

来年度からは、白表紙の名簿になりますが、この黒表紙名簿を「次の50年」に向けての新たな一歩として、魅力ある活動を社会に発信して、会員増強に努めていきたいと思います。（北川）



■熱海・京都の近代建築（住宅）散策

昨年、７月31日と12月４日、二回に分けて近代建築(住宅)散策に出かけました。熱海のブルーノ・タウトによる日向邸では保存会会長の今井氏の巧みな話術がタウトの赤裸々な生きざまをリアルに伝え、平和のために捧げた建築家の人生が走馬灯のように蘇ってきました。その午後訪れた御殿場の岸信介邸の華麗で上品な空間は建築家、吉田五十八の日本美が堪能できる見事な住宅建築でした。日米安保条約改定に奔走した岸信介が余生を送った住宅は彼の平和に対する思いを包み込んでいるようで、立場の違いがあるとはいえ、ブルーノ・タウト、岸信介の平和への思いを感じた一日だったと思います。

二回目の京都、聴竹居は晩秋最後の紅葉観賞の中、建築家、藤井厚二の試行があらゆる部位にみられ、彼の数寄の心がほのかに漂い、徒歩５分に隣接する茶室、妙喜庵「待庵」からの日本美が見え隠れする傑作でした。当日は天王山中腹の大山崎山荘美術館（新館は安藤忠雄設計）にも立ち寄り、印象派の絵画も見られ充実の一日となりました。そして帰りの京都駅は年末を迎えた雑踏が現代建築を代表する駅舎の賑やかな空間と合わさり新旧の対比を興味深く感じた散策でした。

もし、許されるならこうした街並み散策をこれからも続けたいと思います。（福田）



岸信介邸



聴竹居

■記念講演会

名古屋の都市を考え、またこの50周年記念事業を広くPRするためのイベントとして、昨年10月２日に記念講演会を行い150名の方に参加いただきました。

タイトルは「建築と都市の未来を語る」。中京大学客員教授・椙山女学園大学客員教授の若山滋先生と、名城大学人間学部教授の水尾衣里先生に講演と対談をしていただきました。

若山先生による基調講演「都市の拡大と集約へーインテンシブ・シティ」では、今後の日本の都市化について「インテンシブ・シティ（集約都市）」の切り口で大都市、中小都市の役割、「接触・触発・交換」の空間としての社会資本の形成についての提案をされました。

続いて水尾先生より、PFIやコンペの中で「総合評価」「民意を入れた」「統計的」というううたい文句のもと、建築的に優れている面とは別のところで判断される状況への問題提起がありました。

対談では、50年後の名古屋について、名古屋駅前の再開発をはじめ、河村市長による「名古屋が変われば日本が変わる」次世代都市のモデルとなりうる可能性を秘めている、など興味深いお話を聞くことができました。

なお、この講演に参加された方にアンケートをお願いしたのでその結果を報告します。

【職歴】学生：31人、設計事務所：27人、建設会社：９人、建材メーカー：４人、大学関係者：３人、その他：８人

【知ったきっかけ】知り合いから：33人、チラシ：23人、HP：４人。CPD認定プログラムや紹介情報からの人も３人みえました。

【今回の内容について】興味がある、または講演を聞いて更に興味を持っていただいた方は76人。

【このような講演会があれば参加したいか、またいくらなら？】無料なら参加したい：56人。有料でも1000円～3000円までなら参加したいと意向の方は19人みえました。

【日本建築協会に期待することは？】激励の言葉や、若い方への啓蒙活動への期待、同様の講演会の開催の希望がありました。また、講演会や協会を通じて名古屋の話ができる機会を増やしてほしいとの要望もありました。

【ご意見、ご要望】建築だけでなく他分野との融合講演を要望。配布冊子の内容を濃くしてほしい。

上記のご意見を踏まえて今後も協会を通して社会に発信していきたいと思います。

ご協力ありがとうございました。（冨田）



若山先生



水尾先生



会場の様子

■記念事業を終えて

一昨年から準備をしてきた50周年記念事業も昨年、12月４日の近代建築散策で全ての事業が終りました。準備委員会で記念行事を担当され、企画・実施に携わった皆様方に改めてお礼申し上げます。

さて、2011年元旦の朝日新聞の社説は「なんとも気の重い年明けである。……」で始まります。東海支部は、この記念事業から50年を振り返り、新たな50年に向けてスタートラインに立ちました。山積した現代社会の課題に「建築と社会」を通して会員の皆様方と共に真摯に取り組んで行きたいと思います。（福田）

483

法令コーナー

「建築構造・審査検査要領(2011年版)」

田中慎治

大阪市計画調整局建築指導部担当係長
[建築確認担当（構造強度)]

日本建築行政会議構造部会が「建築構造審査要領（平成11年版)」を10年ぶりに「建築構造・審査検査要領（2011年版)」(以下「審査検査要領」という）として改訂出版する。

「審査検査要領」はⅡ編構成のうち第Ⅰ編を先行発刊し、その内容は（財）建築行政情報センターのホームページに公開されている「構造審査・検査の運用解説」[2007年10月10日（最終修正：2008年２月22日）編集：日本建築行政会議]をベースにバージョンアップするとともに、2007年６月に施行された改正建築基準法を始め、2010年６月施行の改正建築基準法施行規則や改正された「平成19年国交告第835号」(以下「指針告示」という）の内容を取り込んだ運用方針とその解説を盛り込んでいる。

今回はこの中から、３点をご紹介する。

- 厳格化された改正建築基準法に関連して、「任意の構造計算適合性判定」(以下「構造計算適合性判定」を「構造適判」という）についての技術的助言
- 指針告示に関連して、既存建物へ増築する場合の「構造適判の要否の確認」
- 確認手続きの運用改善に関連して、計画変更に係る確認を要しない「軽微な変更」

「審査検査要領」

■「任意の構造適判」

「審査検査要領」に以下の記載がある。

建築主等が法第20条第２号イの構造計算の審査を行うにあたって、以下の場合には、法令上、第６条第５項に基づく構造適判を求めることができない。

- 高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律（バリアフリー法）や長期優良住宅の普及の促進に関する法律（長期優良住宅法）に基づく認定申請において、確認申請が併願された場合の審査（各法令において、準用する建築基準法の条項に法第６条第５項が規定されていないため)
- 完了検査後に指針告示第３第４項に基づき求める、追加説明書の審査（法第６条第１項に基づく申請手続きではないため)
- 令第137条の２を適用する場合の審査（建築物全体について、法第20条の規定が適用されないため)
- 建築基準法第86条の８に基づく全体計画認定申請の審査(法第６条第５項が適用されないため)

これらの場合においても、建築主事等は構造適判と同等の審査を行う必要があるが、これを自ら行うのではなく、任意の構造適判を求め、その結果を参考にして審査を行う方法がある。

任意の適判を求める主体は、特定行政庁、認定に関する所管行政庁、建築主事若しくは指定確認検査機関又は建築主のいずれでも良いが、認定基準に位置づけるなど明確化しておくことが望ましい。

任意の構造適判は一部の適判機関で実施しており、法に基づく構造適判とは異なる業務規定をそれぞれの判定機関で定めている。具体的な手続きは当該業務規定による。また、任意の適判は法に基づくものではないため、判定手数料には消費税が加算される。

なお、具体的な業務規定・業務約款の作成にあたっては、日本建築行政会議の構造部会及び構造適判部会から部会長通達として「任意の構造適判にかかる手数料及び業務規定について」(平成５年５月１日付）が出されており、これらを参考とすることも考えられる。

このように任意の適判の実施方法を解説している。

■「構造適判の要否の確認」

指針告示第１第２項第五号ロ、第六号に関連して、既存建築物へ増築する場合の構造適判の要否の一例で、以下の記載がある。

ケース	規定
①（既存不適格ではない）＋②において一の建築物として法第20条第二号の適用を受ける場合 Exp.j ①既存建築物 ※既存不適格ではない / ②法第20条第二号（増築）	一の建築物として法第20条第二号の適用を受けるため、増築部分である②については令第81条第２項に定める構造計算を行う必要があり、②について構造適判を要する。なお、①については、申請者等は現行規定に適合することを示す必要があり、構造適判を要する。ただし、現行規定による構造適判を既に受け、その後の建築物の改変等がないなど、再度構造適判を行うことなく構造関係規定の適合が確認できる場合は、従前の判定をもって適合するものとみなすことができる。

このように今回なお書き以下を新たに補足して、解釈の明確化を図っている。

■「軽微な変更」

「審査検査要領」に以下の記載がある。

- 軽微な変更の原則

規則第３条の２第１項については、第八号から第十一号を追加する改正が、平成20年５月27日に公布・施行された。その後、平成22年３月29日公布、平成22年６月１日施行の建築確認手続き等の運用改善を図るための規則改正により、軽微な変更の適用範囲が見直された。

- 基本的な考え方

「軽微な変更」の対象となるのは、計画の変更が規則第３条の２第１項第一号から第十五号のいずれかに該当し、かつ、変更後の計画が「建築基準関係規定に適合することが明らかなもの」に限られる。このため、各号のいずれにも該当しない変更については、「建築基準関係規定に適合することが明らかなもの」であっても計画変更確認申請を要することとなる。また、「建築基準関係規定に適合することが明らかなもの」とは、高度な計算や検討によらずに建築基準関係規定への適合が確認できるものであることが、平22国住指933号により示されている。

- 「軽微な変更」はそれぞれの変更事項毎に判断するものであること

複数の計画の変更が生じる場合には、それぞれの変更事項（以下「一の変更」という。）毎に、規則第３条の２第１項第一号から第十五号に規定する「軽微な変更」に該当することを判断する。このとき、「軽微な変更」に該当する変更(例えば、八号の「小梁の位置の変更」）と、該当しない変更（例えば、「建築物の配置の変更」などいずれの号にも該当しない変更）がある場合には、「軽微な変更」に該当しない変更（ここでは、「建築物の配置の変更」）については、計画変更確認申請を要する。また、「一の変更」が、規則第３条の２第１項各号のうち複数の号に関わる場合については、同項各号の一に該当するが他の号に該当しない場合であっても、建築基準関係規定に適合することが明らかなもの」であれば、「軽微な変更」に該当することとなる。

したがって、ある計画の変更があった場合、「一の変更」毎に、その変更の内容が本条のいずれかの号に規定する内容に該当するかどうか、かつ、その変更の内容が「建築基準関係規定に適合することが明らかなもの」であるかどうかを判断し、計画変更確認申請の要否を判断する必要がある。

「一の変更」とは、ある変更及びそれに伴い発生する一体的な変更や、ある変更及びそれに伴い行われる不可欠な変更のことである。なお、「一の変更」が、意匠、構造、設備の規定に関わる場合もあるので、慎重な判断を要する。

このように運用方針を解説している。

おわりに

構造設計者や審査者が積極的に「審査検査要領」を活用することにより、業務の軽減や更なる建築確認申請手続きの円滑化が図られることを期待している。

なお、2011年２月22日に国交省よりパブリックコメントの募集があり、今後の動向に注目されたい。

（たなか　しんじ）

379
構造の頁

築100年煉瓦造建築物の耐震補強

野澤裕和・村上陸太
㈱竹中工務店設計部構造部門

西本願寺伝導院は1912年（明治45年）に、真宗信徒生命保険会社の社屋として竣工した煉瓦造の建物である。1988年に京都市指定有形文化財（建造物）に指定され、現在に至っている（**写真1**）。

設計コンセプトは「明治期の文化遺産の再生・保存」であり、外観、内観をそのままの形で残した耐震補強を実現する必要があった。

本論では、この耐震補強方法について紹介する。

建築概要

建物名称：西本願寺伝道院
設計者：東京帝国大学教授　伊東忠太
施工：㈱竹中工務店
補強設計・施工：㈱竹中工務店
建築面積：671.27㎡、延床面積：1,544.21㎡
階数：地下1階　地上3階
構造：煉瓦造、　床・屋根　木造

耐震補強概要

煉瓦造建物の補強設計を行うために、まず建物調査を行い、耐震性能を確認した。煉瓦造建物の耐震性の確認には、①面内地震力と②面外地震力のふたつに対してあり、①の面内地震力に対しての耐震性は目地のせん断強度により決まるため（**写真2**）、煉瓦壁のコア吹きを行い、目地のせん断強度試験を行った。また軸力を考慮した目地のせん断強度も確認するため、原位置でのせん断押し抜き試験も行った（**写真3**）。

試験結果より、面内地震力に対して現状の目地強度で十分安全であることが確認できた。②の面外地震力に対しては、大部屋に面している煉瓦壁に大きな地震時応力が発生するため、2、3階大部屋床の剛性を確保し、煉瓦壁の面外応力を小さくするために、床の大引、根太の間に鉄骨ブレースを配置する床面鉄骨補強を行った（**図1、写真4**）。また、面外曲げに対しての抵抗を向上させるために、煉瓦壁を削孔し、鉄筋（D22）を煉瓦壁頂部から挿入（**写真5**）して煉瓦壁と一体化させる煉瓦壁内鉄筋補強（**図2**）を行い、耐震性を向上させた。

おわりに

本建物の耐震補強を含む改修工事は、2011年～2012年にかけて行われる親鸞聖人750回大遠忌に向けた長期振興計画の一環であり、2011年3月の竣工に向けて現在着々と進んでいる。

今回、外観、内観をそのままの形で残す耐震補強を実現し、京都市指定文化財である文化遺産「伝道院」の保存・再生に携わることができて、非常に光栄に感じている。

（のざわ　ひろかず・むらかみ　りくた）



写真1　全景写真



写真2　面内地震力による目地破壊形状

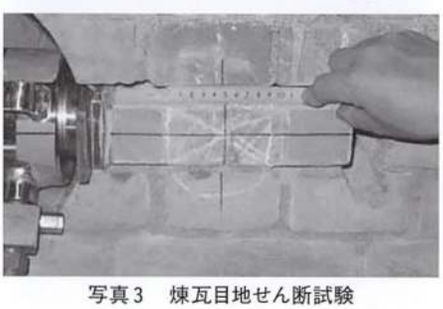


写真3　煉瓦目地せん断試験



図1
床面鉄骨補強

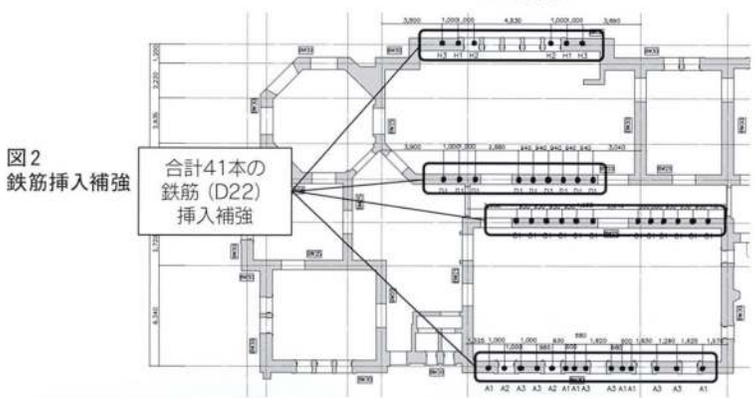


図2
鉄筋挿入補強

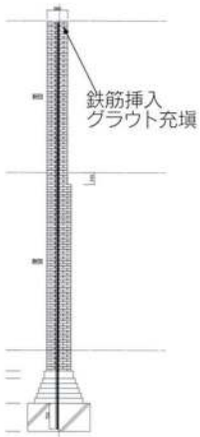




写真4　床面鉄骨補強



写真5　鉄筋挿入孔（64φ）

24

再読　関西近代建築
――モダンエイジの建築遺産――

神港ビルヂング

坂本　勝比古

所在地／神戸市中央区海岸通8番
設計／木下建築事務所
施工／竹中工務店
竣工／昭和14年2月
構造／鉄骨鉄筋コンクリート造
規模／地上8階、地下1階
種別／ビルディング

■はじめに

昭和14年（1939）4月号の本誌・新建築欄に掲載されたこの建物は、新鮮なモダニズムの表現が感じられる数葉の写真と簡単なキャプションはあるのだが、建物の内容についての詳しい説明は一切なされていない。

ただ、今改めてこの時代を振り返ってみると、あの悲劇的な敗戦の惨禍に見舞われた太平洋戦争突入前夜の厳しい時代の影がそこにあり、幸いにして戦災や震災からの破壊を免れたこの建物を通して、近代建築の潮流の一端を知ることができる。また、近代都市神戸の都市空間を豊かに構成した、旧外国人居留地海岸通りの重要性を理解するうえで、この小文がそのような問い掛けに応えるよすがになれば幸いである。

さらに近代建築物は、それが生み出される背景として、その時代や建物の成り立ちにかかわった人物、建築家やクライアントなどの存在を知ることも、大切な要素であることは申すまでもない。

■神戸バンドの成立

神港ビルは、その立地が神戸の都市の顔とも言える海岸通8番にあったのだが、この地域の沿革について触れてみたい。神戸はもともと開港したのが明治元年（1868）で、日本が近代国家として歩み始めた時期と一致する。そのとき外国人居留地が設けられ、西欧的な発想になる都市計画が進められた。その基本的な考えとして、海岸通はバンドと称されプロムナード（遊歩道）が設けられた。海からの眺望に応えられるように、海岸通に面する地所については、一区画を約600坪とし、後背地の約300坪の2倍近い面積をとって、規模の大きい建物の出現を期待するものであった。したがって、メリケン波止場から東へ向かって12番まで、5ブロックに区画が設けられ、英、米、蘭、独など各国の商館が建てられたのが始まりである。最初は主屋や付属屋、倉庫など住宅を兼ねたこぢんまりした規模であり、その完成当初から評価が高く、「東洋に於ける最も整った居留地」と英字新聞に評されるほどであった。

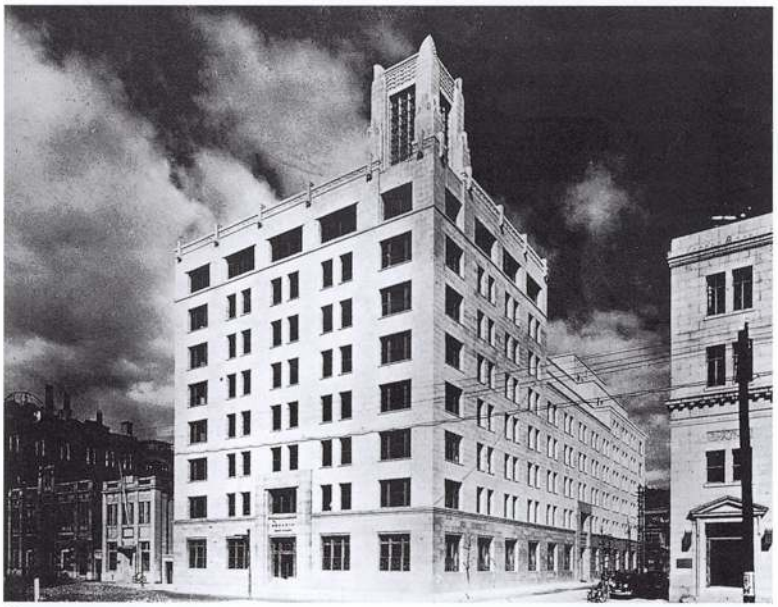
しかし時代が進むにつれて、建物の規模が大きくなり、その早い例は2番に建った香港上海銀行（明治35年）で煉瓦造2階建、南面にアーケードベランダを持つヴィクトリアン・ゴシック風の大規模な洋館を建てたのが始まりであった。ついで6番に建ったオリエンタルホテル（明治40年）は、ドイツ人建築家G・デラランデの設計になるゼセッション風を加味した斬新なデザインのホテルができる。続いて大正期に入り第一次世界大戦の勃発を機に、外国系商社の衰退に代わって日系商社、船会社の進出がみられた。3、4番の三井物産神戸支店（大正7年、設計：河合浩蔵）5番の大阪商船神戸支店（大正11年、設計：渡邊節）、9番のチャータード銀行（昭和11年、設計：モーガン）と続き、いずれも海岸通の景観形成に寄与してきた。

■神港ビル建設に至る経緯

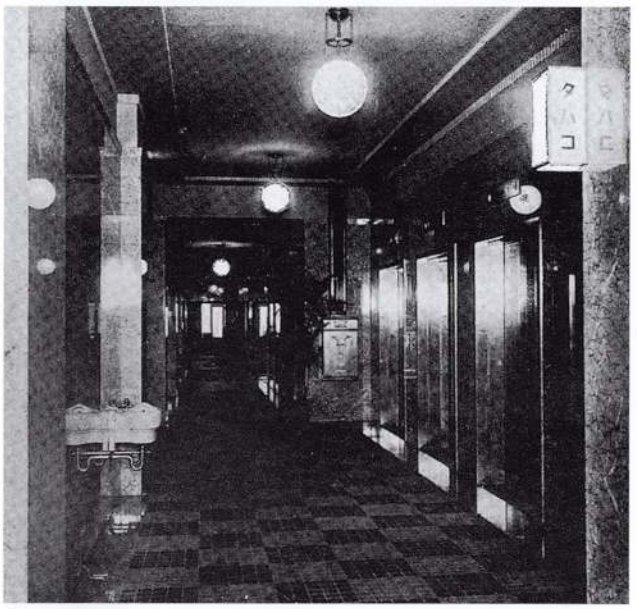
神港ビルは、近代神戸の発展と深い結びつ



①外観（現在）



②



③



④

②外観全景（竣工当時）以下*印

③1階エレベーター・ホール前（*）

④8階倶楽部（*）

⑤8階食堂（*）
最初はオリエンタルホテルが経営していた。

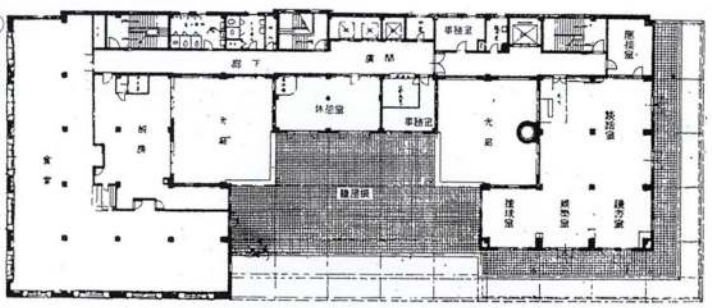
⑥8階平面図

⑦1階平面図

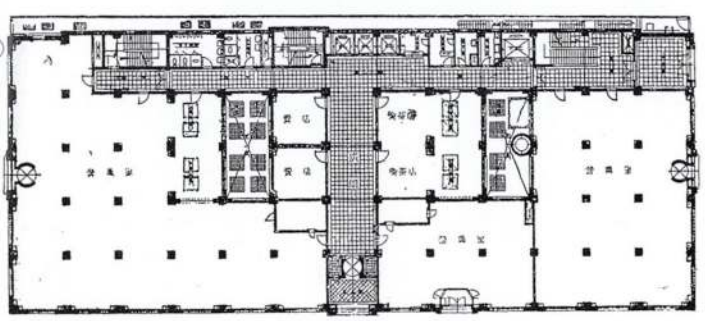


⑤

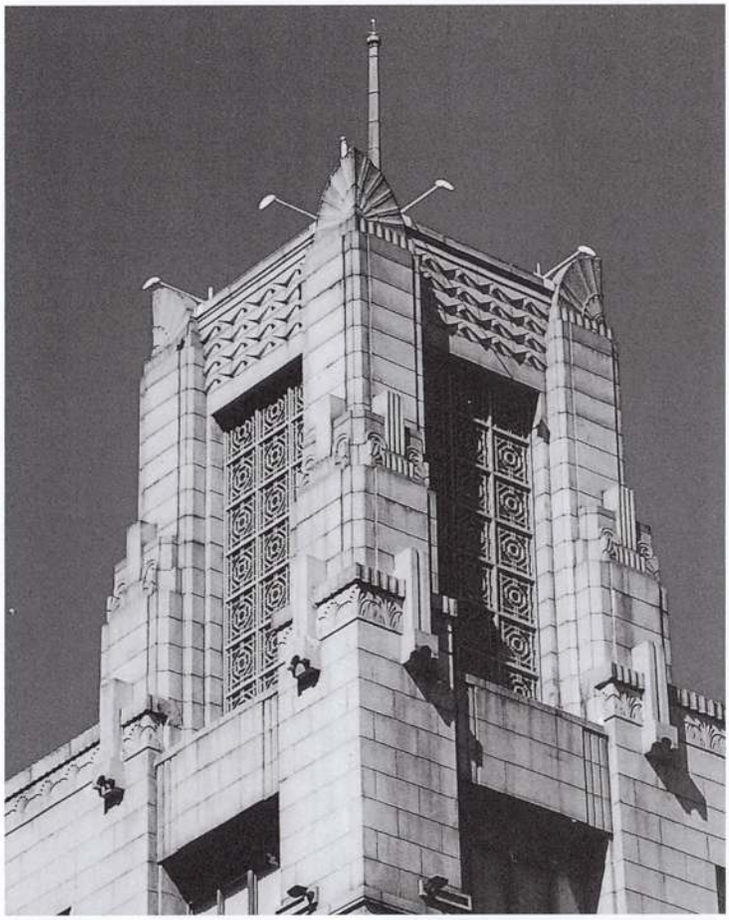
⑥



⑦



「建築と社会」第22輯4号（昭和14年4月号）より



⑧



⑨



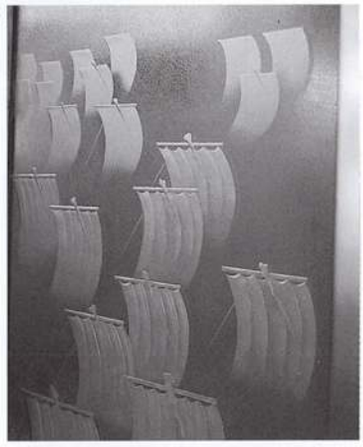
⑩



⑪



⑫



⑬

⑧東南塔屋部分
⑨屋上塔屋
⑩屋上塔屋部分
⑪1階玄関ホール
⑫1階廊下
⑬8階・旧喫茶室
ガラス間仕切りのエッチング

きがある川崎造船所が、船会社との関係が強い東京海上火災保険会社との共同出資によって誕生した会社である。

ただそこに至る経緯を述べると、川崎造船所は、わが国造船業の開拓者として知られた川崎正蔵が興した会社で、明治14年（1881）兵庫東出町に川崎兵庫造船所を開いた。同19年には官営兵庫造船所の払い下げを受け、川崎造船所として発足、文字通り神戸市の盛衰とともに発展してきた。

明治29年（1896）松方幸次郎を社長に迎え、第一次世界大戦に際しそれまで営んできた海運事業の船舶部を独立させ、大正８年(1919)川崎汽船株式会社として、本社を海岸通８番に置いたのが始まりである。川崎汽船は、KラインまたはKファンネルシップと呼ばれた。赤地の煙突に白色のKイニシアルを持った汽船として知られ、神戸をベースとして優秀な貨物船を建造し、世界の港を結び活動する神戸となじみの深い船会社に成長していく。

この会社は、昭和７年（1932）３代目社長であった鹿島房次郎が亡くなり、その後任として選ばれたのが平生釟三郎（1866～1945）であった。当時、平生釟三郎は東京海上火災保険の専務を辞して、甲南学園の理事長として教育事業に打ち込むかたわら、社会奉仕活動の一環として病院設立の願望があった。明治42年、住まいを大阪から阪神間の住吉に移し、地域の生活環境の向上に努力を払っていたが、設備の整った病院を建てることは、社会奉仕活動を進めるうえでの大切な要素と考えていた。この念願がのちに二つの大型病院（甲南病院と川崎病院）の建設に結びつき、それに建築家・木下益治郎が参加することになる。

平生釟三郎は岐阜県の出身、東京高商を出て東京海上火災に入り、大阪、神戸の支店長を務め、一時ロンドンに赴任することもあった。

彼は、昭和６年川崎造船所の和議整理委員に選ばれており、川崎造船所の社長となってからも従業員やその家族の健康を思い図って、一大総合病院の建設を計画し、湊川の東山町に昭和10年（1935）末、川崎病院を完成させている。

■建物の概要

この建物の建設に当たっては、少なからず困難を伴うことがあった。それは建物の着工が昭和12年２月であり、その５ヵ月後に盧溝橋事件が発生、戦時体制が強化された。翌13年７月「鉄鋼配給統制規則」が実施されるに至って、大型建築工事の施工は極めて厳しい状況を招くこととなった。しかし、この建物が神戸港の繁栄のため寄与されるとの目的があって、神戸市長の助力もあり、完成にこぎつけることができたと竣工当時の建築概要に記されている。

まさに第二次世界大戦突入直前の完成であった。建物の規模は鉄骨鉄筋コンクリート８階建、地下１階、屋階を持つ建築面積521.112坪、総延面積4,345.016坪、軒高100.5尺、様式は近世式とされるが、平滑な壁面、装飾を極力排したシンプルなデザインは、モダニズムの片鱗を見せる。だが、オフィスビルの基本である三層構成の手法と、東南部の塔屋に取り付いた装飾は、古典様式の柱頭飾りのモチーフを現代風にアレンジしたもので、アール・デコを連想させる造形表現は見事と言うべきであろう。

外壁の１階は、万成花崗岩石張り水磨仕上げ。２階から８階までは北木産花崗石張り上小叩き仕上げという丁寧な仕事で出来上がっている。内部の造作は一部玄関ホール及びアーケードはイタリア産大理石が用いられたが、ほかに昇降機前の広間は国産大理石、廊下はテラゾー張り付けとなっている。

各階の平面を見ると、敷地面積は612坪655をいっぱいに使って１階南側は川崎汽船の営業室、２階～５階は一般事務室、最上階８階の南側、港に面する部屋はオリエンタル・ホテルが経営するレストランで、当時は人気の高い食堂であったと言われる。南北に長いのでほぼ中間に位置する８階のエレベーター・ホール前は喫茶室が設けられていた。全体としてコンパクトな間取りで、立地条件によく適合した平面構成であると見られよう。そのほか付帯設備は冷暖房設備、換気設備、昇降機設備など当時として有力設備業者が参加し、主体工事は竹中工務店であった。神港ビルは戦争による被害、地震による損傷もなく存在感を示した。そして戦後、進駐してきた米軍のヘッドクォーター（神戸基地軍司令部）として接収されていたことは記憶に新しい。会社に残る設計図面のうち、配置図、１階平面図は昭和11年11月28日の記述があるので、この時期の作成であることが分かる。

■設計者 木下益治郎と平生釟三郎

木下益治郎は、明治、大正、昭和と続く日本の近代建築の多様な歩みのなかで、忠実に自らの職能を果たした建築家のひとりであったと言えよう。彼は明治26年（1893）工手学校造家学科を卒業し、当時としては数少ないフランス帰りの建築家・山口半六の事務所に籍を置く機会に恵まれた。その期間は短かったが、工手学校の先輩でもあった設楽貞雄も山口半六事務所の支配人兼所長代理の立場にあったので、よい経験を積んだことであろう。また、現在も残る兵庫県庁舎の設計に関与したことも考えられる。ただ木下はその後逓信省を経て、東京海上火災保険会社の現場主任として勤務したことが、彼の建築家としての立場をより高めるうえで役立つこととなった。

彼は昭和５年、東京海上を退職し、同７年に木下設計事務所を開設、さらに多くの建物の設計、監理に携わる契機となっている。

木下益治郎の事務所を開設してからの作品のなかで注目されるのは、大型建築物の多くが関西につくられていることである。例えば①三菱信託株式会社大阪支店（昭和６年８月１日～８年３月31日）、②甲南病院（昭和７年５月10日～９年６月20日）、③川崎病院(昭和９年７月～10年12月)、④神港ビル（昭和12年～２月～14年２月）などであるが、このうち①と④は三菱系の建物であり、②と③は、平生釟三郎が提起した事業であったから、木下は平生の要請を受けて設計、監理を行ったものとみることができる。そこに平生と木下との間に深い信頼関係があったものと言えよう。

この上記の４件のうち、①は信託機能を持つ建物であったことから、銀行建築並みの古典様式が採用されているが、ほかの３棟はいずれもモダニズムの構造意匠を持つ建物であった。

木下益治郎は、主な活躍の舞台を東京に置いていたと見られ、関西については、平生釟三郎との人脈が大きかったと言えよう。

いずれにしても、神戸を代表する海岸通にモダニズムのシンボリックな容姿を見せていることは貴重であり、管理者側としても、企業の持つ歴史的役割について理解を深めておられることに敬意を表したいと思う。

なおこの建物は、平成19年経済産業省より「近代化産業遺産」の認定を受けている。

今回の調査に当たって、神港ビルの管理部長・中井秀典氏、管理部部長・吉田昇氏に大変ご協力を賜った。また文献調査について建築史家・堀勇良博士より有益なご助言をいただいたことを記して厚く御礼申し上げたい。

参考文献
・川崎汽船50年史（川崎汽船㈱、昭和44.8.1）
・甲南学園の70年史（甲南学園、平成4.4.1）
・平生釟三郎（昭和27年５月22日、河合哲雄）
・建築家・木下益治郎の史料に関する研究１～４、松山哲則ほか、日本建築学会大会学術講演梗概集（九州）、平成19年８月

（さかもと　かつひこ／神戸芸術工科大学名誉教授）

「建築と社会」誌

特集一覧●1989~2010

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店 創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店 建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回 青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回 青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくり—II— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—＊	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」＊	●屋台—仮設の魅力に学ぶ—ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所 創立60周年 記念作品集	●大阪府営緒	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営緒	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと翼	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって—会員作品＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美—建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回 青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音—騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法—会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回 青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江—その地方振興と文化＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・歴史—風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ— ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法—会員作品—	●第44回 青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所 創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州—諏訪とその周辺—	●街並みの演出—最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備—ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98—21世紀に向けて	●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綴じる 小舟なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回 青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり—	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山—地域文化の基興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る—測定方法と測定結果が意味するもの—	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法—パートII—	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ—	●時間	●私の空間作法—会員作品— ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回 青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境—近未来に向けて今できること— ●大建設計—作品特集1996~2001—	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法—会員作品—	●第48回 青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心—パート2—	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●濱町リバーブレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて~サステナブルエンジニアリングの現在~	●私の空間作法—会員作品—	●第49回 青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所 創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える—	●サスティナビリティ~次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン~	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ—	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー~建築の主観的価値について~	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法—会員作品—	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯~心地よさを求めて~	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法—会員作品—	●第51回 青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法—会員作品—	●第52回 青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」~まちと共存する空港づくり~	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質~光と影のはざまで~	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー~エネルギーをたくわえ、有効利用する~	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回 青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…~構造が未来へつなぐ夢~	●私の空間作法—会員作品—
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作	●創立90周年記念—この10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりが創る住まいのカタチ	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正	●第54回 青年技術者	●ガラスを考える	●楽しい構造の世界
2008 vol.89	●私の空間作法—会員作品—	●PFI事業、その後	●東海支部会員作品2008＋東海支部特集3部作	●まちづくり2011年宣言	●新ホテル物語	●設備に役立つ地震対策	●中国地方を訪ね歩いて見えるもの ●小林聖心女子学院	●建築と景観	●第55回 青年技術者	●木造住宅を巡って	●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	●自然と戦う構造
2009 vol.90	●私の空間作法—会員作品— ●京阪電車 中之島線—首都が街(中之島)新時代—	●水の都 にぎわいのある未来に向けて	●東海—TOKAIオムニバス	●楽しい福祉	●体感するインテリア	●建築空間が求める空気環境（空気質）	●建築と水	●実用レベルで展開される施工管理のIT化	●第56回 青年技術者	●地域の歴史資産を活かしたまちづくり	●第16回 会員作品特集“私の空間作法”	●構造家日記~頭の中をのぞいてみたら~
2010 vol.91	●創業110周年記念特集 NIKKEN SEKKEI	●建築とエコ技術	●東海支部復活50周年記念号 東海—TOKAIオムニバス	●食と建築・都市	●ホスピタリティのあるケア空間	●太陽光発電	●建築と石	●再生・受け継ぐ・繋がる	●第57回 青年技術者	●建築ストック社会の形成への展望	●LED照明の活用・将来を考える~人・地球への思いやり~	●東京スカイツリー

＊は欠号

末包伸吾　—SUEKANE SHINGO—



事務所にて

学歴
1986年　神戸大学工学部建築学科　卒業
1989年　ワシントン大学大学院建築・都市計画学部建築学科　修了
1990年　神戸大学大学院工学研究科建築学専攻　修了
1996年　博士（工学），神戸大学

経歴
1990年　鹿島建設株式会社建築設計本部
1994年　神戸大学工学部建設学科　助手
1999年　神戸大学工学部建設学科　助教授
2009年　関西大学環境都市工学部建築学科　教授

主な受賞
1986年　日本建築学会近畿支部第40回卒業設計コンクール入選
1989年　ワシントン大学建築・都市計画学部優秀学生表彰
1989年　アメリカ都市計画学会ワシントン支部・ワシントン都市計画学会共同表彰
1990年　日本建築学会第１回優秀修士論文賞
1994年　第８回建築環境デザインコンペティション佳作
2000年　SDレビュー2000入選
2001年　日本建築学会作品選集
2002年，2003年　タイルデザインコンテスト入選（共同設計：Abax Architects）
2007，2008，2010年　日本建築家協会優秀建築選入選（共同設計者：Simplex）

聞き手　永野一朗（大林組）
写真撮影 河合止揚

多元性のハザマで

ある人は米ロサンゼルス近代建築研究の第一人者である「研究者」と認識し、ある人は空間構成論を軸に住宅設計を展開する「建築家」であると思い、そしてある人は大学で教鞭を執る「教育者」と信じて疑わない。末包伸吾氏は多元的である。その経歴もさることながら、この３つのフィールドで確固たる存在を示し、さらには行政における建築関連の審議委員やアドバイザーまで精力的にこなすそのスタイルは、関西建築界においても稀有な存在と言える。学生時代に神戸大学とワシントン大学で学び、鹿島建設株式会社建築設計本部を経て、1994年に神戸大学建築計画研究室に復帰。その後、2009年より関西大学環境都市工学部に活動の場を移し現在に至る。近年、多くの大学に見られる「建築家」教授が、作家としてのキャリアを踏んだ上で教育者として大学に迎え入れられるそれとは大きく異なるプロセスである。その特異なキャリアの中で、氏が一貫して追求してきたテーマが「空間構成」である。

まず研究者としては、米ロサンゼルス近代建築と言うそれまで確立されていなかった研究領域を、空間構成と言う視点で切り拓いた。そして、これらの分析で蓄積された空間構成法は、氏の代表作である「b-in-d」、「夙川の家」や「苦楽園の家」等の実作品で構造、壁、シークエンスと言った、それぞれの空間を司る主構成要素に姿を変えて展開されている。一方大学では、空間構成と言うフィルターを通してリアルな空間を抽象化することで、学生との「建築の共有化」を図っている。そんな共有化ツールとしての空間構成を「よく切れるナイフ」と学生達には説く。個々の建築に内在する「固有性」を認めながらも、その一方でこれらの固有性を横断するような「普遍性」が存在し、それこそが建築設計において豊潤な空間を調理できるナイフであり、氏が追求してきた「空間構成」そのものなのだ。ただし、もちろんそのナイフが万能ではないことも把握しつつ、常に「固有性」と「普遍性」をレイヤリングしながら二元論のハザマに立ち、ときにはその多元的な視点のハザマに立って、個々の事象の最適解を導き出していくことを自らの研究や設計に課している。

そんな多元的なスタンスのデメリットを問うと、「一人じゃ足りない」との弁。多元のハザマを軽やかに行き来し、繁忙を極めながらも、むしろそのハザマに居ることを楽しんでいるかのようでもある。今後も関西をベースとして活動を続けながら、「関西のいい部分を次世代に継承していきたい」と語るが、近年では自らの教え子達が建築界で活躍を見せ始めており、建築家としても教育者としても既に関西建築界形成の一翼を担う存在となっている。そんな中で、多元的な自らの存在が、建築を取り巻く次世代の人々のネットワーク構築における触媒となり、ひいては関西建築界を活性化することが自らの一つのゴールと考えているようだ。

坂本龍一氏の著書「音楽は自由にする」を引用しながら、二元論のハザマにおける自らの空間構成分析の到達点を「建築の限界、建築の力」を知ること、と語り、氏は今回の対談を締めくくってくれた。「研究者」、「建築家」、そして「教育者」、それぞれのポストにおける今後の具体的展望をこともなげに語るその姿勢は、まさに自分自身の固有性と普遍性をレイヤリングすることによる「自らの限界、自らの力」を追求するあくなき挑戦にほかならない。

株式会社 **徳岡工務店**

代表取締役 **徳岡聡一**

本　　社　〒532-0033 大阪市淀川区新高6丁目6番18号
TEL(06)6391-1438(代) FAX(06)6397-1737
建築生産本部　〒661-0965 尼崎市次屋3丁目6番60号
TEL(06)6499-2216　FAX(06)6499-9124
E-mail　honsha@tokuokas.co.jp
ホームページ　www.tokuokas.co.jp コーポレイトサイト
www.tokuokakoumuten.com 高級注文住宅サイト
www.tokuoka-co.jp ソリューションサイト
www.newpj-tokuoka.com 新建築作品



牧野の家



高石の家



苦楽園の鍼灸院



緑地公園の家



大阪「かくれた ええとこ」再発見ツアー記

実 施 日：2010年11月21日
参加人数：21名
主　　催：日本建築協会10年委員会

11月21日、晩秋のうららかな陽気のなか、大阪「かくれたええとこ」再発見ツアーは行われた。

今回のツアーは、日本建築協会が2017年に迎える創立100周年に向けての事業の一環としての「大阪ええとこそうせい（創生）プロジェクト」ひとつとして企画された。

プロジェクトの担当は2007年4月に発足した『10年委員会』。100周年に向けて10年間継続で社会に働きかける具体的活動を立案、実践していく委員会である。プロジェクトの趣旨は、大阪市内のポテンシャルを秘めた“かくれたええとこ”を一般公募し、入賞したもののなかからさらに選出をし、潜在的な魅力を引き出すためのアイデアコンペへと進めていこうというもの。

“かくれたええとこ”の募集は2年にわたり2回行われた。2009年の第1回大阪「かくれたええとこ」再発見コンクールでは応募作品212点、その中で最優秀賞1点入賞7点が選ばれ（「建築と社会」誌2009年6月号掲載）、2010年の第2回大阪「かくれたええとこ」再発見コンクールでは応募作品202点の中から入賞9点が選ばれた（「建築と社会」誌2010年5月号掲載）。どちらも審査委員長は大阪府立大学教授であり建築史家である橋爪紳也先生にお願いをした。

ツアーは2回におよぶコンクールで入賞した17ヵ所を1日で回ろうというものである。

本当に1日で17ヵ所を回りきる事ができるのか？　チャーターするバスがはたして現地のどのあたりまで入る事ができるのか？等々、懸念材料は山積。ツアーの日程を組むためにまずは「10年委員会」メンバーで7月にツアーの下見をおこなった。17ヵ所を回ることが可能かどうかについては、1ヵ所あたりの所要時間を調整すること、開催日を交通量の少ない日曜日にすることでなんとか解決できるだろうと判断。次の問題は当日チャーターしたマイクロバスを現地のどの付近まで着けることが可能か。場所によってはすれ違いも出来ない狭い道もあれば住宅地の中もある。住民に迷惑がかからないようにと委員全員で現場周辺の状況を調査しながらバスの停車位置などを念入りに決めていった。準備も万端整いツアー開催当日を迎えた。

全員バスに乗り込み9時半に集合場所のOMMビルを出発。最初に向かったのは「石畳階段と防空壕」。入賞者も数名ツアーに参加いただいたこともあり、自身の応募場所の説明をしていただくことにした。早速ここで、入賞者から場所の説明を聞く。各々思い思いに写真を撮ったらバスに乗り込み次の場所「宝泉寺と六件長屋の路地」へと移動。ここでは入賞者の方の計らいもあり六件長屋の内の一軒「銀杏庵」（1910年創建）の中を見学させていただいた。

今回の参加者はその大半が建築業界の方々ということもあり、それぞれに知識が深く、どこの見学場所でも、参加者から説明があり、



①石畳階段と防空壕


②上町台地、宝泉寺と六軒長屋間の路地


③平成の門


④西谷町アパート：戦後の都市不燃化の試みの名残


⑤半開きの水門


⑥西道頓堀モダニズム


⑦駐車場になったお風呂屋さん


⑧阿倍野ベルト地帯：細なが～い「線路と高架下と空き地」


⑨水上住居出現!?


⑩砂利道のある街角



⑪未来のスパイラル・ジャングル

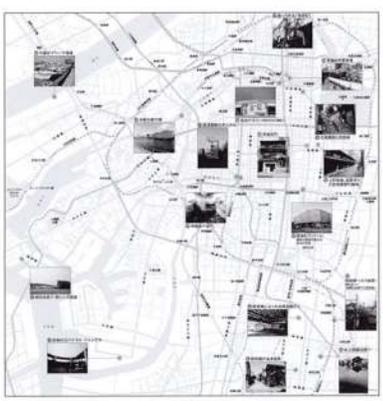
その光景は移動中のバスの中も同じだった。みんなの話は弾み、和気藹々と和んだ雰囲気でツアーは進んで行った。

概ね現地を見ると応募いただいたときの写真そのままの姿をしていたのだが、１カ所だけ、全く違う様相をした場所があった。「水上住居出現!?」がそれだ。写真にはなかった蓮の葉が「桃が池」一面に茶褐色に枯れて植わっている。“まさに!?”である。予想外の景色もまた楽しいことのひとつとなった。

西区川口の昭和橋に立つころは随分と太陽も低くなっていたが、左に住友倉庫を右に大阪中央市場を置いて、海に繋がる最後の河を眺めながら、しばし「水都大阪の誇りの風景」に浸っていた。

ほとんど日も落ちかけた夕方16時過ぎ、最後の見学地、北区菅原町に着いた私たちは記念写真を撮った。その顔はみな満足そうな笑顔だった。

（筆：片山和代）



大阪「かくれたええとこ」再発見マップ

ツアーに参加して……

●

先日はお世話になりました。お陰さまで充実した研修となりました。特に今回は、多くの見学場所が普段の目線とは違い、土地に近いところや、思わず見過ごしてしまう場所が今回の見学で新鮮に感じ取れました。大阪の足元や懐に触れられた思いです。残念ながらこういう場所は徐々に消えていくのでしょうか。普段、目線はややもすると新しいものや視点も高いところに行きがちですが、こうして意識的に地面の近くや、川の近くや、見過ごす場所に行ってそこで立ち止まることが大切なことであると再確認しました。（小池勝行）

●

日本建築協会本部の企画、何年かぶりに参加しました。ほんとうに楽しい１日でした。

大阪には高校、大学、会社と10年間京都から通いましたが、市内にはほとんど行ったことがありませんでした。大阪にもこんな「ええとこ」があったんだ！特に「石畳階段と防空壕」「水上住居出現？」河跡のマリーナ漁港」は印象に残りました。また、バスの中で隣席だった中原さんともいろいろお話をさせていただいたことも楽しかったうちのひとつでもあります。

（幡　清次）

●

大阪という都市は日本のなかでもどうしようもない混沌とした街なのだろうけど、そこに住む大阪人の気風というか風土がまたどうしようもなくたまらなく心地よいともおもうのです。大阪に生まれ育った人たちにとっては。よその都市からみた大阪はお笑いやたこ焼きやタイガース…など、メディアが無責任に表現していますが、難波の津といわれた大昔から人が行き交う街であって、京都や奈良に劣らず歴史の蓄積が多く、その重層性や多様性、住まう人の気風などが大阪という都市を魅力づけていると思います。日頃は設計事務所の都市デザイン部という部署に在籍して、都市がどうなりゃ活気づくか魅力が増すか落ち着いたたたずまいになるか考えています。ヒントはいつも街の履歴にあります。というか街のアイデンティティは歴史の事象が雄弁に物語っています。街を理解しようと思うと、とにかくその街を歩き、どんなに些細なことでも興味をもってみると、そのうちに「ええとこ」が浮かんで見えてきます。今回の建築協会の「かくれたええとこ」募集のイベントと今回のツアーは私の思いのなかで、関西、とくに大阪という街を改めて見直す一つのきっかけになったと思います。

（山本勝彦）

●

短時間で快適に数多くの「おおさかええとこ」を拝見でき感動しました。みなさんのご説明も楽しく大変勉強になりました。個人的に見て回ると行きにくい所もあり、また２～３日はかかるところを一日で回る企画は、おおさか人流に言うと「得したな」と思いました。（和田康由）



⑫再生を待つ 赤レンガ倉庫



⑬河跡のマリーナ漁港



⑭水都大阪の誇り





▲⑯残った町名「菅原町」

◀⑮多重的河原風景



お疲れさまでした♬



＊北浜テラスは車中より見学のため掲載していません。

写真提供：佐藤吉洋

■所在地

①大阪市中央区石町1-3　②大阪市中央区龍造寺町7-17～19　③大阪市中央区安堂寺町2　④大阪市中央区谷町9-4-7　⑤大阪市西区南堀江1-6
⑥大阪市西区南堀江1　⑦大阪市阿倍野区阪南町1-17　⑧大阪市阿倍野区美章園駅　⑨大阪市阿倍野区桃ヶ池1　⑩大阪市阿倍野区阪南町4-11辺リ
⑪大阪市大正区船町1　⑫大阪市港区海岸通2-6　⑬大阪市此花区伝法5　⑭大阪市西区川口2　⑮大阪市北区菅原町3
⑯大阪市北区菅原町6　*大阪市中央区北浜1-1-12

お知らせ information

▶もうひとつの京都―モダニズム建築から見えてくるもの―

1200年の歴史を持つ京都は、木造文化の伝統と歴史的町並みが連続してきた稀有な都市である。その京都においてモダニズムの思想がいかに受容されたのか、京都という場所を建築家たちはどのようにとらえたのか、明治以降の近代化と西欧化の流れの中でモダニズムへの転換はどのよう進んだのかなどを概観する展覧会。

1920年から1970年代に京都に建てられたモダニズム建築―京都中央電話局西陣分局から京都信用金庫各支店まで―の軌跡をたどろうとする試みである。

■展覧会「もうひとつの京都」

会　期　2011年2月7日～5月8日(日)
10：00～17：00
日曜日・祝日休館（ただし4/29～5/8の連休中は開館）
入試日の3/12は休館

会　場　京都工芸繊維大学　美術工芸資料館
京都市左京区松ヶ崎御所海道町
075-724-7924

入館料　200円、大学生150円、高校以下無料

■シンポジウム

「モダニズム建築と京都をめぐって」

日　時　2011年4月9日(土)
14：00～17：00

会　場　京都工芸繊維大学60周年記念館

定　員　200名（当日先着順）

討論者　内藤　　廣(東京大学大学院教授)
前田　忠直(京都大学名誉教授)
石田潤一郎(京都工芸繊維大学教授)

司　会　松隈　　洋(京都工芸繊維大学教授)

▶竹原義二／原図展　素の建築

「すべては無に始まり有に還る」

建築家・竹原義二氏は、日本の伝統的建築の中にある「素」のままの構造美・素材美を現代の職人の手仕事により実現することを目指し、日本の建築に伝統的に受け継がれてきた空間の成り立ちや作法を再解釈することで、現代の建築空間に再構成してきた。30余年にわたる設計活動の中で手がけた作品は住宅を中心に150作以上に及ぶ。本展では竹原氏の手書き原図を多数展示する。

また、氏の建築のすべてを撮影してきた絹巻豊氏の写真や、100分の1スケールの模型が展示され、記念講演会も予定されている。

■竹原義二／原図展　素の建築

会　期　2011年3月9日(水)～4月10日(日)
10：00～17：00　火曜日休館

会　場　大阪くらしの今昔館
06-6242-1170
大阪市北区天神橋6-4-20
住まい情報センター8階

観覧料　企画展―大人200円、高大生100円
常設展―大人600円、高大生300円

■記念講演会「素の建築」／竹原義二

日　時　2011年3月21日(月・祝日)
13：30～15：30

会　場　住まい情報センターの3階ホール

定　員　240名（先着順・参加費無料）

申込み　ウエブサイトまたは往復ハガキにて、所要事項を記入して事前申込制。
http://house.sumai.city.osaka.jp/museum/
〒530-0041大阪市北区天神橋6-4-20
大阪くらしの今昔館「記念講演会」係

▶西宮市大谷記念美術館　新収蔵品展

2009年度に新たに西宮市大谷記念美術館にコレクションとして加わった作品を紹介している。具体美術協会に参加してエネルギッシュな作品を生み出した白髪一雄、抽象画家の津高和一（1911～1995）、2009年に亡くなった書家の加登亙川（かとこうせん）などの作品に加え、西宮や阪神間ゆかりの画家の作品も展示される。

会　期　2011年2月19日～3月21日(月・祝)
10：00～17：00　水曜日休館

会　場　西宮市大谷記念美術館
西宮市中浜町4-38

入館料　300円、高大生200円、小中生100円



白髪一雄
「女幽霊之図」
1977年

▶特集展示「幕末大坂の絵師　森一鳳」

円山応挙の高弟・森徹山の跡を継ぎ、写生画風の作品を描いて大坂で活躍した絵師の森一鳳（1798～1871）は、花や鳥など自然をモチーフにした絵を描き、季節感あふれる華麗な作品を残している。

大阪歴史博物館で開催される本展は、幕末に生きた大坂の人々がどんな絵画を好み、そこにどのような願いを込めていたのか、森一鳳の作品を通して紹介する。

会　期　2011年2月23日～**4月4日**(月)
　　9：30～17：00　火曜日休館
会　場　大阪歴史博物館8階特集展示室
　　大阪市中央区大手前4-1-32
観覧料　600円、高大生400円
　　中学生以下・大阪市内在住の65歳以上は無料
出　品　約30点

招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。



「藻刈舟図」1幅
（大阪歴史博物館蔵）

江戸時代末期～明治時代初期。
本来、藻刈りは舟の通航を妨げないように水草を刈ることを言うが、森一鳳の藻刈舟図は「藻を刈る一鳳」＝「儲かる一方」として、縁起の良い画題としてもてはやされた。

▶平成23年建築設備士試験は6月に実施

建築設備士は、建築設備全般に関する知識及び技能を有し、建築士に対して高度化、複雑化した建築設備の設計や工事監理に関する適切なアドバイスを行える資格者として位置づけられている。この制度は昭和58年5月、建築士法の改正時に創設され、㈱建築技術教育普及センターが実施しているもの。

試験日　第一次試験（学科）
　　2011年6月19日（日）9：45～17：10
　　第二次試験（設計製図）
　　2011年8月21日(日) 10：45～16：30
試験地　東京都、名古屋市、大阪府など5地域
申込書　受験申込関係書類は2011年3月31日まで㈱建築技術教育普及センターの各支部ほかで販売、1セット1050円。
受　付　2011年3月31日までに㈱建築技術教育普及センター本部（〒104-0031東京都中央区京橋2-14-1）へ。
　　受験手数料34,650円。

http://www.jaeic.jp/で制度案内、受験・資格の情報詳細を提供中。

▶第6回NISCイソバンドデザインコンテスト

日鉄住金鋼板㈱が主催する標記コンテストは、同社の製品イソバンド・エスガード・イソダッハを使用した建築物の完成写真によるもので、特性を生かし新しい時代に向けてのデザイン性、機能性を追求し、感性豊かに表現した作品を求めている。

第6回では2008年5月1日～2011年4月28日までに竣工した作品を対象とする。

登録締切　2011年4月15日
作品締切　2011年4月28日18時まで
　　作品提出はデジタル不可。作品のカラー完成写真を「応募台紙」に貼ったものを〒113-0034東京都文京区湯島2-30-8㈱建報社へ。
応募資格　国内・国外に建つイソバンド・エスガード・イソダッハを使用した作品に限る。
　　応募は設計者・施工者・施主のいずれかによる。1物件につき1回・1作品
応募方法　応募登録サイトhttp://www.kenchiku.co.jp/niscから事前登録が必要。
審査委員　芦原太郎（建築家）
　　小嶋一浩（建築家）
　　武田　厚（日鉄住金鋼板㈱代表取締役社長）
賞　金　グランプリ1点500,000円、
　　部門賞2点各300,000円ほか

▶「第4回サステナブル住宅賞」入賞作品

㈱建築環境・省エネルギー機構は、サステナブルな住宅のより一層の普及を図ることを目的とし、新築部門と改修部門に分けて賞を設けて作品を募集している。

第4回は、2008年11月1日以降に竣工または増改築の工事が完了した戸建て住宅を対象に、2010年10月15日まで応募を受け付け、応募32作品を審査（委員長：鎌田元康東京大学名誉教授ほか10名）した結果、国土交通大臣賞などあわせて10作品を入賞とした。

国土交通大臣賞には下記の2作品が入賞。

新築部門—「松河戸の家」（愛知県春日井市）
　　建築主：田中英紀
　　設計：笹野空間設計
　　施工：誠和建設

改修部門—「羽生の家」（埼玉県羽生市）
　　建築主：髙野孝雄
　　設計：安井妙子あとりえ
　　施工：阿部和工務店

▶3度目のDBJ環境格付融資

岐阜県瑞穂市、三重県いなべ市の工場で耐火被覆材・保温断熱材の製造販売及び関連工事施工を主力とする日本インシュレーション㈱は、その環境への取り組みが評価され、日本政策投資銀行（「DBJ」）から2011年1月31日付けでDBJ環境格付融資を受けた。

今回は①LCA評価に依拠した環境配慮型製品の開発目標に基づき、製品の環境性能を絶えず改善している②製造工程及び製品使用後に発生するけい酸カルシウム廃材のリサイクルを広域認定制度により推進しゼロエミッションを達成している—等が高く評価された。

「DBJ環境格付」は、DBJが開発したスクリーニングシステム（格付システム）により企業の環境経営度を評点化、優れた企業を選定し得点に応じて3段階の適用金利を設定する、「環境格付」の専門手法を導入した世界で初めての融資メニューである。

▶住空間を提案する国際見本市2011年出展募集中

「LIVING & DESIGN」すまいのリノベーション—TOTAL INTERIOR—が、今年もインテックス大阪において開催される。

リビング&デザインは、プロダクトデザイナーの喜多俊之氏をプロデューサーとして2009年9月にインテックス大阪で創設開催された住空間を提案する国際見本市で、3回目の今年は、テーマごとのコンセプトに沿った展示を行うことにより、出展者にとっては統一されたテーマの中で出展することによって出展物の見せ方に効果を持たせる工夫がなされている。

会　期　2011年**9月14日**(水)～**17日**(土)
　　10：00～18：00
規　模　出展者数300社、展示面積12000㎡
　　目標来場者数2万人

出展対象は、住宅・リフォーム関連、家具、照明、インテリア家電、ホームテキスタイル、インテリアアクセサリー、住宅設備機器、インテリア及び建築デザイン。

出展の問い合わせは、㈳大阪国際見本市委員会事業部（TEL06-6612-1761）へ。

日本建築協会 月間の動き 平成23年1月分

理事会

第7回常任理事会
1月27日（木）16：00～17：30
出席者　中井会長ほか8名
議　事（1）平成22年度収支見込
（2）平成23年度常設委員会事業計画
（3）後援名義等の使用承諾
（4）平成23年度総会理事会常任理事会日程
（5）新法人格取得に伴う課題について
（6）その他報告事項等

編集委員会

第10回編集委員会
1月12日（水）18：00～19：30
出席者　設楽委員長ほか5名
議　事（1）2月号特集「BIMは設計を変革するか？」の報告
（2）3月号特集「東海支部」の報告
（3）4月号特集の報告
（4）各小委員会・分科会からの報告
（5）その他
（6）収支状況報告

第10回法令分科会
1月19日（水）15：00～17：20
出席者　吉田純幹事ほか5名
議　事（1）「法令コーナー」の企画
（2）2011年10月号法令特集の企画
（3）情報交換

第2回建築系分科会
1月11日（火）19：00～20：30
出席者　静幹事ほか3名
議　事　2011年7月号特集企画案検討

第3回建築系分科会
1月26日（水）19：00～21：15
出席者　静幹事ほか4名
議　事　2011年7月号特集テーマ決め

第1回計画系分科会
1月5日（水）18：30～21：00
出席者　飯田幹事ほか1名
議　事　2011年4月号計画系特集の企画

第2回計画系分科会
1月18日（火）18：30～20：30
出席者　飯田幹事ほか2名
議　事　2011年4月号「まちなかのサードプレイス」特集の企画

第8回設備分科会
1月14日（金）18：00～20：00
出席者　梶井委員ほか4名
議　事（1）「設備の頁」の企画
（2）講習会の企画
（3）見学会の企画
（4）2011年6月号設備特集の企画
（5）新企画の提案
（6）超高層・高層マンションやオフィスビル計画時への提案
（7）“測定機器シリーズ”

第1回インテリア・住宅系分科会
1月28日（金）18：30～20：30
出席者　神谷幹事ほか1名
議　事（1）5月号インテリア・住宅系分科会特集の企画

第9回作品作風小委員会
1月27日（木）19：00～20：15
出席者　池上副委員長ほか3名
議　事（1）作品の選定
（2）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（3）「gallery」掲載報告・予定
（4）前回の編集委員会の報告
（5）その他

第10回広告企画小委員会
1月12日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか3名
議　事（1）2月号特集「BIMは設計を変革するか？」
（2）3月号特集「東海支部」
（3）広告の掲載状況
（4）新シリーズ頁検討
（5）その他
（6）収支状況報告

第10回10年委員会
1月13日（木）19：00～20：00
出席者　設楽委員長ほか7名
議　事（1）「第5回学生のための見学会」の検討
（2）大阪「かくれたええとこ」そうせい（創生）プロジェクトの進め方

事業委員会

第6回情報見学小委員会
1月13日（木）18：00～18：45
出席者　瀬戸川委員長ほか10名
議　事（1）「甲子園球場見学会＋スタジアムツアー」実施報告
（2）「関西大学堺キャンパス」見学会について
（3）「大阪駅近辺」見学会の検討
（4）「茶室見学会」について

出版委員会

第9回出版委員会
1月20日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか5名
議　事（1）プロのノウハウと特装本の経過報告
（2）進行中のテーマについて
（3）その他

教育委員会

第3回工高生教育小委員会
1月21日（金）18：00～20：00
出席者　神野副委員長ほか5名
議　事（1）第57回工高生デザインコンクール募集規定原案の検討
（2）今後の作業予定等
（3）その他

特別委員会

第3回　史料研究会（再読 関西近代建築）
1月17日（月）18：00～19：40
出席者　山形委員長ほか4名
議　事（1）今後の連載企画内容検討
（2）連載内容について

第18回　関西の建築界群像
1月10日（月）14：00～17：00
出席者　國本暁彦（インタビュアー）ほか5名
議　事　「群像」登場者の人間像に迫るためのインタビュー
長坂　大　氏

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕
真鍋裕子　㈱ユアン アーキテクツ一級建築士事務所

●訃報
〔個人正会員〕
山本米夫 氏　平成23年1月25日逝去・享年86歳

『作品作風頁』協賛広告

◆◇熊本地方合同庁舎◆◇

共同カイテック株式会社

TOTO株式会社

トステム株式会社

株式会社ニュースト

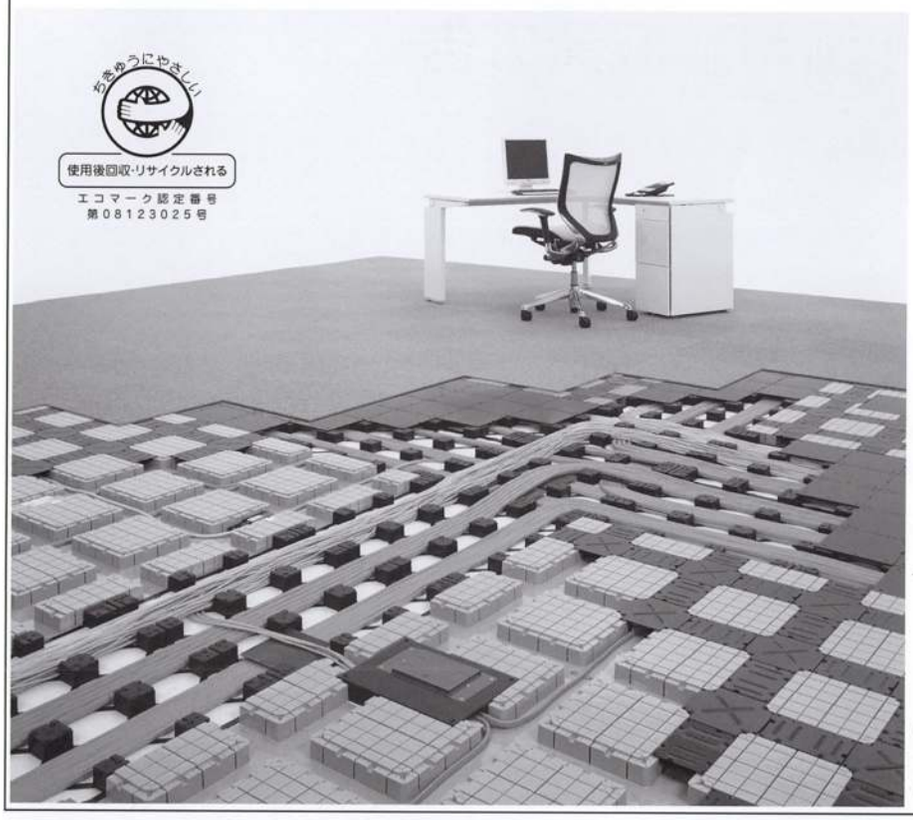
◆◇甲南学園甲南小学校 新本館◆◇

郡リース株式会社

コクヨファニチャー株式会社

コトブキシーティング株式会社

薄型ＯＡフロアなのにこんなＢｉｇな配線容量！



置敷式溝配線ＯＡフロアシステム

ネットワークフロア

・・・納入実績 1,000 万㎡突破 !! ・・・

特長

- ●(社)公共建築協会　品質性能評価品
- ●業界唯一の安心の 10 年保証
- ●耐久性に優れたロングライフ製品
- ●ガタツキ音が発生しない快適な歩行感
- ●床高 40mm と 29mm の薄型設計
- ●リユース・リサイクル実施中

（材 質）超高強度軽量コンクリート＋鋼板
（仕 様）40・29 ㎜^{H}×600 ㎜^{W}×600 ㎜^{L}

URL http://www.ky-tec.co.jp

人と社会に快適テクノロジー
KY-TEC
共同カイテック株式会社

（本　社）〒150-0011 東京都渋谷区東 3-24-12
【TEL】03-3409-2335　【FAX】03-3409-2908
（営業所）札幌・仙台・東京・神奈川・名古屋・大阪・広島・福岡

あしたを、ちがう「まいにち」に。
TOTO



さらに美しく、さらに快適に、新型アクアオート。

TOTOのセンサー方式自動水栓「アクアオート」に、新しくオールインワンタイプが登場しました。

足元すっきり。

独自開発のコンパクトな発電機とサーモスタットユニットをスパウト（吐水口）内部に搭載。カウンター下への機能部設置が不要で足元がすっきりします。



水温調節・水温表示（サーモタイプのみ）

手元のハンドルで温度調節ができ、サーモスタット内蔵なので設定温度も安定。また、水の流れを利用した電力を使いLEDが点滅し、水温にあわせて色が変化します。


温度調節ハンドル


発電・水温表示LED

商品のお問い合わせは　TOTOお客様相談室　0120-03-1010　受付時間 9:00～17:00（夏期休暇・年末年始を除く）
TOTOホームページ www.toto.co.jp/

TOTO GREEN CHALLENGE

TOSTEM

カーテンウォールが、ここまで
スリム&シンプルに。

E-SHAPEは、スリムな55mm見付でFix部から
可動部にいたるまで統一。設計者の想いを自由に
表現できるシンプルなカーテンウォールです。



E-SHAPE
イーシェイプ

トステムビル用商品インターネットホームページ　http://www.tostem.co.jp/bldg/
ビル営業開発部 関西営業開発部　大阪府大阪市住之江区南港北1-7-62　TEL:06-6615-2730

トステム株式会社

熊本合同庁舎A棟





AW
ALUTAS WOOD SERIES

木・アルミ複合断熱スクリーン

人・地球・未来のために・・・
“環境と断熱製品”の提案。



株式会社 ニュースト

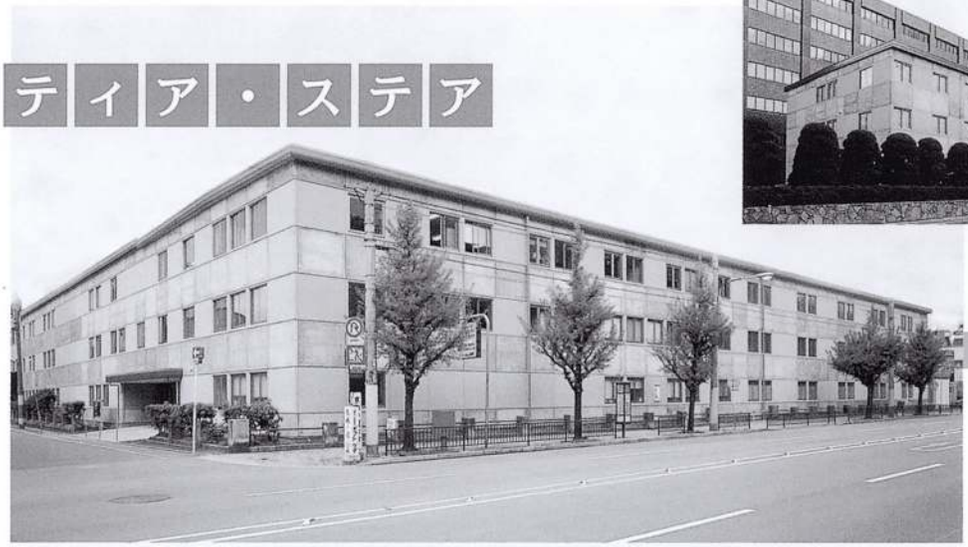
http://www.newxt.co.jp

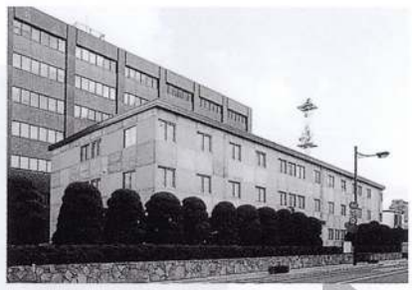
・本　　社 〒387-0006 長野県千曲市粟佐1603番地　TEL:026-261-3870　FAX:026-261-3865
・東京支店 〒125-0062 東京都葛飾区青戸8-3-5MK東京ビル2F　TEL:03-5650-1771　FAX:03-3690-1213
・大阪支店 〒564-0043 大阪府吹田市南吹田3-6-4　TEL:06-6310-9620　FAX:06-6310-9623
・営業所　札幌・仙台・新潟・長野・名古屋・福岡

「予算が限られている」「今すぐ建てたい」「一定の期間だけ必要」
郡リースのシステム建築シリーズが解決します。

高品質、ローコスト、短工期の3大メリットをそなえ、環境にやさしい、リサイクル・リユースも可能なシステム建築であらゆるニーズに対応できます。

アルティア・ステア





リユース例

GRCの大型パネルを採用した、KOHRIの独自開発による最高級システム建築。工期は在来工法の半分です。

KOHRI　郡リース株式会社大阪支店　TEL06-6444-2161　〒550-0002　大阪市西区江戸堀3-3-2　コーリ江戸堀ビル
FAX06-6445-1680　http://www.kohri.co.jp/　E-mail：osaka@kohri.co.jp



「エコなオフィス」って、いざ始めてみると
「不便」や「我慢」を感じてしまうもの。
もっと楽しんで、もっと創造的に、エコな視点を
オフィスに取り入れられないだろうか。
「エコ」で「クリエイティブ」なオフィスの第一歩、
『エコライブオフィス』をぜひ覗いてみてください。
きっと、いろんな「不思議」に出会えるはず。
例えば…

コクヨは、なぜ庭（ガーデン）で働くの？・・・

百聞は一見にしかず
答えは現場にある！

こんなエコライブオフィス、ちょっと覗いてみませんか！
ご見学お申し込みは下記ホームページで
www.kokuyo.co.jp/showroom/

キーワードは、
「CO2削減」「意識改革」「四季」「光」「風」「自然との共生」

eco live office shinagawa

コクヨ株式会社　コクヨファニチャー株式会社　www.kokuyo.co.jp お客様相談室 tel.0120-201594 fax.0120-060660

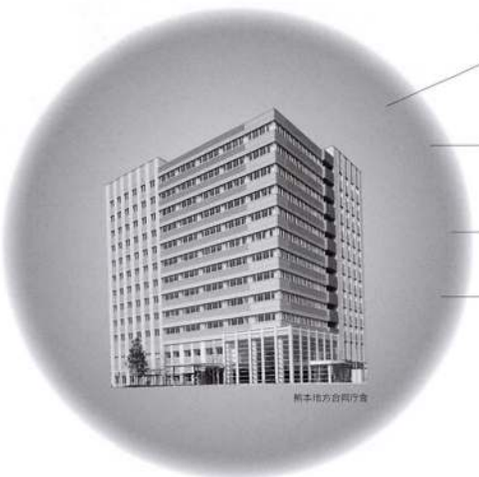
人が集うところに、コトブキのイスがあります。

K•O▲T■O•B▲U■K•I

www.kotobuki-seating.co.jp

コトブキシーティング株式会社

サポートセンター　TEL : 0800-170-7111　FAX : 0800-170-8222　E-mail : seating@kotobuki.co.jp



KY-TEC

TOTO

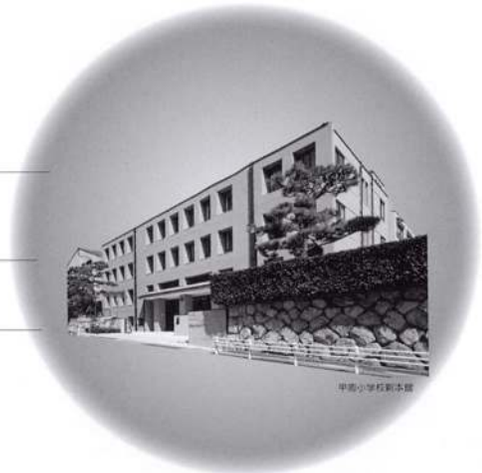
TOSTEM

AW
ALUTAS WOOD SERIES

KOHRI

K•O▲T■O•B▲U■K•I

KOKUYO
ひらめき・はかどり・ここちよさ



空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　社　名古屋・福岡
支　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業　ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業　SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作

株式会社NPCコーポレーション

本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代)　fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代)　fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代)　fax:(03)5776-7733
（旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱）

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

日本建築協会企画・販売

出版図書一覧

1917年３月に創設された日本建築協会（当時・関西建築協会）は、すでに昭和初期には大阪近辺で住宅博覧会や建築講演会を開く一方、当時は入手しにくかった建築の情報を図書の出版という形で会員に提供していた。

＊

以後、創立周年記念事業として、その時代の動きをとらえて単行本を出版している。

50周年、60周年、70周年、そして80周年に、図書の出版が企画され、現在も継続して発行・販売されている出版物は、以下のとおり。

＊

購入希望者は、㈳日本建築協会事務局（TEL06―6946―6981、FAX06―6946―6984）まで。

日本建築協会創立70周年記念出版

住宅近代化への歩みと日本建築協会 1988年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会創立75周年記念出版

工高生デザインコンクール入選作品集 1992年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格2,000円

昭和生まれ　関西の建築家50 1987年

Ａ４判　企画・発行：日本建築協会　本体価格1,500円

日本建築協会建築クラブ朝食会300回記念講演記録集

講演記録集 **話のはなし** 1997年

Ｂ６判５分冊　企画：日本建築協会建築クラブ　販売価格2,500円（税・送料込み）

民間（旧四会）連合協定

工事請負契約約款（平成21年６月改訂）

工事請負契約書・仲裁合意書・契約書使用上の留意事項・建設工事に係る資材の再資源化等に関する法律第13条および省令第4条に基づく書面

販売単位：２部１単位とする

価　　格：１単位700円（税込）送料は実費

日本建築協会事務局（06-6946-6981）で販売

近刊 平成21年3月10日発行

写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント

管理の良い現場、悪い現場が一目瞭然！
現場のブロークンウィンドウズを見逃すな

著者　玉水　新吾
四六判　224ページ
定価　1,900円＋税

最新刊 平成22年11月10日発行

プロが教える住宅の植栽

門廻り、アプローチ、壁、インテリア、屋上、住空間で緑（樹木・草花）を効果的に使いこなすための知識と考え方

著者　藤山　宏
Ｂ５判　176ページ
定価　2,800円＋税

日本建築協会創立60周年記念事業「建築技術選書」姉妹篇・四六判２色刷イラスト入

〈プロのノウハウ〉シリーズ

企画：日本建築協会　発行：学芸出版社　本体価格￥1,600～￥2,800

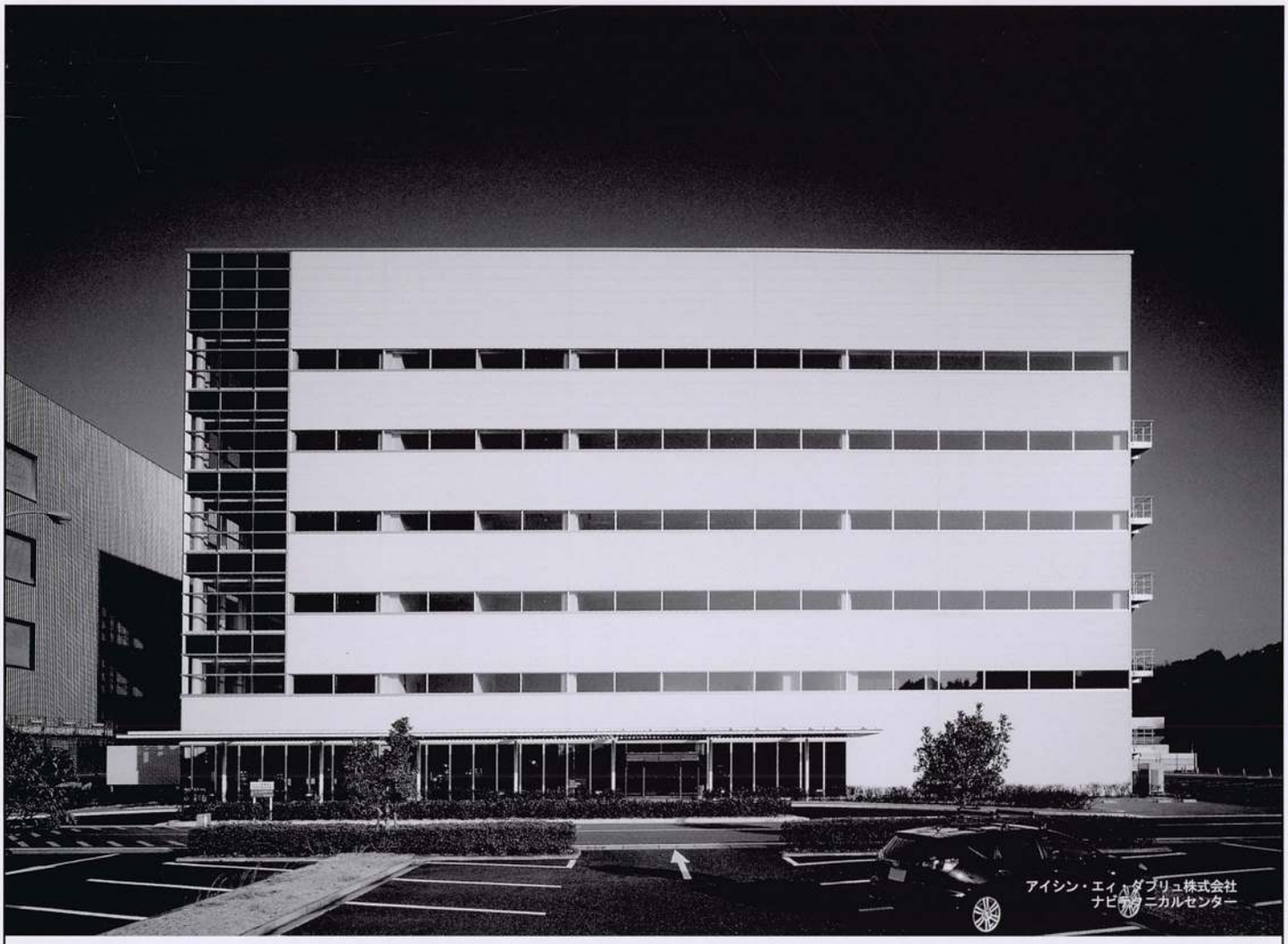
- 衛生設備のトラブル50　建築設備トラブル研究会
- 鉄筋工事・本音の現場学　荒川治徳
- 建築と音のトラブル　中川清ほか
- 建築工事の祭式　「建築工事の祭式」編集委員会
- 飛躍する構造デザイン　渡辺邦夫
- 改訂版　建築物の消防法を読みこなすコツ　高木任之
- プロが教えるキッチン設計のコツ　井上まるみ
- 現場で学ぶ　住まいの雨仕舞い　玉水新吾
- 住宅エクステリアの100ポイント　藤山　宏
- 第三版　建築基準法を読みこなすコツ　高木任之
- 写真マンガでわかる 建築現場管理100ポイント　玉水新吾
- 建築の現場管理システム　伊東貞夫
- 新版コンクリート工事のチェックポイント100　加賀秀治
- 建築基準法の性能規定を読みこなすコツ　高木任之
- 第二版 環境と共生する建築25のキーワード　大西正宜
- 木造住宅のしくみ　在来工法の基本と応用　浅野平八・東　敏博
- インテリアコーディネートの100ポイント　町田ひろ子監修／松本　茂・村元俊子著
- 木づくりの常識非常識　上村　武
- 建築トラブルにみる常識非常識　荒川治徳
- 第三版　都市計画法を読みこなすコツ　高木任之
- 建築主が納得する住まいづくり　玉水新吾
- プロが教える住宅の植栽　藤山　宏

日本建築協会創立70周年記念事業・B5判

選書特装版

企画・日本建築協会　発行・学芸出版社　本体価格￥3,000～￥4,000

- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈建築篇〉　「建築漏水」編集委員会
- 水にまつわるトラブルの事例・解決策〈設備篇〉　「設備漏水」編集委員会
- 建物の汚れ－トラブル事例と解決策　「建物の汚れ」編集委員会
- 建築デザインのための構造計画　須賀好富
- 入門・建築積算　生島道春
- 建物の結露－トラブル事例と解決策　「建物の結露」編集委員会

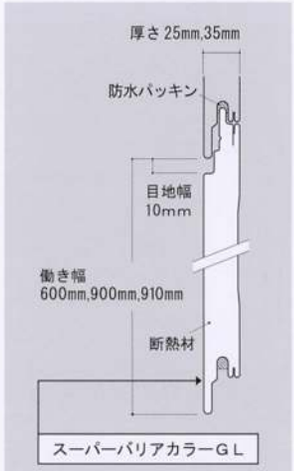


断熱外装材 ヨドファインパネル

パネル調のフラットな意匠で、スマートな仕上がりと高級感を演出。

両面鋼板仕様のサンドイッチパネル。
事務所・倉庫・工場などに最適。

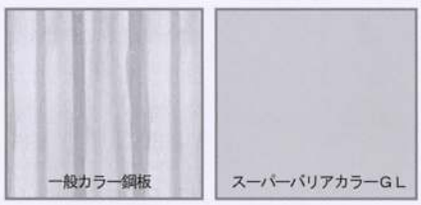
働き幅は600mm・900mm・910mm、長さ最大10mまで対応。
縦張り横張りどちらも可能。



雨筋がつきにくい耐汚染性鋼板！

スーパーバリアカラーGL(汚れんコーティング)

表面材に耐汚染性に優れた、汚れにくく洗い易いカラー鋼板。親水性と高い架橋性が特長の塗膜形成で、ベースメタルには耐久性の高いガルバリウム鋼板を採用。



スチール! & アイデア!
淀川製鋼

本　社　大阪市中央区南本町4丁目1番1号　〒541-0054 ☎(06)6245-1256
東京支社　東京都中央区新富1丁目3番7号　〒104-0041 ☎(03)3551-7941
http://www.yodoko.co.jp